

第6節 陸生動物

事業実施区域及びその周辺には、重要な陸生動物等の生息環境が存在するため、工事の実施（重機の稼働、資材の運搬、樹木の伐採・処理、土地の造成、工事用道路等の建設）及び土地の存在及び供用（造成地の存在、土地の利用、発生車両の走行）による影響が考えられることから、調査、予測及び評価を行った。

6.1 工事の実施（重機の稼働、資材の運搬、樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）及び土地の存在及び供用（造成地の存在、土地の利用及び発生車両の走行）に係る陸生動物

1) 調査

(1) 調査の手法

① 調査した情報

a) 動物相の状況

動物相（哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、陸上昆虫類、クモ類、陸生貝類、土壌動物）の状況について調査した。

b) 重要な種等の状況

重要な種等の状況（重要な種等の生態、重要な種等の分布及び生息の状況、重要な種等の生息環境の状況）について調査した。

② 調査の手法

調査は、既存資料調査及び現地調査により行った。調査手法は以下のとおり。

a) 動物相の状況

動物相の状況の調査は、表 7-6-1 に示す手法により現地調査を実施した。

表 7-6-1 現地調査の手法

項目	調査手法	調査手法の解説
哺乳類	目撃法	調査地域を任意に踏査し、目視等により生息種の確認・記録を行った。
	フィールドサイン法	調査地域を任意に踏査し、糞、足跡、食痕、爪痕、営巣の跡等を目視で確認し、生息種の確認・記録を行った。
	トラップ法 (シャーマントラップ)	調査地域に、主にネズミ等の小型哺乳類を対象に、生け捕り用罠(シャーマントラップ)を設置し、捕獲することにより生息種の確認・記録を行った。
	トラップ法 (自動撮影カメラ)	主に夜行性哺乳類を対象に、調査地域の哺乳類の移動空間と想定される地点付近に赤外線を用いた無人撮影装置を設置し、写真撮影することにより生息種の確認・記録を行った。
鳥類	直接観察	調査地域を任意に踏査し、目視又は鳴き声等により生息種の確認・記録を行った。
	ラインセンサス法	調査地域に調査ルートを設定し、一定速度で歩きながら、一定範囲内において出現した鳥類を目視や鳴き声により生息種の確認・記録を行った。
	定点観察法	調査地域の見通しがきく場所等に観察地点を定め、そこからの観察により生息種の確認・記録を行った。
鳥類 (猛禽類)	定点観察法	調査地域の見通しがきく場所等に観察地点を定め、そこからの観察により生息種の確認・記録を行った。
爬虫類	直接観察及び採取	調査地域を任意に踏査し、目視等により生息種の確認・記録を行った。
両生類	直接観察及び採取	調査地域を任意に踏査し、目視又は鳴き声により生息種の確認・記録を行った。
陸上昆虫類	直接観察及び採取	調査地域を任意に踏査し、見つけ採り、スウィーピング、ビーティング等による任意採集により生息種の確認・記録を行った。
	ライトトラップ法	調査地域に設定した地点において、夜間に光源を置き、これに集まる種(主にガ類、コウチュウ類等の走光性昆虫)を採集することにより生息種の確認・記録を行った。
	ベイトトラップ法	調査地域に設定した地点において、誘因餌(ベイト:乳酸菌飲料・ビール:4個、清涼飲料水・酢:3個、腐肉:3個)を入れたプラスチックカップ(計10個/地点)を地中に埋めて一晩放置し、翌日誘引された種(主にオサムシ類、ゴミムシ類、アリ類等の地表徘徊性昆虫)を採集することにより生息種の確認・記録を行った。
クモ類	直接観察及び採取	調査地域を任意に踏査し、目視等により生息種の確認・記録を行った。
陸生貝類	直接観察及び採取	調査地域を任意に踏査し、目視等により生息種の確認・記録を行った。
土壌動物	コドラート法	調査地域の複数の地点において採取した土壌を室内に持ち帰り、ツルグレン装置を用いて土壌動物を捕集することにより、生息種の確認・記録を行った。

b) 重要な種等の状況

(a) 重要な種等の生態

重要な種等の生態については、表 7-6-2 に示す図鑑、その他の資料の収集により整理した。

表 7-6-2 既存資料一覧

資料名	発行年	発行元
レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生動物ー	平成 26 年 9 月 平成 27 年 2 月	(株)ぎょうせい
環境省レッドリスト 2017 補遺資料	平成 29 年 10 月	環境省自然環境局野生生物課 希少種保全推進室
三重県レッドデータブック 2015 ～三重県の絶滅のおそれのある野生生物～	平成 27 年 3 月	三重県農林水産部 みどり共生推進課
愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020ー動物編ー	令和 2 年 3 月	愛知県環境局環境政策部 自然環境課
原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>	平成 7 年 3 月	(株)保育社

(b) 重要な種等の分布及び生息の状況、重要な種等の生息環境の状況

重要な種等の分布及び生息の状況、重要な種等の生息環境の状況については、表 7-6-3 (1) ~ (2) に示す選定基準に該当する種について、「a) 動物相の状況」の調査と併せて行った。

表 7-6-3(1) 重要な種の選定基準

番号	文献及び法律名	選定基準となる区分
①	文化財保護法（昭和 25 年 5 月 30 日法律第 214 号） 三重県文化財保護条例（昭和 32 年三重県条例第 72 号） 愛知県文化財保護条例（昭和 30 年 4 月 1 日条例第 6 号） 木曾岬町文化財保護条例（平成 21 年 12 月 18 日条例第 32 号） 桑名市文化財保護条例（平成 16 年 12 月 6 日条例第 187 号） 弥富市文化財保護条例（昭和 47 年 6 月 30 日条例第 17 号）	国特：国指定特別天然記念物 国天：国指定天然記念物 三天：三重県指定天然記念物 愛天：愛知県指定天然記念物 木天：木曾岬町指定天然記念物 桑天：桑名市指定天然記念物 弥天：弥富市指定天然記念物
②	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成 4 年 6 月 5 日法律第 75 号）	国際：国際希少野生動植物種 国内：国内希少野生動植物種 緊急：緊急指定種
③	三重県自然環境保全条例（平成 15 年三重県条例第 2 号）	指定：三重県指定希少野生動植物種
④	環境省レッドリスト 2020 の公表について（令和 2 年 3 月 27 日、環境省）	CR+EN：絶滅危惧 I 類（絶滅の危機に瀕している種） CR：絶滅危惧 I A 類（ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種） EN：絶滅危惧 I B 類（I A 類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種） VU：絶滅危惧 II 類（絶滅の危険が増大している種） NT：準絶滅危惧（現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種） DD：情報不足（評価するだけの情報が不足している種） LP：絶滅のおそれのある地域個体群（地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの）

表 7-6-3(2) 重要な種の選定基準

番号	文献及び法律名	選定基準となる区分
⑤	三重県レッドデータブック 2015～三重県の絶滅のおそれのある野生生物～(平成 27 年 3 月、三重県農林水産部みどり共生推進課)	CR：絶滅危惧ⅠA類（ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種） EN：絶滅危惧ⅠB類（ⅠA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種） VU：絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種） NT：準絶滅危惧（生息条件の変化によっては、「絶滅危惧種」に移行する要素を持つ種） DD：情報不足（評価するだけの情報が不足している種） なお、繁殖期と越冬期で個体数が著しく変わる種類については、それぞれの時期で評価されている。
⑥	愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020—動物編—（令和 2 年、愛知県環境局環境政策部自然環境課）	CR：絶滅危惧ⅠA類（絶滅の危機に瀕している種。ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの） EN：絶滅危惧ⅠB類（絶滅の危機に瀕している種。ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの） VU：絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種） NT：準絶滅危惧（存続基盤が脆弱な種） DD：情報不足（「絶滅」「絶滅危惧」「準絶滅危惧」のいずれかに該当する可能性が高いが、評価するだけの情報が不足している種。） LP：その種の国内における生息状況に鑑み、愛知県において特に保全のための配慮が必要と考えられる 特徴的な個体群 なお、鳥類については、繁殖、越冬、通過の時期で評価が異なることから、評価対象個体群ごとに評価されている。

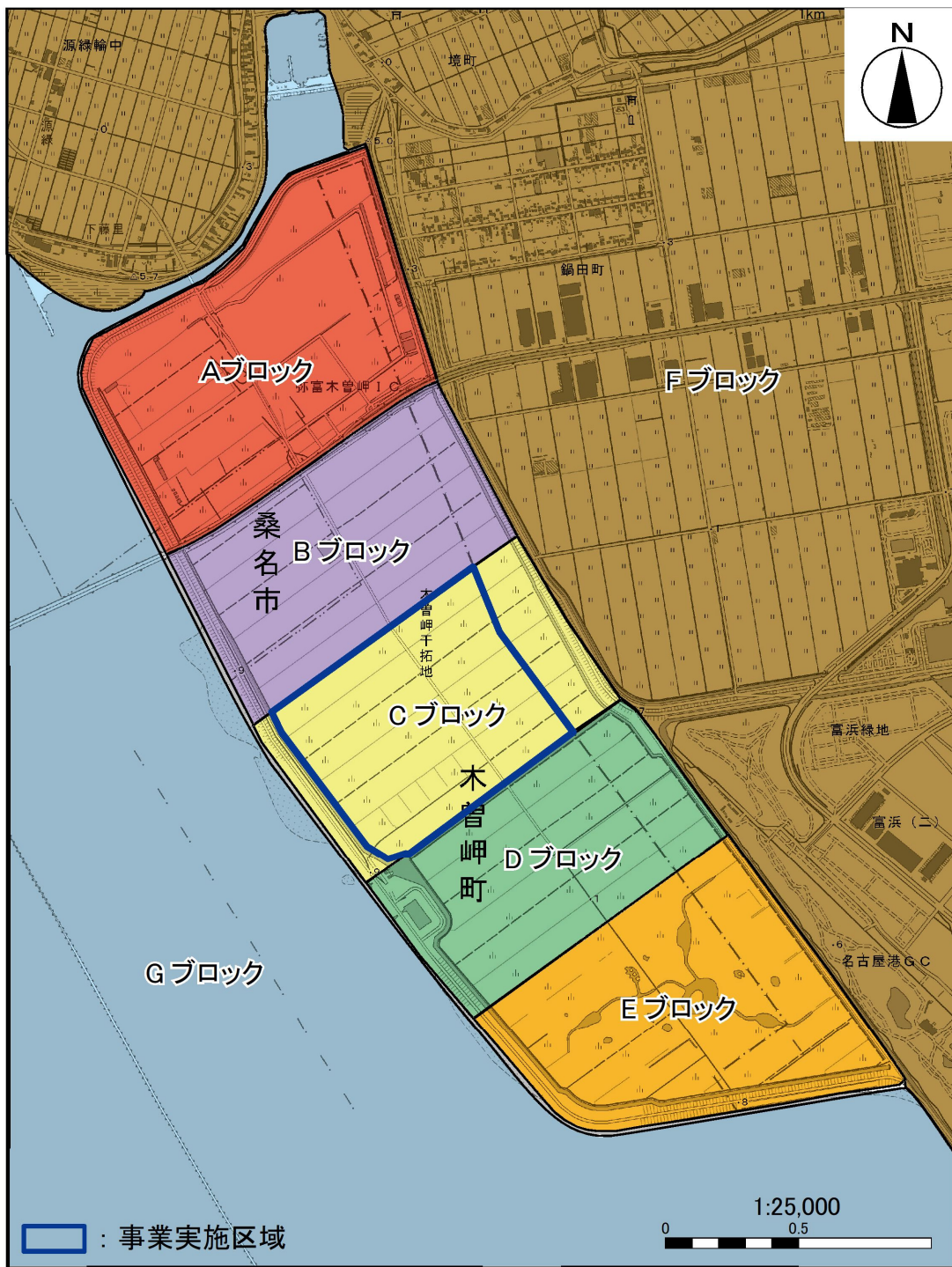
③ 調査地域

調査地域は、対象事業の実施が、陸生動物及びその生息環境に影響を及ぼすおそれがあると認められる地域及びその地域と自然的社会的に一体と考えられる地域として、事業実施区域及びその周辺とした。

調査にあたっては、調査地域の地形、植生、土地の利用状況等を踏まえ、調査地域を7つに区分した。ブロック区分を表7-6-4及び図7-6-1示す。

表 7-6-4 ブロック区分の概要

ブロック	位置	ブロック概要
ブロック A	木曾岬干拓地内	伊勢湾岸自動車道以北に位置するブロック。 木曾岬新輪工業団地として利用されている。
ブロック B		伊勢湾岸自動車道と事業実施区域の間に位置するブロック。 新エネルギーランド（木曾岬干拓地メガソーラー発電所）として利用されている。
ブロック C		木曾岬干拓地の中央に位置するブロック。 三重県側は事業実施区域、愛知県側は新エネルギーランド及び運動広場としての利用が予定されている。
ブロック D		事業実施区域以南に位置するブロック。 三重県側は農業体験広場、愛知県側は運動広場としての利用が予定されている。
ブロック E		木曾岬干拓地の南端に位置するブロック。 自然体験広場として、保全区が整備されている。
ブロック F	木曾岬干拓地外	木曾岬干拓地外の陸域に位置するブロック
ブロック G		木曾岬干拓地外の水域に位置するブロック



凡 例

- | | |
|---|--|
| Aブロック | Eブロック |
| Bブロック | Fブロック |
| Cブロック | Gブロック |
| Dブロック | |

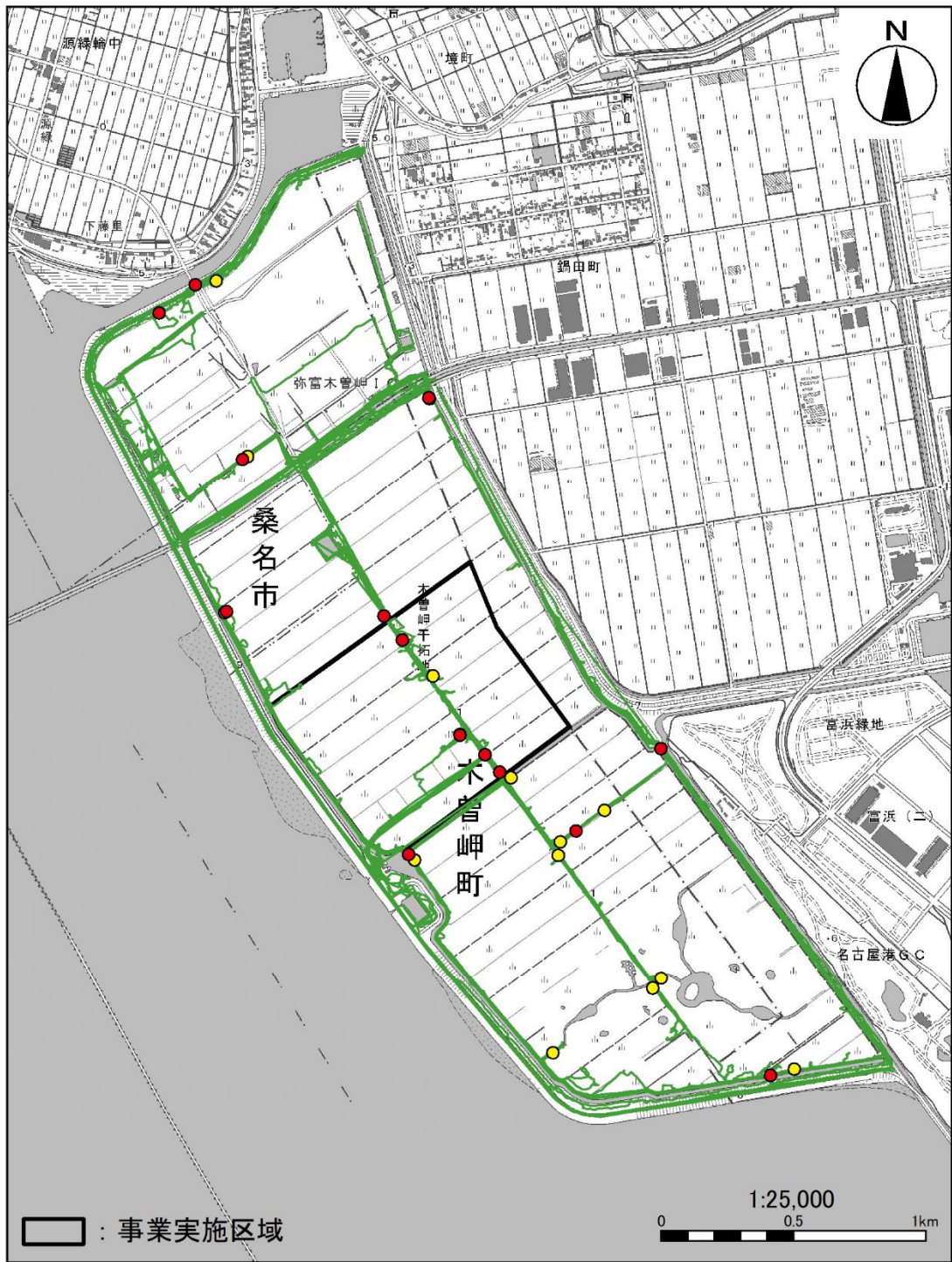
図 7-6-1 ブロック区分

7-6-7

④ 調査地点

調査地点及び調査ルートは、調査対象動物の生態的な特性、周辺の地形状況、植生の連続性を踏まえ、調査地域に生息する動物を効率よく把握できる場所を設定した。

調査地点及び調査ルートを図 7-6-2～図 7-6-9 に示す。

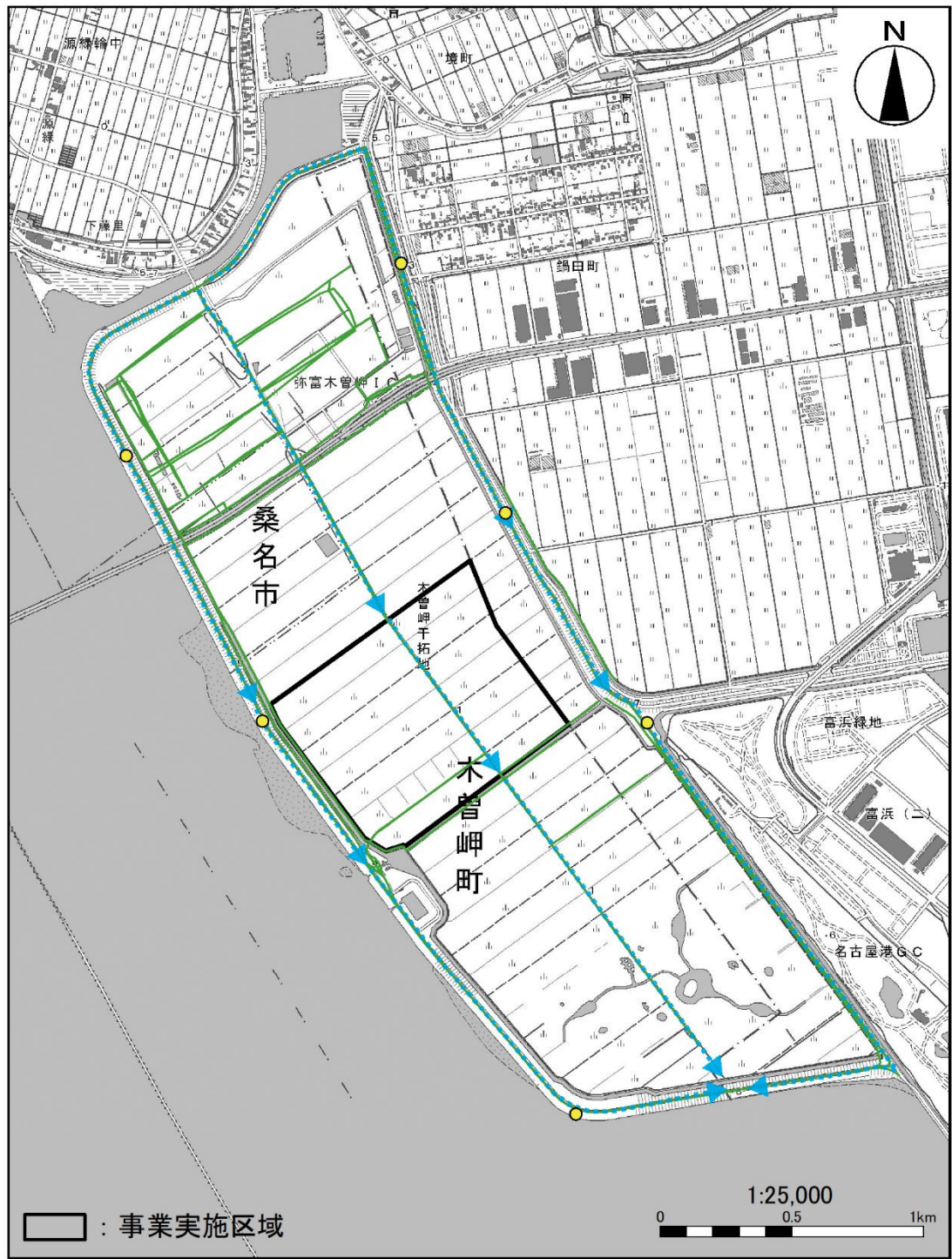


凡 例

- 目撃法、フィールドサイン法
- トラップ法 (シャーマントラップ)
- トラップ法 (自動撮影カメラ)

図 7-6-2 哺乳類調査位置図

7-6-9



凡 例

- 直接観察
- ラインセンサス法
- 定点観察法

図 7-6-3 鳥類調査位置図



凡例

● 定点観察法

図 7-6-4 鳥類（猛禽類）調査位置図



凡 例

— 直接観察及び採取

図 7-6-5 爬虫類・両生類調査位置図



凡 例

- 直接観察及び採取
- ライトトラップ法、ベイトトラップ法

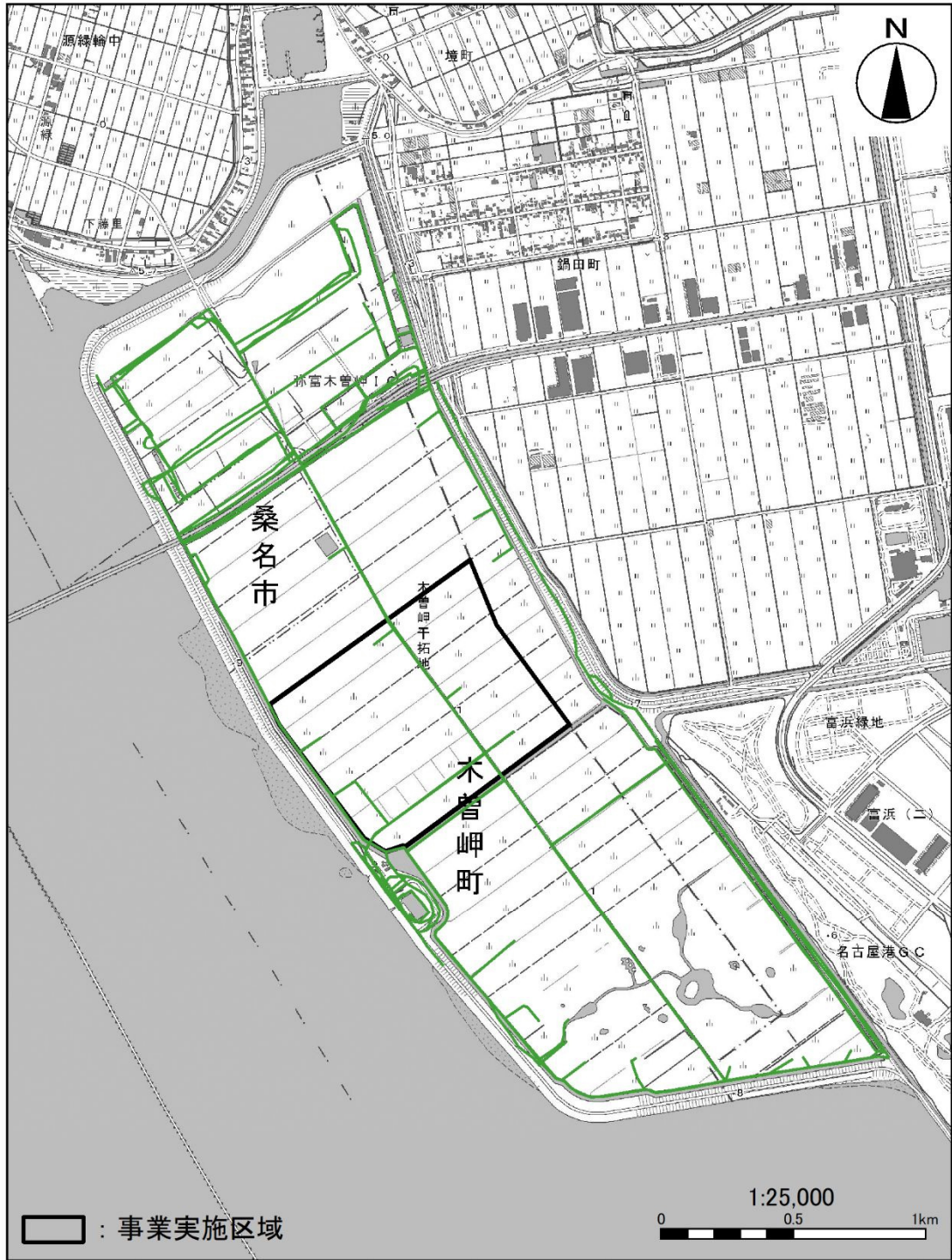
図 7-6-6 昆虫類調査位置図



凡 例

— 直接観察及び採取

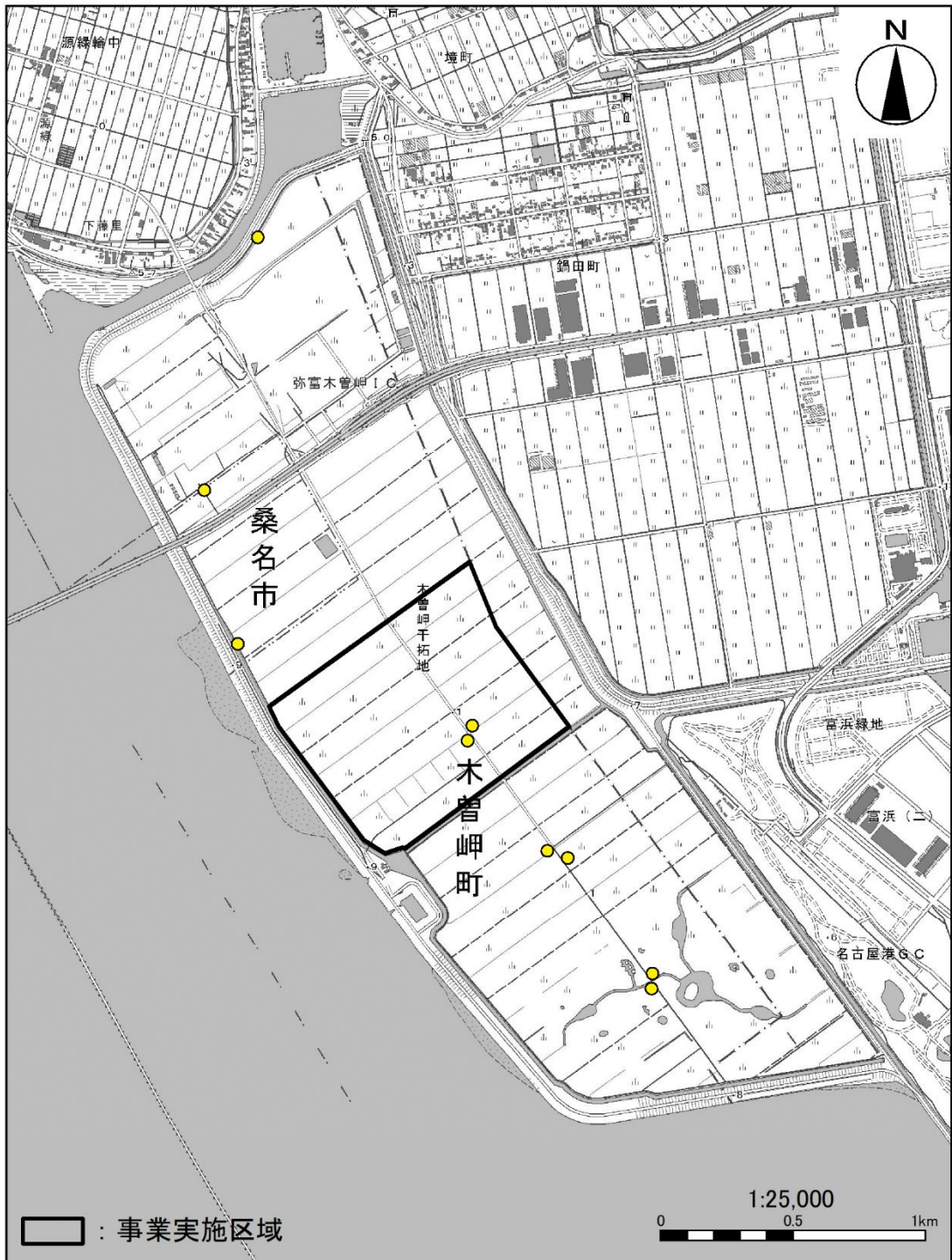
図 7-6-7 クモ類調査位置図



凡 例

— 直接観察及び採取

図 7-6-8 陸生貝類調査位置図



凡 例

● コドラート法

図 7-6-9 土壌動物調査位置図

⑤ 調査期間等

調査期間は、令和3年4月～令和4年10月とした。調査時期等は、春季・夏季・秋季・冬季を基本とし、調査対象となる動物の生態的な特性を考慮し、効率よく確認できる時期とした。各項目の調査時期を表7-6-5に示す。

表 7-6-5(1) 調査時期

項目	調査手法	調査実施日
哺乳類	目撃法、フィールドサイン法、トラップ法（シャーマントラップ）	冬季：令和4年 1月 24日～ 26日 春季：令和4年 4月 18日～ 22日 夏季：令和4年 7月 4日～ 6日 秋季：令和4年 10月 26日～ 28日
	トラップ法（自動撮影カメラ）	令和4年 1月 24日～ 10月 28日
鳥類	直接観察	冬季：令和4年 1月 19日～ 20日
	ラインセンサス法	春季：令和4年 5月 23日～ 24日 夏季：令和4年 7月 13日～ 14日
	定点観察法	秋季：令和4年 9月 8日～ 9日
鳥類 （猛禽類）	定点観察法	<令和3年繁殖シーズン> 令和3年 4月 20日～ 21日、 令和3年 5月 28日～ 29日、 令和3年 6月 25日～ 26日、 令和3年 7月 24日～ 25日、 令和3年 8月 6日～ 7日 <令和4年繁殖シーズン> 令和3年 12月 22日～ 23日 令和4年 1月 24日～ 25日 令和4年 2月 11日～ 12日 令和4年 3月 1日～ 2日、5日 令和4年 4月 13日～ 14日 令和4年 5月 19日～ 20日 令和4年 6月 23日～ 24日 令和4年 7月 11日～ 12日 令和4年 8月 8日～ 9日
爬虫類	直接観察及び採取	春季：令和4年 4月 18日～ 22日 夏季：令和4年 7月 4日～ 6日 秋季：令和4年 10月 26日～ 28日
両生類	直接観察及び採取	春季：令和4年 4月 18日～ 22日 夏季：令和4年 7月 4日～ 6日 秋季：令和4年 10月 26日～ 28日
陸上昆虫類	直接観察及び採取	春季：令和4年 5月 25日～ 26日 夏季：令和4年 7月 19日～ 20日
	ライトトラップ法	秋季：令和4年 9月 13日～ 16日
	ベイトトラップ法	春季：令和4年 5月 25日～ 26日 夏季：令和4年 7月 19日～ 20日、8月 15～ 17日 秋季：令和4年 9月 13日～ 16日

表 7-6-5(2) 調査時期

項目	調査手法	調査実施日
クモ類	直接観察及び採取	春季：令和 4年 5月 23日～ 26日 夏季：令和 4年 7月 11日～ 14日 秋季：令和 4年 9月 13日～ 16日
陸生貝類	直接観察及び採取	春季：令和 4年 5月 16日～ 17日 夏季：令和 4年 7月 11日～ 12日 秋季：令和 4年 10月 24日～ 25日
土壌動物	コドラート法	夏季：令和 4年 8月 19日、 22日

(2) 調査の結果

現地調査結果の概要を表 7-6-6 に示す。

表 7-6-6 現地調査結果の概要

項目	確認種数	重要な種
哺乳類	3目 8科 10種	カヤネズミ (計1種)
鳥類	13目 32科 85種	カワアイサ、チュウサギ、ヒクイナ、タゲリ、ケリ、コチドリ、コアジサシ、ミサゴ、チュウヒ、ハイイロチュウヒ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、ハチクマ、サシバ、コチョウゲンボウ、ハヤブサ、オオムシクイ、アカハラ、コサメビタキ、キビタキ (計21種)
爬虫類	2目 5科 7種	確認なし
両生類	1目 3科 4種	トノサマガエル (計1種)
陸上昆虫類	13目 184科 688種	ノシメトンボ、コオイムシ、ハイイロボクトウ、ミズアブ、コガムシ、コガタガムシ、アオスジクモバチ (計7種)
クモ類	1目 22科 122種	オニグモ、コガネグモ、シロオビトリノフンダマシ、アカイロトリノフンダマシ、エビチャコモリグモ、オビジガバチグモ (計6種)
陸生貝類	1目 13科 19種	オオウエキビ (計1種)
土壌動物	4門 10綱 24目 95科 138種	確認なし

① 哺乳類

a) 哺乳類の生息状況

現地調査の結果、表 7-6-7 に示すとおり、3 目 8 科 10 種の哺乳類が確認された。
確認された哺乳類は、ヒナコウモリ科の一種、アカネズミ、タヌキ等であった。

表 7-6-7 哺乳類確認種一覧

番号	目名	科名	種名	調査時期				重要な種
				冬季	春季	夏季	秋季	
1	コウモリ(翼手)	ヒナコウモリ	ヒナコウモリ科		○		○	
2	ネズミ(齧歯)	ネズミ	アカネズミ		○	○	○	
3			カヤネズミ	○		○	○	○
4		ヌートリア	ヌートリア	○	○	○	○	
5	ネコ(食肉)	アライグマ	アライグマ	○				
6		イヌ	タヌキ	○	○	○	○	
7			キツネ	○	○	○		
8		イタチ	シベリアイタチ	○				
-			イタチ属	○	○	○		
9		ジャコウネコ	ハクビシン	○				
10	ネコ	ノネコ	○					
計	3 目	8 科	10 種	8 種	6 種	6 種	5 種	1 種

注 1) 分類、配列などは基本的に「令和 4 年度版 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(令和 4 年、国土交通省)に準拠した。

注 2) 同一種の可能性がある種は、種数をカウントしないこととした。

b) 重要な哺乳類

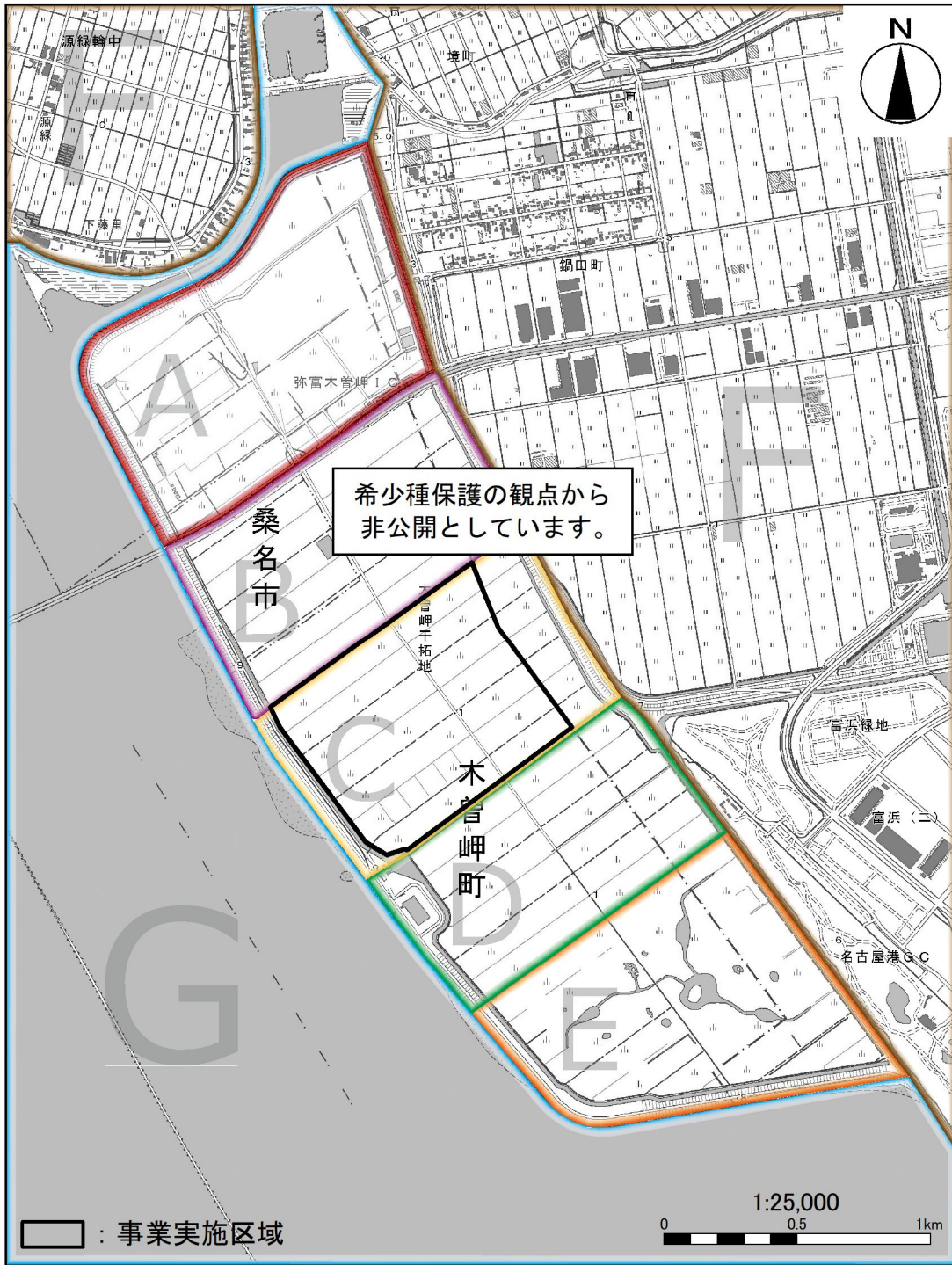
現地調査で確認された種のうち、重要な哺乳類はカヤネズミの 1 種であった。

現地調査で確認された重要な哺乳類を表 7-6-8 に、確認位置を図 7-6-10 に示す。

表 7-6-8 現地調査により確認された重要な哺乳類

番号	目名	科名	種名	選定基準					
				①	②	③	④	⑤	⑥
1	ネズミ(齧歯)	ネズミ	カヤネズミ						VU
計	1 目	1 科	1 種	0 種	0 種	0 種	0 種	0 種	1 種

注) 選定基準及びランクは表 7-6-3 に示す。



凡 例

種名

● カヤネズミ

ブロック区分

■ Aブロック

■ Bブロック

■ Cブロック

■ Dブロック

■ Eブロック

■ Fブロック

■ Gブロック

図 7-6-10 重要な哺乳類の確認位置図

7-6-21

② 鳥類

a) 鳥類の生息状況

現地調査の結果、表 7-6-9 に示すとおり、13 目 32 科 85 種の鳥類が確認された。
 確認された鳥類は、キジ、ヒドリガモ、カイツブリ、ゴイサギ、ミサゴ等であった。

表 7-6-9(1) 鳥類確認種一覧

番号	目名	科名	種名	調査時期				重要な種		
				冬季	春季	夏季	秋季			
1	キジ	キジ	キジ	○	○	○	○			
2	カモ	カモ	ヒドリガモ	○						
3			マガモ	○			○			
4			カルガモ	○	○	○	○			
5			ハシビロガモ	○						
6			オナガガモ					○		
7			コガモ	○				○		
8			ホシハジロ	○						
9			キンクロハジロ	○						
10			ミコアイサ	○						
11			カワアイサ	○					○	
12			ウミアイサ	○	○					
13			カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	○		○	○	
14	カンムリカイツブリ	○				○				
15	ハジロカイツブリ	○								
16	ハト	ハト	カワラバト(ドバト)	○	○	○	○			
17			キジバト	○	○	○	○			
18	カツオドリ	ウ	カワウ	○	○	○	○			
19	ペリカン	サギ	ゴイサギ					○		
20			アマサギ						○	
21			アオサギ	○	○	○	○			
22			ダイサギ	○	○	○	○			
23			チュウサギ				○	○	○	
24			コサギ				○	○		
25	ツル	クイナ	ヒクイナ		○			○		
26			オオバン	○	○			○		
27	アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ					○		
28	チドリ	チドリ	タゲリ	○					○	
29			ケリ			○	○			○
30			コチドリ				○	○		○
31		シギ	タシギ	○						
32			チュウシャクシギ						○	
33			アオアシシギ						○	
34			クサシギ	○					○	
35			キアシシギ						○	
36			イソシギ	○	○	○	○			
37			カモメ	ユリカモメ	○					○
38				ウミネコ				○		
39				セグロカモメ	○					
40				コアジサシ				○		

表 7-6-9(2) 鳥類確認種一覧

番号	目名	科名	種名	調査時期				重要な種		
				冬季	春季	夏季	秋季			
41	タカ	ミサゴ	ミサゴ	○	○	○	○	○		
42		タカ		ハチクマ		○			○	
43				トビ	○	○	○	○		
44				チュウヒ	○	○	○	○	○	
45				ハイイロチュウヒ	○	○			○	
46				ツミ					○	○
47				ハイタカ	○	○				○
48				オオタカ	○	○	○	○		○
49				サシバ		○				○
50						ノスリ	○			○
51	ブッポウソウ			カワセミ	カワセミ	○		○	○	
52	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ		○	○	○			
53			コチョウゲンボウ	○	○			○		
54			ハヤブサ	○	○	○		○		
55	スズメ	モズ	モズ	○	○	○	○			
56		カラス	ハシボソガラス	○	○	○	○			
57			ハシブトガラス	○	○	○	○			
58		シジュウカラ	シジュウカラ	○		○				
59		ヒバリ	ヒバリ	○	○	○	○			
60		ツバメ	ショウドウツバメ		○			○		
61			ツバメ			○	○	○		
62		ヒヨドリ	ヒヨドリ	○	○	○	○			
63		ウグイス	ウグイス	○	○	○	○			
64			ヤブサメ					○		
65		ムシクイ	オオムシクイ		○				○	
66		メジロ	メジロ	○	○					
67		ヨシキリ	オオヨシキリ		○	○				
68		セッカ	セッカ		○	○	○			
69		ムクドリ	ムクドリ	○	○	○	○			
70		ヒタキ	シロハラ	○						
71			アカハラ	○					○	
72			ツグミ	○						
73			ジョウビタキ	○						
74			イソヒヨドリ	○				○		
75			コサメビタキ					○	○	
76		キビタキ			○				○	
77		スズメ	スズメ	○	○	○	○			
78		セキレイ	ハクセキレイ	○	○	○	○			
79			セグロセキレイ	○		○	○			
80			タヒバリ	○						
81		アトリ	カワラヒワ	○	○	○	○			
82			ベニマシコ	○						
83		ホオジロ	ホオジロ	○	○	○	○			
84			カシラダカ	○						
85	アオジ		○							
計	13 目	32 科	85 種	59 種	42 種	39 種	50 種	21 種		

注) 分類、配列などは基本的に「令和4年度版 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(令和4年、国土交通省)に準拠した。

b) 重要な鳥類

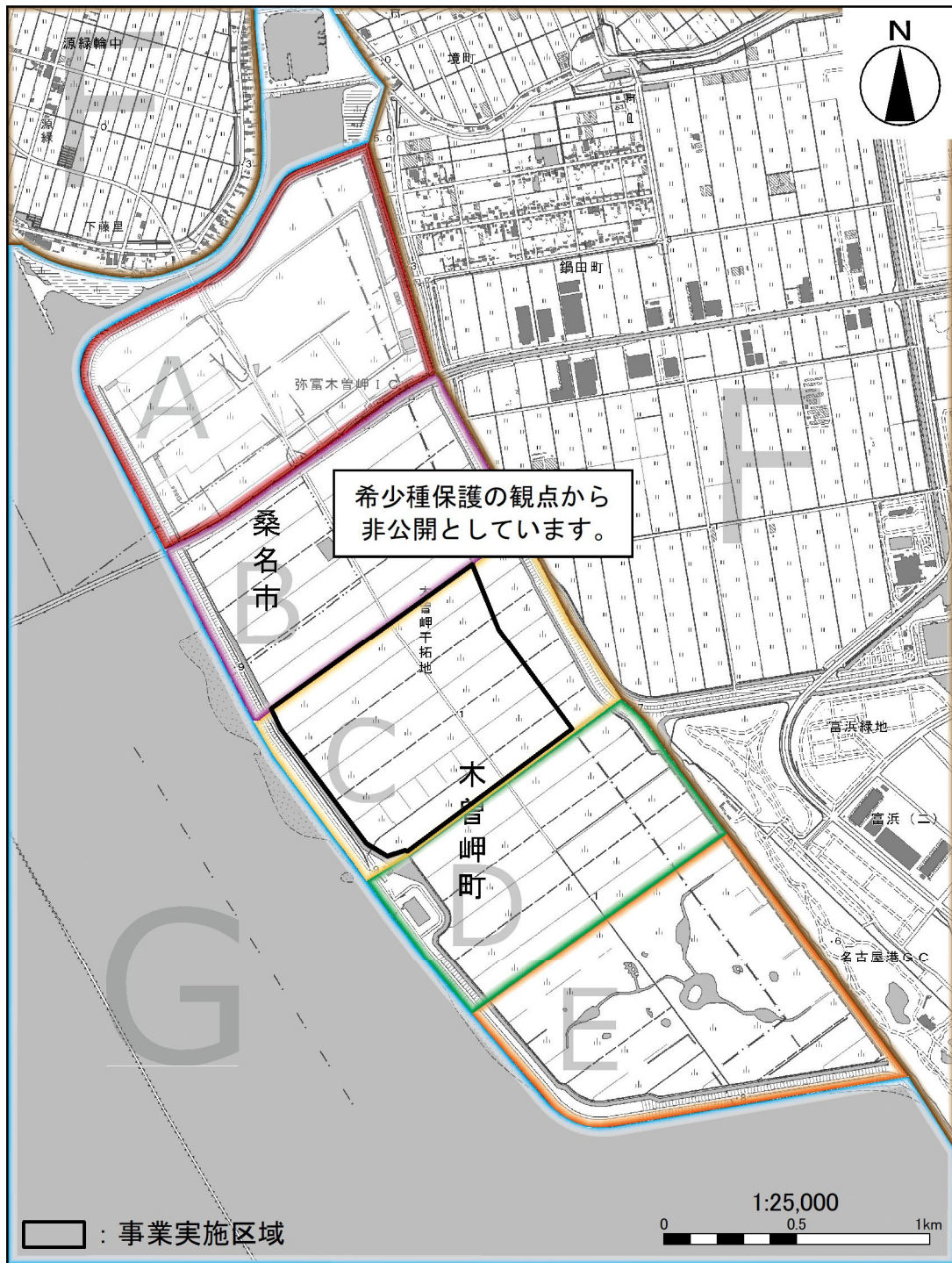
現地調査で確認された種のうち、重要な鳥類はカワアイサ、チュウサギ、ヒクイナ等の 21 種であった。

現地調査で確認された重要な鳥類を表 7-6-10 に、確認位置を図 7-6-11 に示す。

表 7-6-10 現地調査により確認された重要な鳥類

番号	目名	科名	種名	選定基準						
				①	②	③	④	⑤	⑥	
1	カモ	カモ	カワアイサ						越冬 NT	
2	ペリカン	サギ	チュウサギ				NT	VU		
3	ツル	クイナ	ヒクイナ				NT	VU	繁殖 NT 通過 NT	
4	チドリ	チドリ	タゲリ					NT		
5			ケリ				DD			
6			コチドリ					NT		
7		カモメ	コアジサシ				VU	CR	繁殖 EN 通過 VU	
8	タカ	ミサゴ	ミサゴ				NT	繁殖 NT 越冬 VU	繁殖 NT	
9		タカ	ハチクマ				NT	EN	繁殖 VU 通過 NT	
10			チュウヒ		国内		EN	繁殖 CR 越冬 VU	繁殖 CR 越冬 VU	
11			ハイイロチュウヒ					VU	越冬 EN	
12			ツミ						繁殖 NT	
13			ハイタカ					NT	NT	
14			オオタカ					NT	VU	繁殖 NT 越冬 NT
15			サシバ			指定		VU	EN	繁殖 EN 通過 NT
16	ハヤブサ	ハヤブサ	コチョウゲンボウ					EN		
17			ハヤブサ		国内		VU	繁殖 CR 越冬 EN	繁殖 VU 越冬 NT	
18	スズメ	ムシクイ	オオムシクイ				DD			
19		ヒタキ	アカハラ						繁殖 CR	
20			コサメビタキ					DD	繁殖 NT	
21			キビタキ					NT		
計	7 目	10 科	21 種	0 種	2 種	1 種	12 種	16 種	13 種	

注) 選定基準及びランクは表 7-6-3 に示す。



凡例

種名

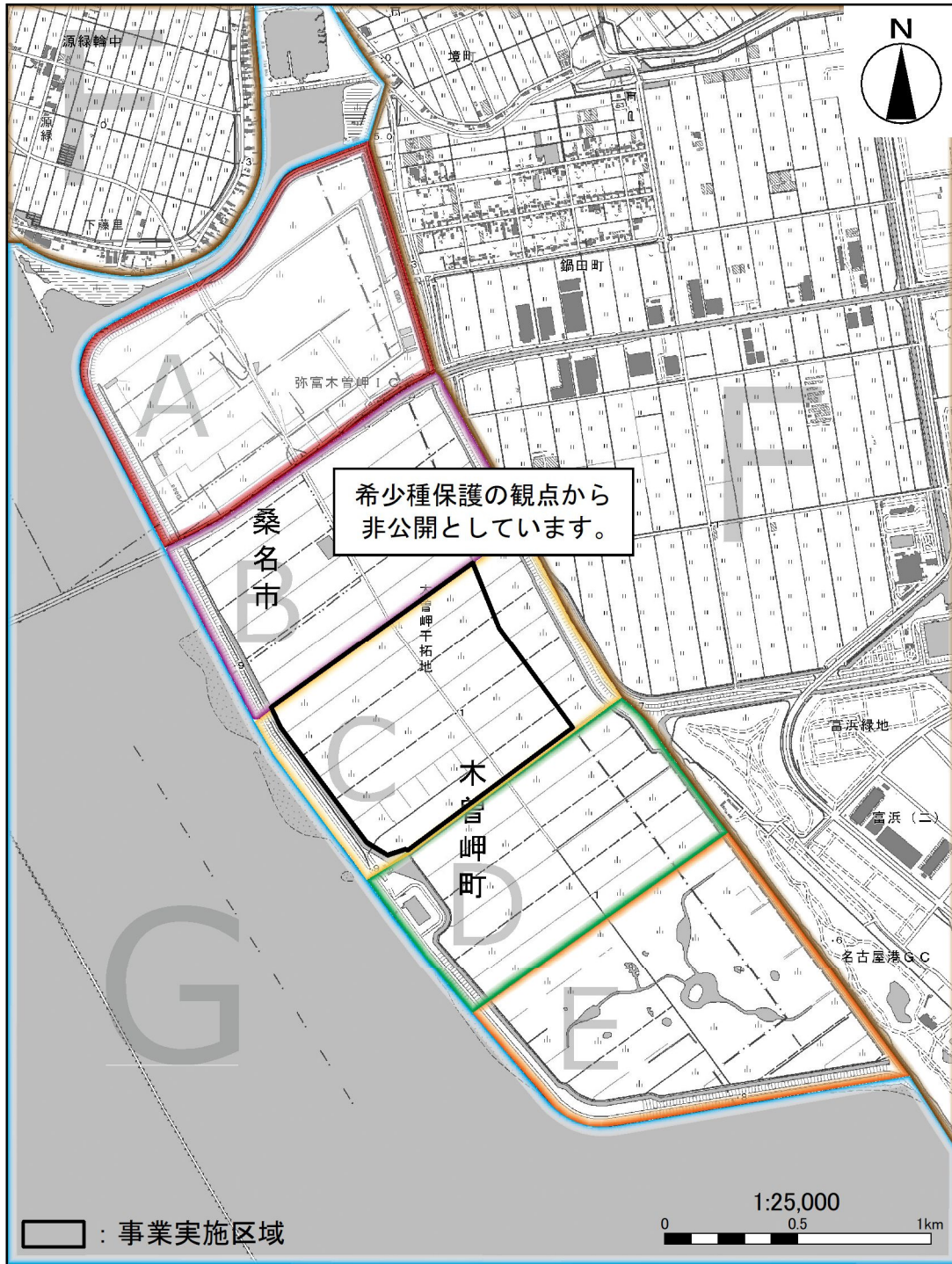
- カワアイサ
- チュウサギ
- ヒクイナ
- タゲリ

- ● ケリ
- ● コチドリ
- ● コアジサシ

ブロック区分

- Aブロック
- Bブロック
- Cブロック
- Dブロック
- Eブロック
- Fブロック
- Gブロック

図 7-6-11(1) 重要な鳥類の確認位置図 (鳥類調査)



凡 例

種名

- ミサゴ
- チュウヒ
- ハイイロチュウヒ
- ツミ
- ハイタカ
- オオタカ
- ハヤブサ

ブロック区分

- Aブロック
- Bブロック
- Cブロック
- Dブロック
- Eブロック
- Fブロック
- Gブロック

図 7-6-11(2) 重要な鳥類の確認位置図 (鳥類調査)

7-6-26

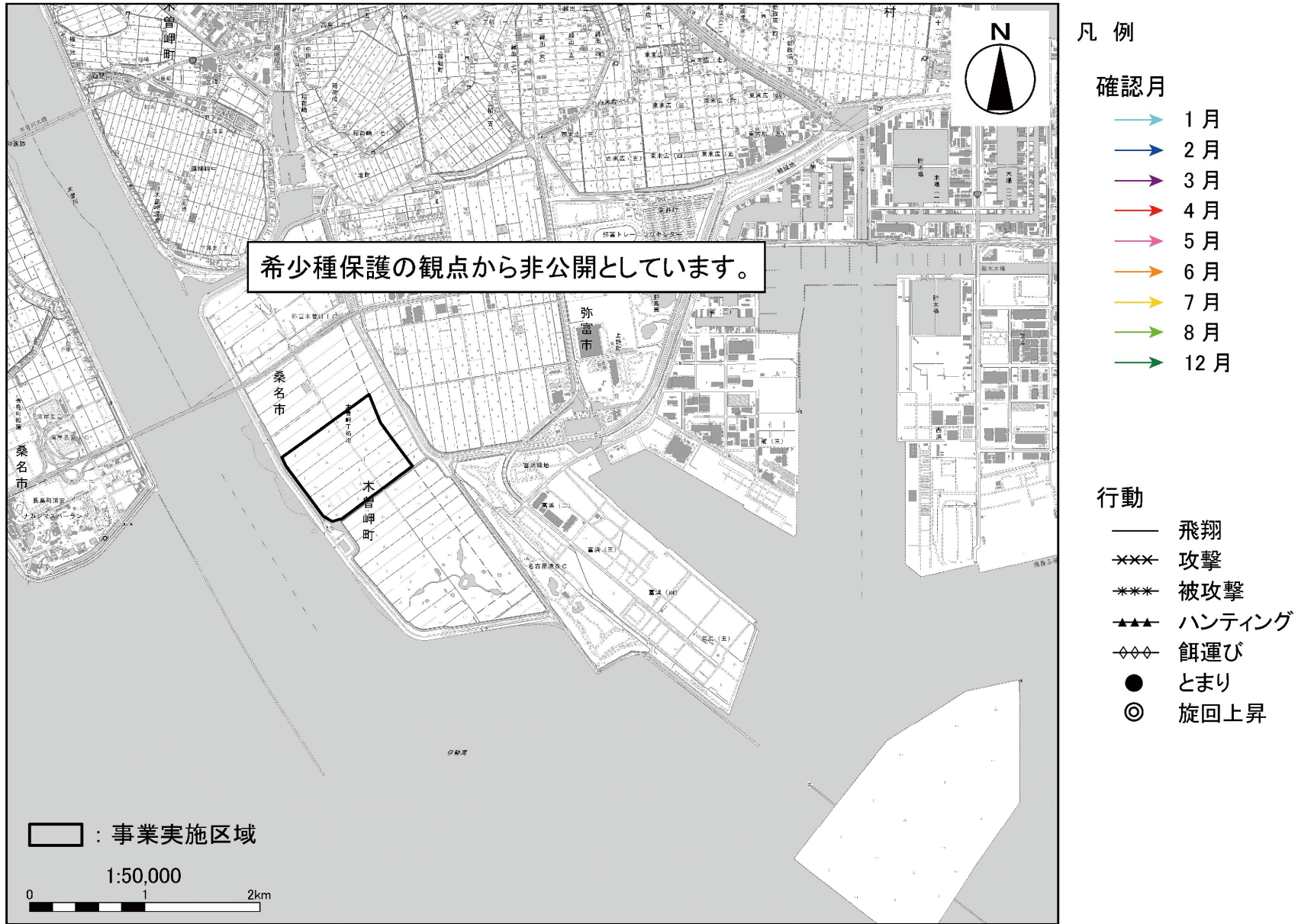
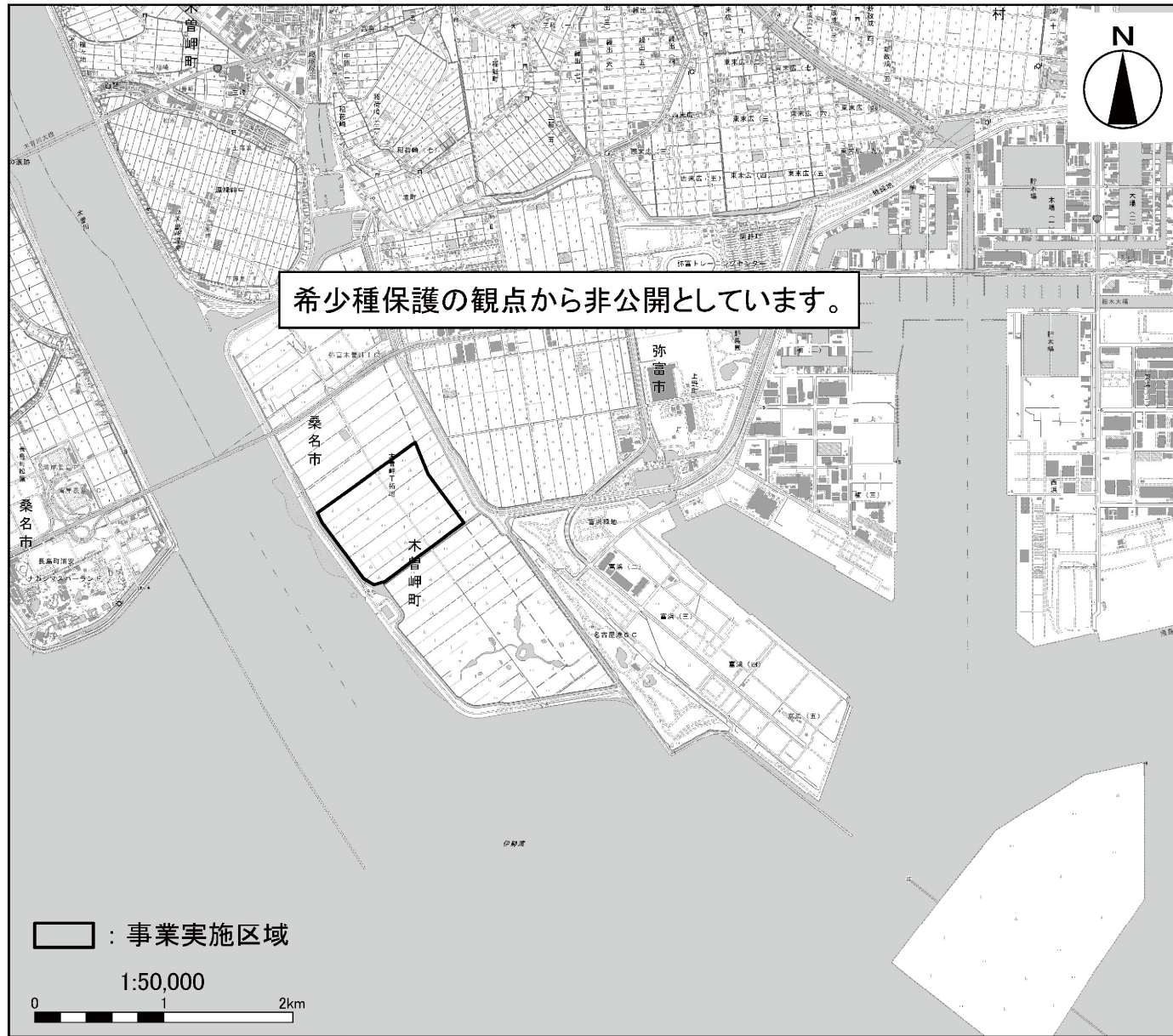


図 7-6-11(4) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和3年 ミサゴ)



凡例

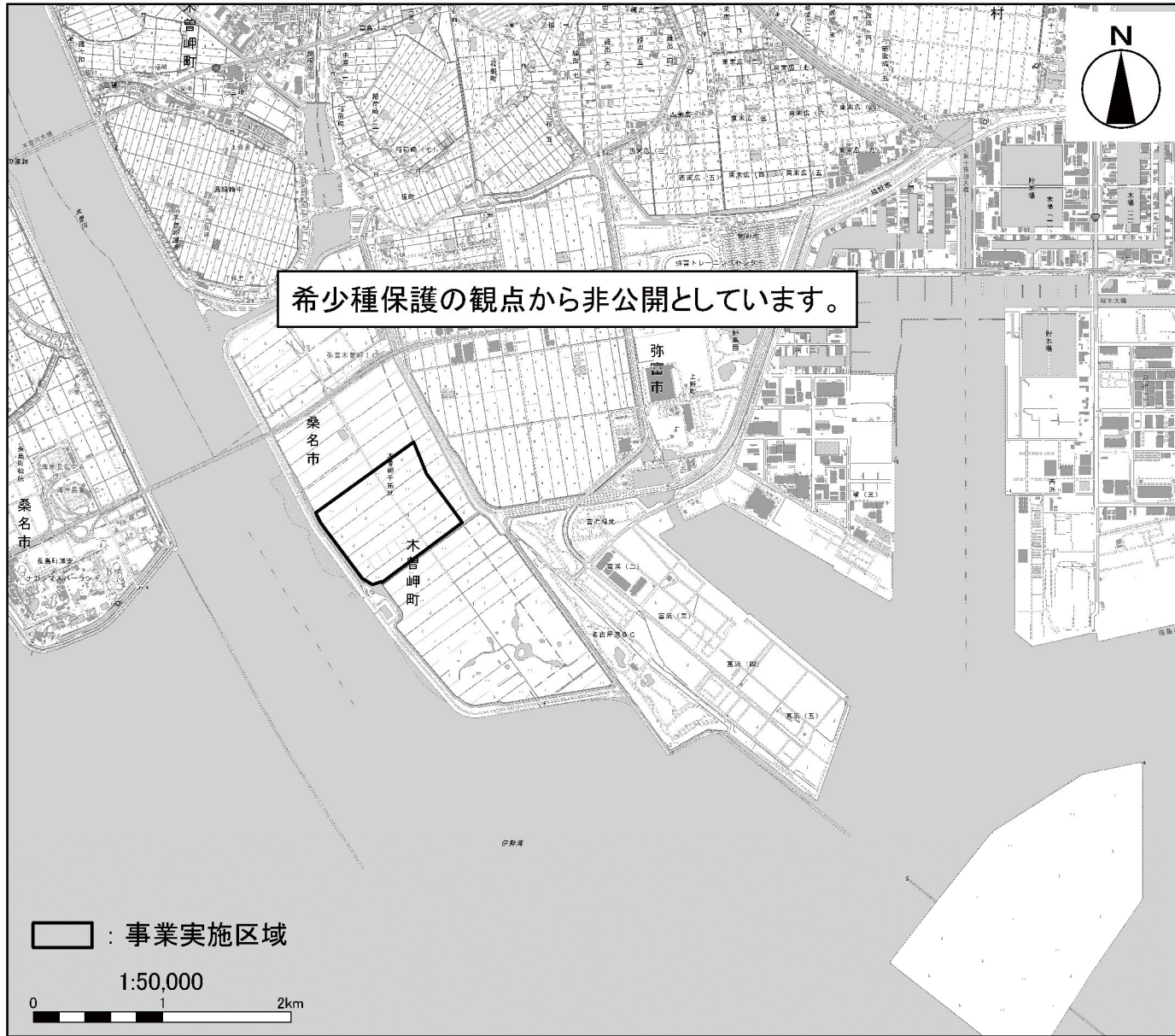
確認月

- 4月
- 5月
- 6月
- 7月
- 8月

行動

- 飛翔
- 急降下
- ××× 攻撃
- *** 被攻撃
- ▲▲▲ ハンティング
- 探餌
- 旋回
- ◇◇◇ 餌運び
- とまり
- ◎ 旋回上昇

図 7-6-11(5) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和4年 ミサゴ)



凡例

確認月

→ 5月

行動

— 飛翔

◎ 旋回上昇

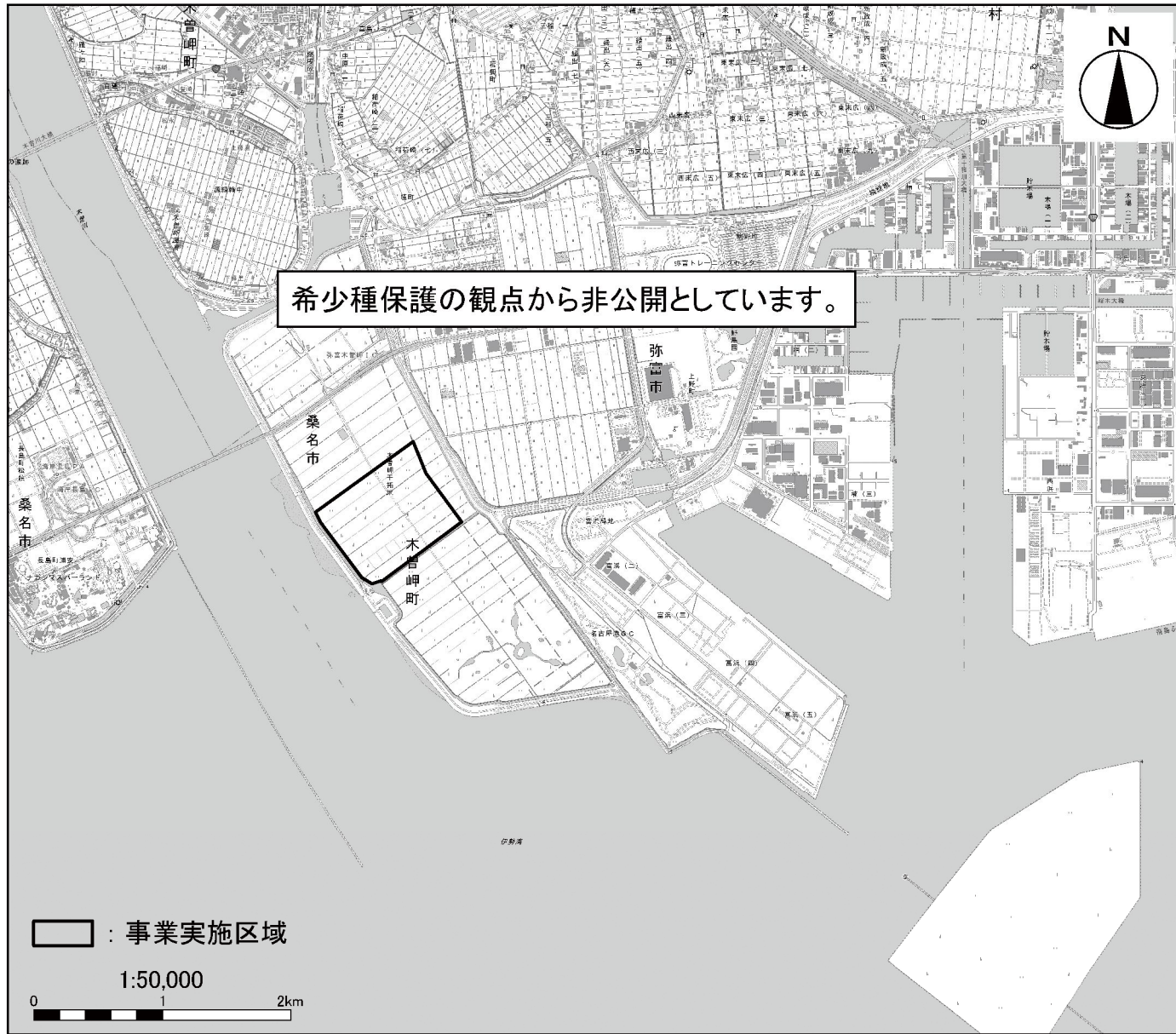
希少種保護の観点から非公開としています。

□ : 事業実施区域

1:50,000

0 1 2km

図 7-6-11(6) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和4年 ハチクマ)



凡例

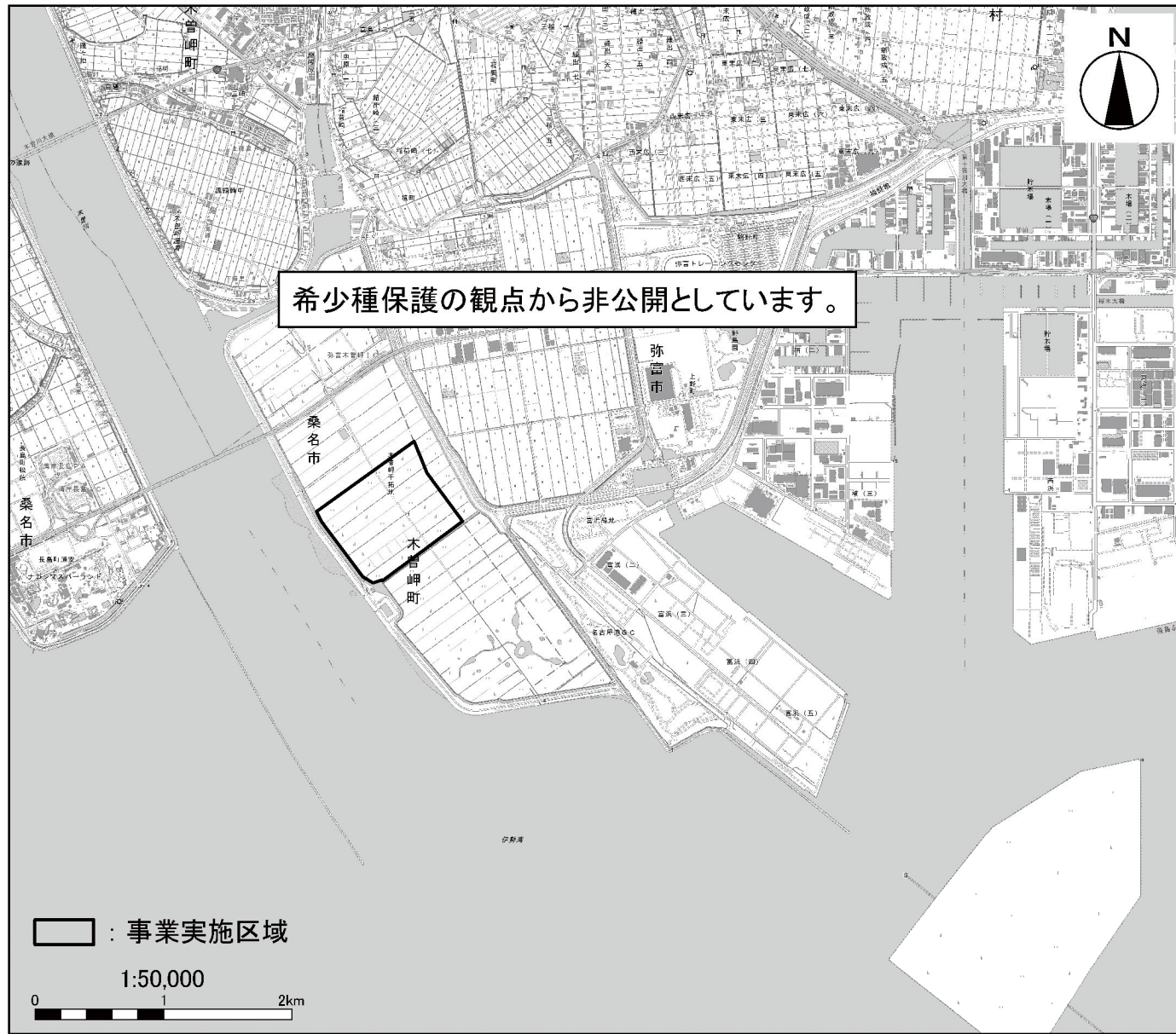
確認月

→ 12月

行動

- 飛翔
- *** 被攻撃
- ▲▲▲ ハンティング
- 探餌
- とまり
- ◎ 旋回上昇

図 7-6-11(7) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和3年 チュウヒ)



凡例

確認月

→ 1月

行動

— 飛翔

××× 攻撃

*** 被攻撃

□□□ 探餌

● とまり

◎ 旋回上昇

○ 推定ねぐら位置

□ : 事業実施区域

1:50,000

0 1 2km

図 7-6-11(8) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和3年 チュウヒ)



凡例

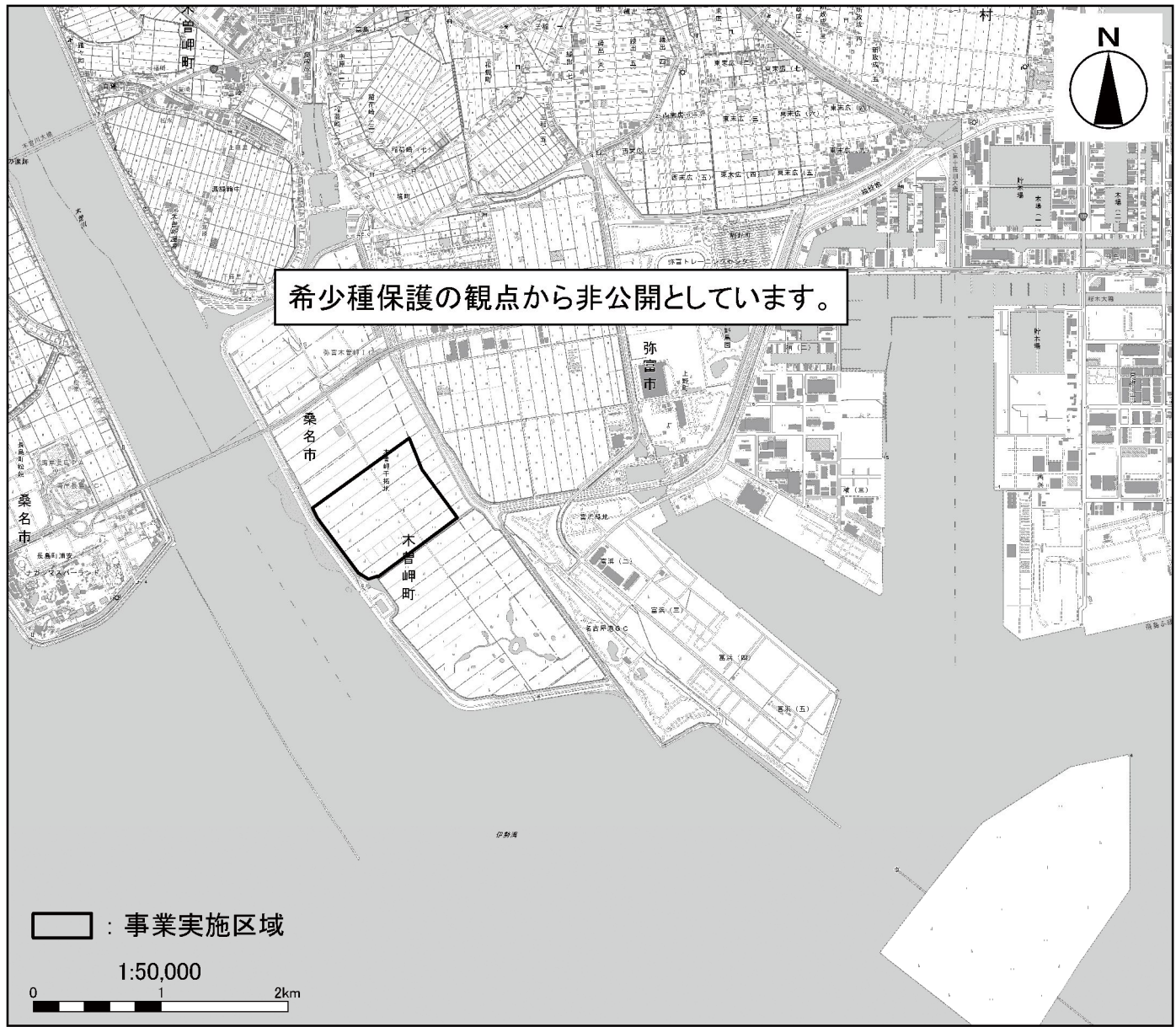
確認月

→ 2月

行動

- 飛翔
- *** 攻撃
- *** 被攻撃
- ☒☒☒ 探餌
- とまり
- ◎ 旋回上昇
- 推定ねぐら位置

図 7-6-11(9) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査 : 令和3年 チュウヒ)



凡例
 確認月
 → 3月

- 行動
- 飛翔
 - *** 攻撃
 - *** 被攻撃
 - ▲▲▲ ハンティング
 - 探餌
 - とまり
 - ◎ 旋回上昇
 - 推定ねぐら位置

図 7-6-11 (10) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和3年 チュウヒ)



凡例

確認月

→ 4月

行動

- 飛翔
- 急降下
- *** 攻撃
- *** 被攻撃
- ▲▲▲ ハンティング
- 探餌
- +++ 巣材運び
- ◇◇◇ 餌運び
- とまり
- ◎ 旋回上昇
- ⊕ 餌渡し

図 7-6-11 (11) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和3年 チュウヒ)



凡例

確認月

→ 5月

行動

- 飛翔
- 急降下
- ×××× 攻撃
- ×××× 被攻撃
- ▲▲▲▲ ハンティング
- 探餌
- とまり
- ◎ 旋回上昇

図 7-6-11(12) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和3年 チュウヒ)



凡例

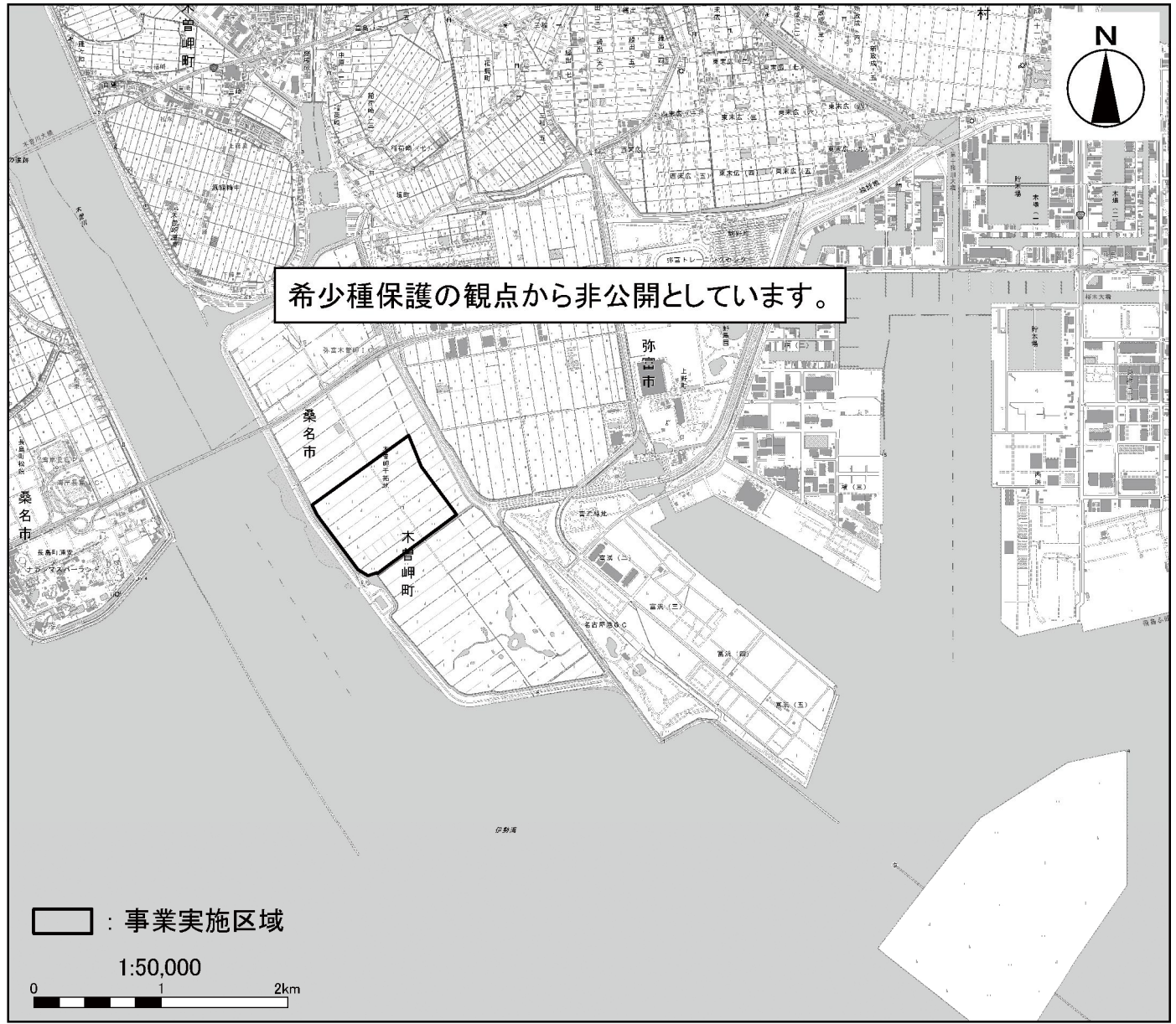
確認月

→ 6月

行動

- 飛翔
- 急降下
- *** 被攻撃
- ▲▲▲ ハンティング
- 田田田 探餌
- とまり
- ◎ 旋回上昇

図 7-6-11 (13) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和3年 チュウヒ)



凡例

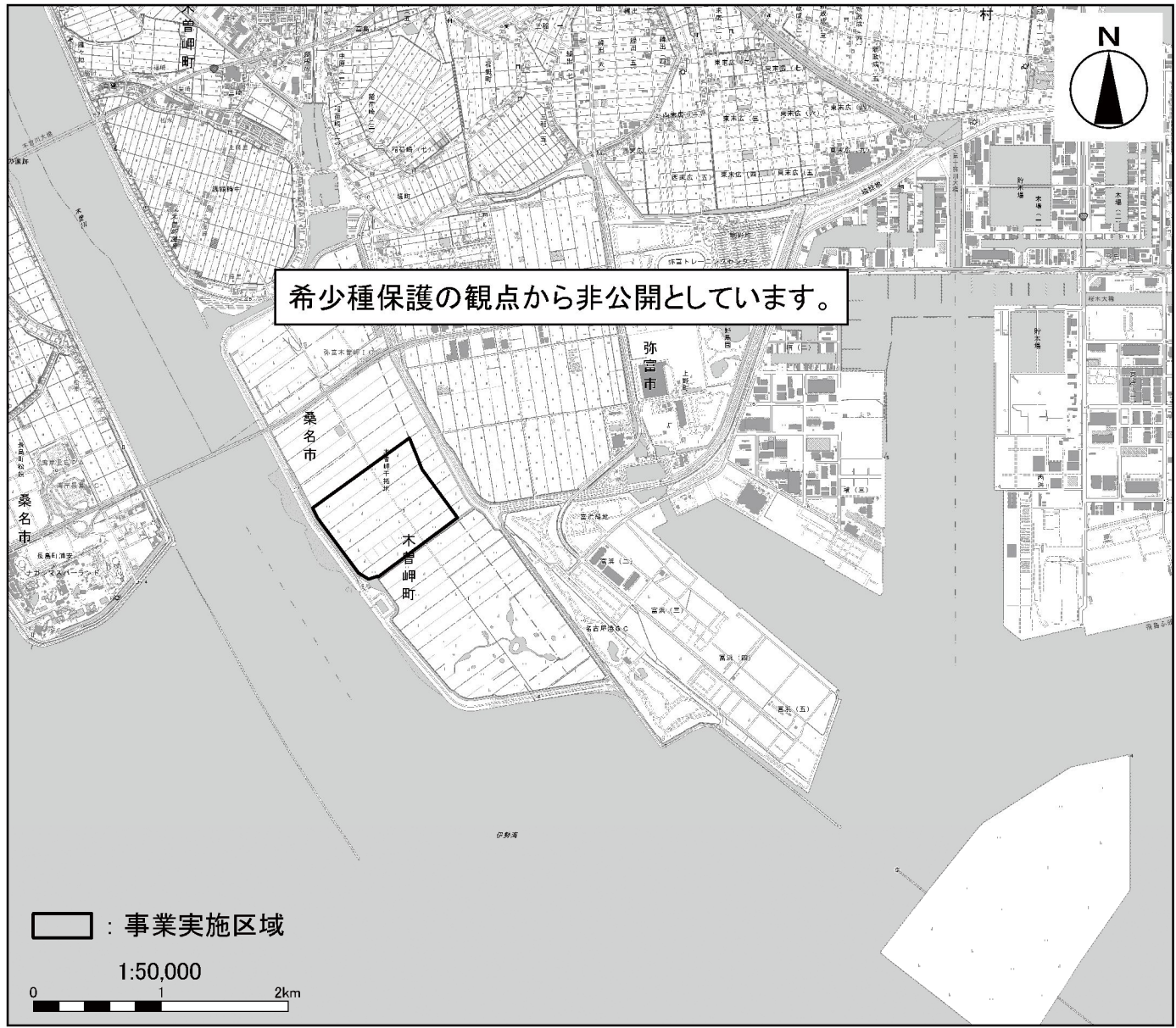
確認月

- 7月
- 8月

行動

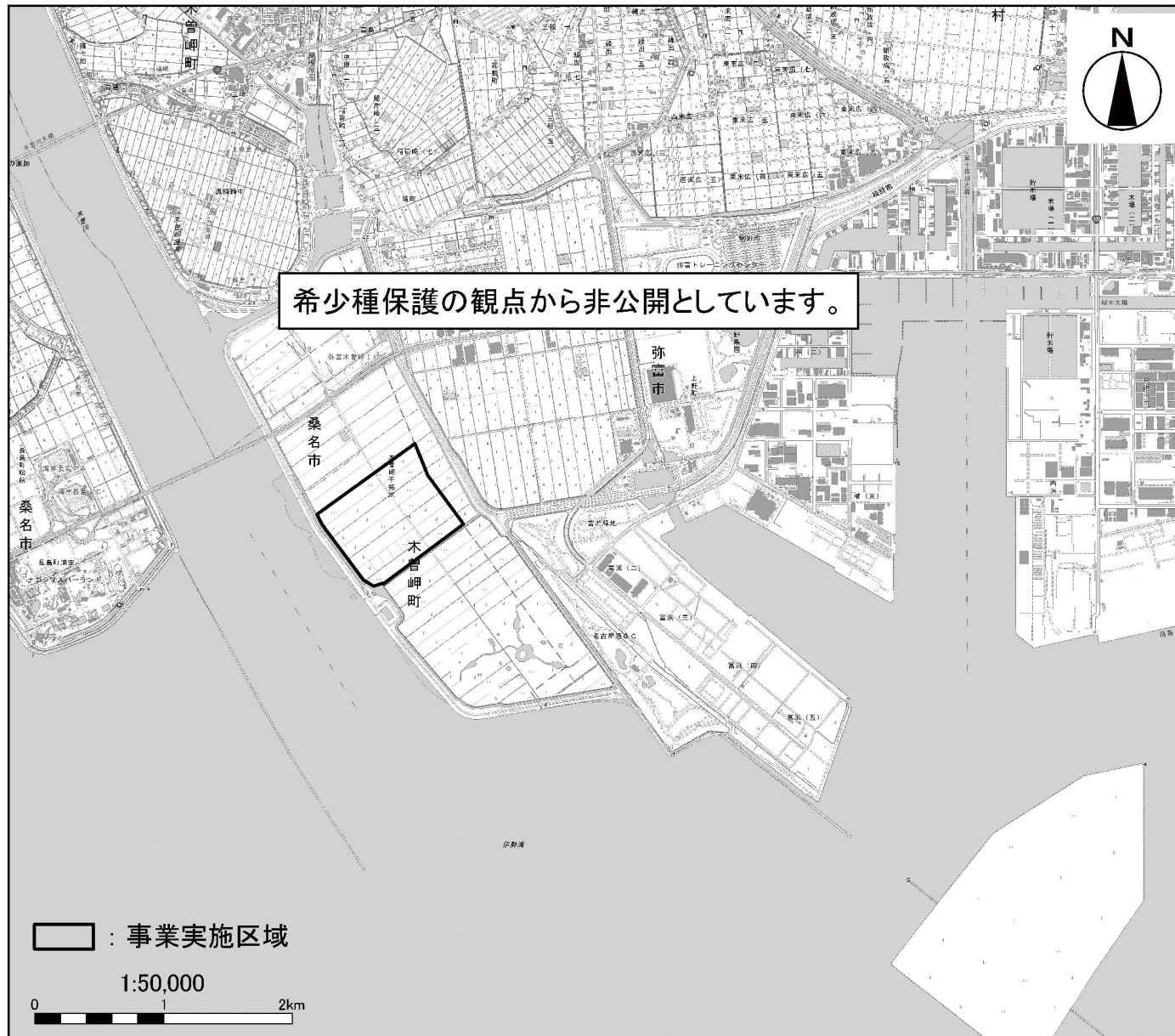
- 飛翔
- *** 被攻撃
- ▲▲▲ ハンティング
- 探餌
- ◇◇◇ 餌運び
- ◎ 旋回上昇

図 7-6-11(14) 重要な鳥類の確認位置図（猛禽類調査：令和3年 チュウヒ）



- 凡例
- 確認月
 → 4月
- 行動
- 飛行
 - ×××× 攻撃
 - *** 被攻撃
 - 探餌
 - 旋回
 - とまり
 - ◎ 旋回上昇

図 7-6-11 (15) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査 : 令和 4 年 チュウヒ)



凡例

確認月

→ 5月

行動

- 飛行
- ▲▲▲ ハンティング
- ☐☐☐ 探餌
- 旋回
- ◇◇◇ 餌運び
- ◎ 旋回上昇

図 7-6-11(16) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和4年 チュウヒ)



凡例

確認月

→ 6月

行動

- 飛翔
- ××× 攻撃
- *** 被攻撃
- ▲▲▲ ハンティング
- 田田田 探餌
- 〇〇〇 旋回
- ◇◇◇ 餌運び
- とまり
- ◎ 旋回上昇

図 7-6-11(17) 重要な鳥類の確認位置図（猛禽類調査：令和4年 チュウヒ）



凡例

確認月

- 7月
- 8月

行動

- 飛翔
- ⊞⊞⊞ 探餌
- ⊞⊞⊞ 旋回
- ◇◇◇ 餌運び
- とまり

図 7-6-11(18) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和4年 チュウヒ)

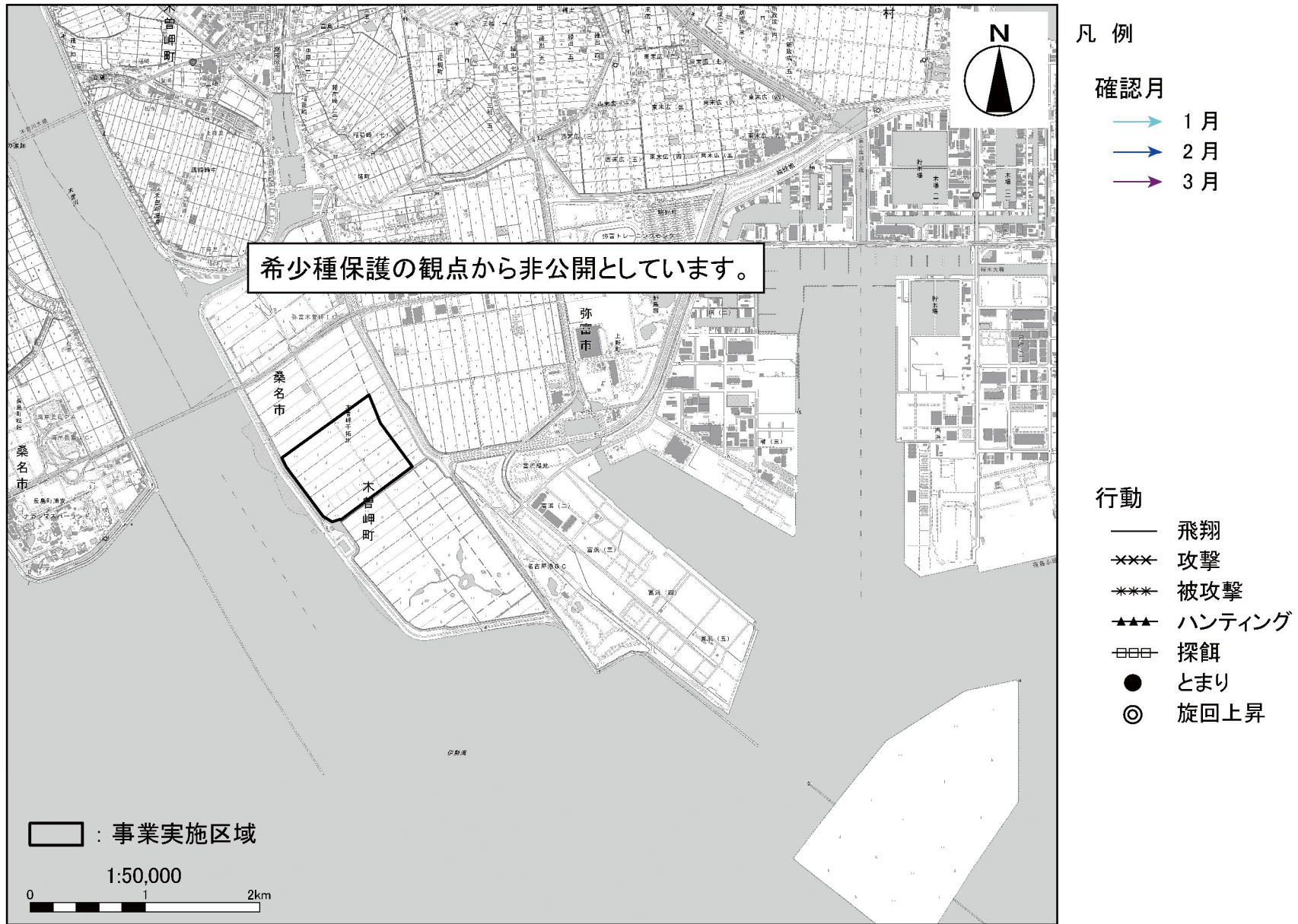
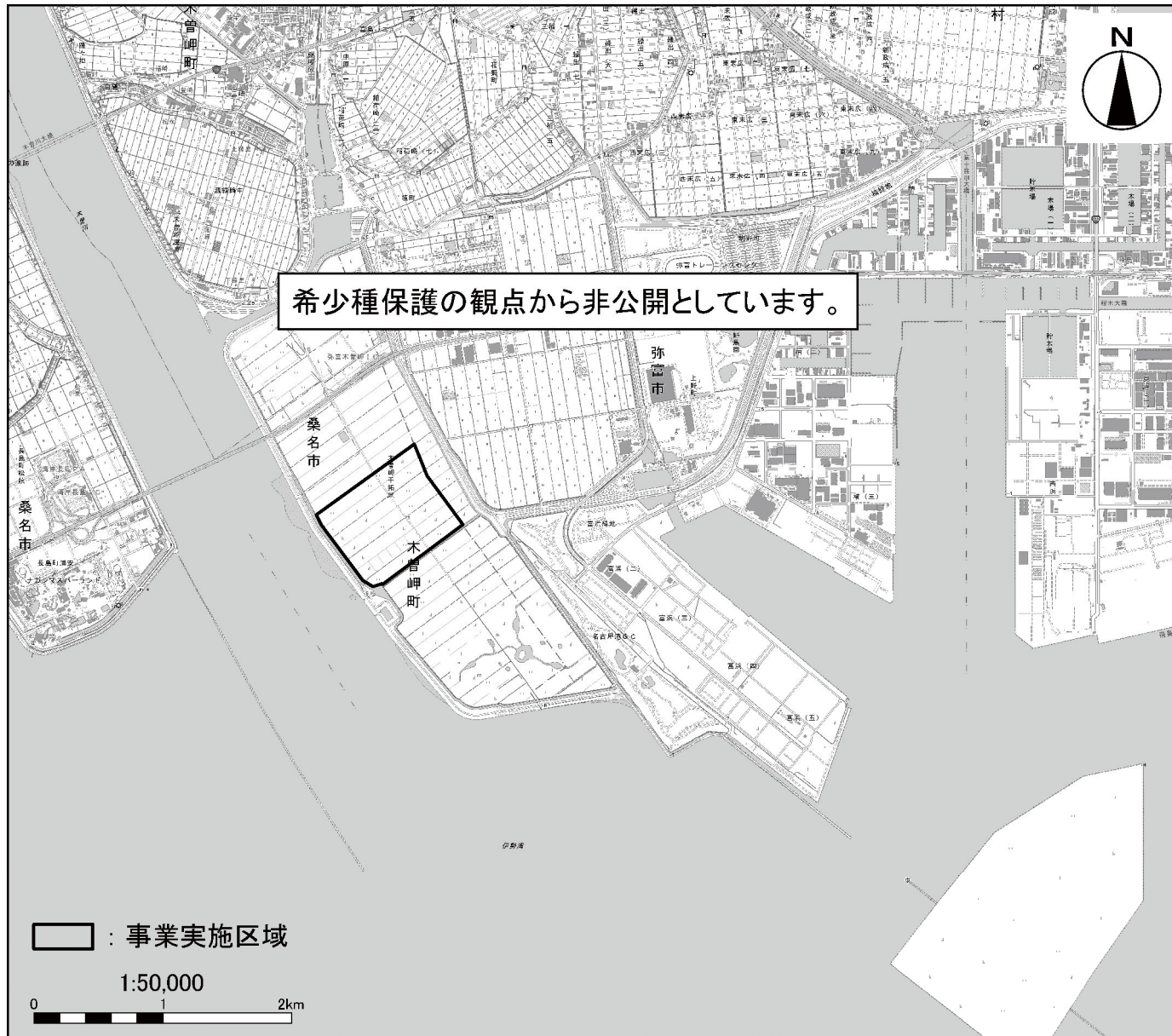


図 7-6-11(19) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和3年 ハイイロチュウヒ)



凡例

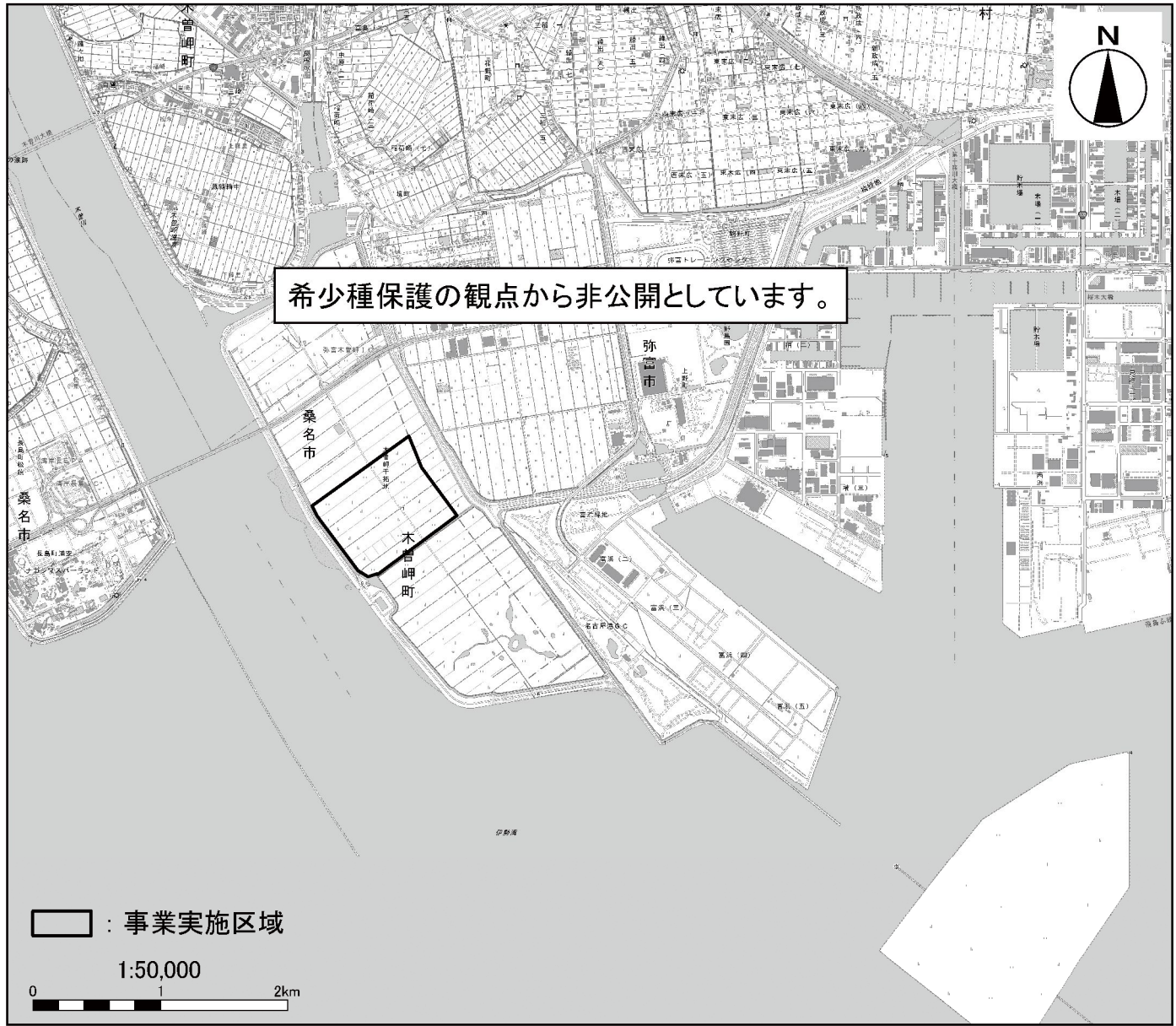
確認月

- 1月
- 2月
- 4月
- 12月

行動

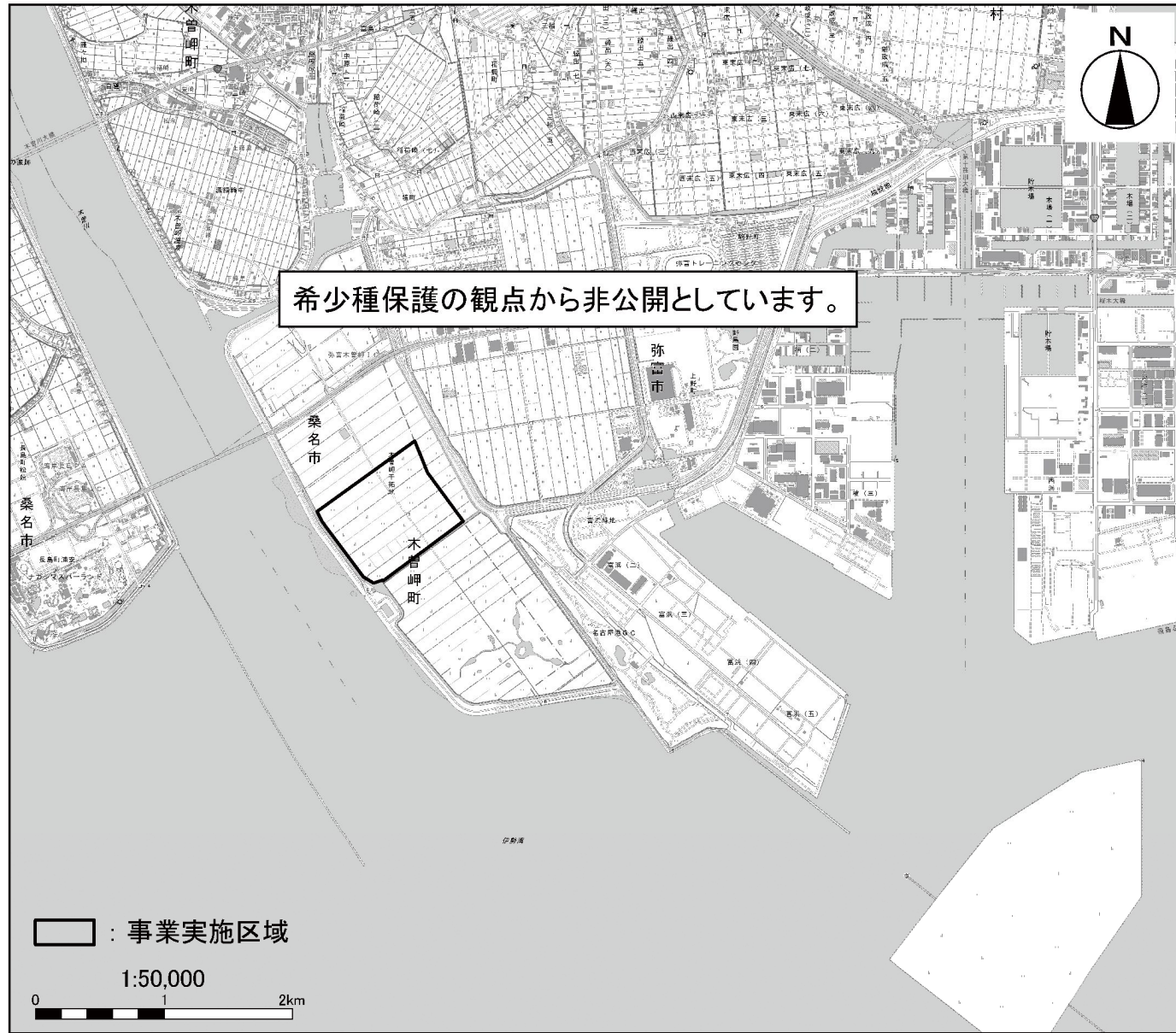
- 飛翔
- 急降下
- ▲▲▲ ハンティング
- ☒☒☒ 探餌
- とまり

図 7-6-11 (20) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査 : 令和3年 ハイタカ)



- 凡例
- 確認月
- 1月
 - 2月
 - 3月
 - 4月
 - 5月
 - 6月
 - 7月
 - 8月
 - 12月
- 行動
- 急降下
 - ××× 攻撃
 - *××× 被攻撃
 - ▲▲▲ ハンティング
 - ☐☐☐ 探餌
 - ◇◇◇ 餌運び
 - とまり
 - ◎ 旋回上昇
 - ◐ 鳴き声
 - 飛翔

図 7-6-11 (21) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査 : 令和3年 才オタカ)



凡例

確認月

- 4月
- 5月
- 6月
- 7月
- 8月

行動

- 飛翔
- 急降下
- ×××× 攻撃
- ×××× 被攻撃
- ▲▲▲▲ ハンティング
- 探餌
- 旋回
- ++++ 巣材運び
- ◇◇◇◇ 餌運び
- とまり
- ◎ 旋回上昇
- ⊗ 交尾
- ⊘ 鳴き声

希少種保護の観点から非公開としています。

□ : 事業実施区域

1:50,000

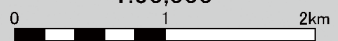


図 7-6-11 (22) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査 : 令和4年 才オタカ)



凡例

確認月

→ 4月

行動

— 飛翔

7-6-47

図 7-6-11 (23) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査 : 令和 3 年 サシバ)

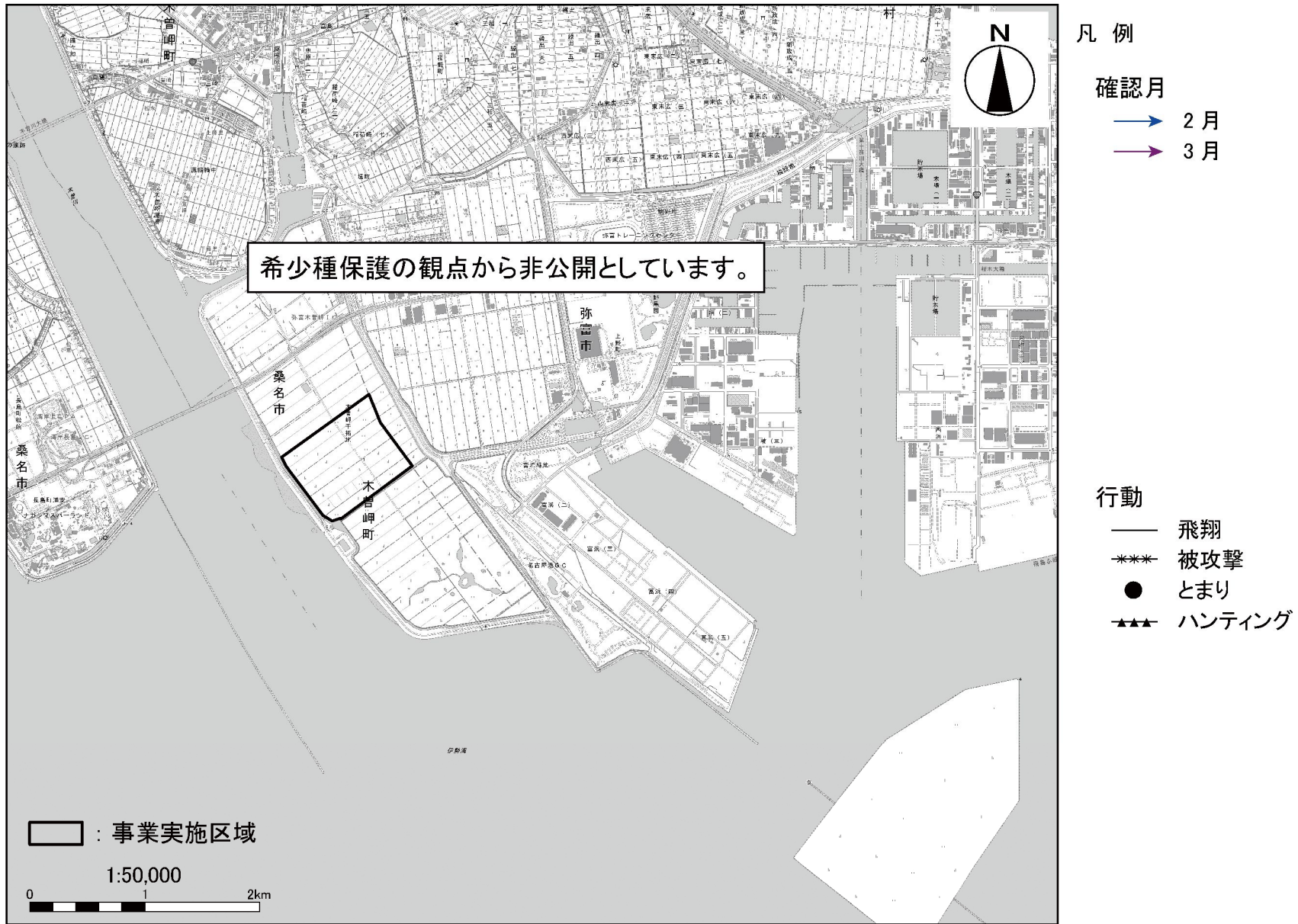


図 7-6-11 (24) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査: 令和3年 コチョウゲンボウ)



凡例

確認月

- 2月
- 5月
- 8月

行動

- 飛翔
- *** 攻撃
- *** ハンティング
- ◎ 旋回上昇

希少種保護の観点から非公開としています。

□ : 事業実施区域

1:50,000

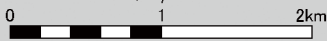


図 7-6-11 (25) 重要な鳥類の確認位置図 (猛禽類調査 : 令和3年 ハヤブサ)

③ 爬虫類

a) 爬虫類の生息状況

現地調査の結果、表 7-6-11 に示すとおり、2 目 5 科 7 種の爬虫類が確認された。
確認された爬虫類は、クサガメ、ヒガシニホントカゲ、シマヘビ等であった。

表 7-6-11 爬虫類確認種一覧

番号	目名	科名	種名	調査時期				重要な種	
				冬季	春季	夏季	秋季		
1	カメ	イシガメ	クサガメ		○	○	○		
2		ヌマガメ	ミシシippアカミミガメ		○	○	○		
3	有鱗	トカゲ	ヒガシニホントカゲ			○			
4		カナヘビ	ニホンカナヘビ		○	○			
5		ナミヘビ	シマヘビ			○	○		
6			アオダイショウ			○	○	○	
7			ヒバカリ					○	
計	2 目	5 科	7 種	0 種	5 種	6 種	4 種	0 種	

注) 分類、配列などは基本的に「令和 4 年度版 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(令和 4 年、国土交通省) に準拠した。

b) 重要な爬虫類

現地調査において、重要な爬虫類は確認されなかった。

④ 両生類

a) 両生類の生息状況

現地調査の結果、表 7-6-12 に示すとおり、1 目 3 科 4 種の両生類が確認された。

確認された両生類は、ニホンアマガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ヌマガエルであった。

表 7-6-12 両生確認種一覧

番号	目名	科名	種名	調査時期				重要な種
				冬季	春季	夏季	秋季	
1	無尾	アマガエル	ニホンアマガエル		○			
2		アカガエル	トノサマガエル			○		○
3			ウシガエル		○	○		
4		ヌマガエル	ヌマガエル		○	○		
計	1 目	3 科	4 種	0 種	3 種	3 種	0 種	1 種

注) 分類、配列などは基本的に「令和 4 年度版 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(令和 4 年、国土交通省)に準拠した。

b) 重要な両生類

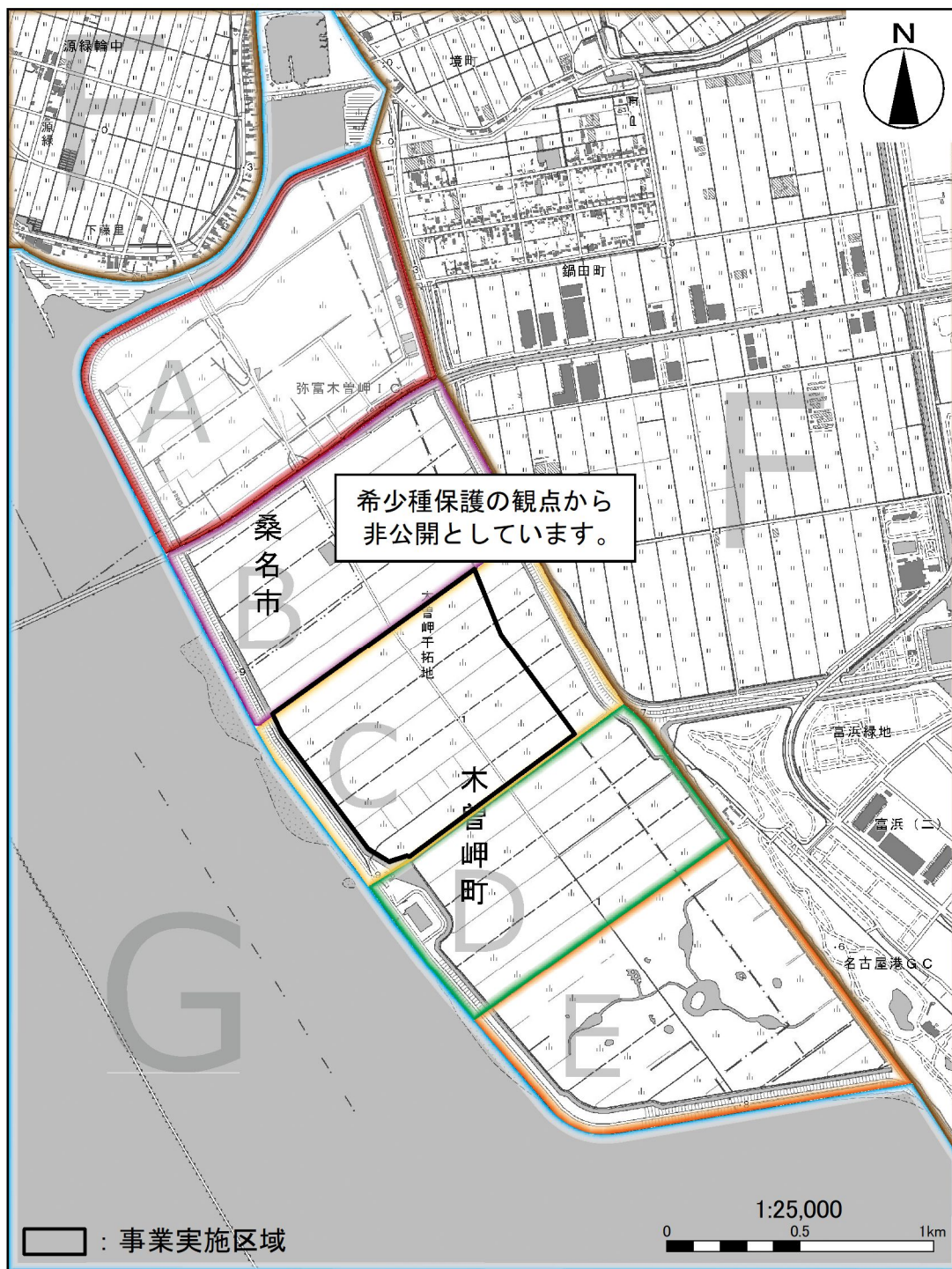
現地調査で確認された種のうち、重要な両生類はトノサマガエルの 1 種であった。

現地調査で確認された重要な両生類を表 7-6-13 に、確認位置を図 7-6-12 に示す。

表 7-6-13 現地調査により確認された重要な両生類

番号	目名	科名	種名	選定基準					
				①	②	③	④	⑤	⑥
1	無尾	アカガエル	トノサマガエル				NT		
計	1 目	1 科	1 種	0 種	0 種	0 種	1 種	0 種	0 種

注) 選定基準及びランクは表 7-6-3 に示す。



凡 例

種名

● トノサマガエル

ブロック区分

- Aブロック
- Bブロック
- Cブロック
- Dブロック
- Eブロック
- Fブロック
- Gブロック

図 7-6-12 重要な両生類の確認位置図

⑤ 陸上昆虫類

a) 陸上昆虫類の生息状況

現地調査の結果、表 7-6-14 に示すとおり、13 目 184 科 688 種の陸上昆虫類が確認された。確認された陸上昆虫類は、アジアイトトンボ、ハラビロカマキリ、スズムシ、オオヨコバイ等であった。

表 7-6-14 陸上昆虫類認種数一覧

番号	目名	科数	種数	調査時期		
				春季	夏季	秋季
1	トビムシ	4	4	2	4	3
2	トンボ目(蜻蛉目)	3	15	7	13	8
3	ゴキブリ目(網翅目)	1	1	1	1	1
4	カマキリ目(螳螂目)	1	2	0	2	2
5	ハサミムシ目(革翅目)	2	3	2	3	1
6	バッタ目(直翅目)	12	35	9	20	31
7	カメムシ目(半翅目)	34	124	49	76	72
8	アミメカゲロウ目(脈翅目)	2	10	4	2	8
9	トビケラ目(毛翅目)	2	3	1	2	1
10	チョウ目(鱗翅目)	25	103	50	35	68
11	ハエ目(双翅目)	34	109	68	47	65
12	コウチュウ目(鞘翅目)	40	202	100	120	100
13	ハチ目(膜翅目)	24	77	46	39	50
計	13 目	184 科	688 種	123 科 339 種	137 科 364 種	150 科 410 種

注) 分類、配列などは基本的に「令和 4 年度版 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(令和 4 年、国土交通省)に準拠した。

b) 重要な陸上昆虫類

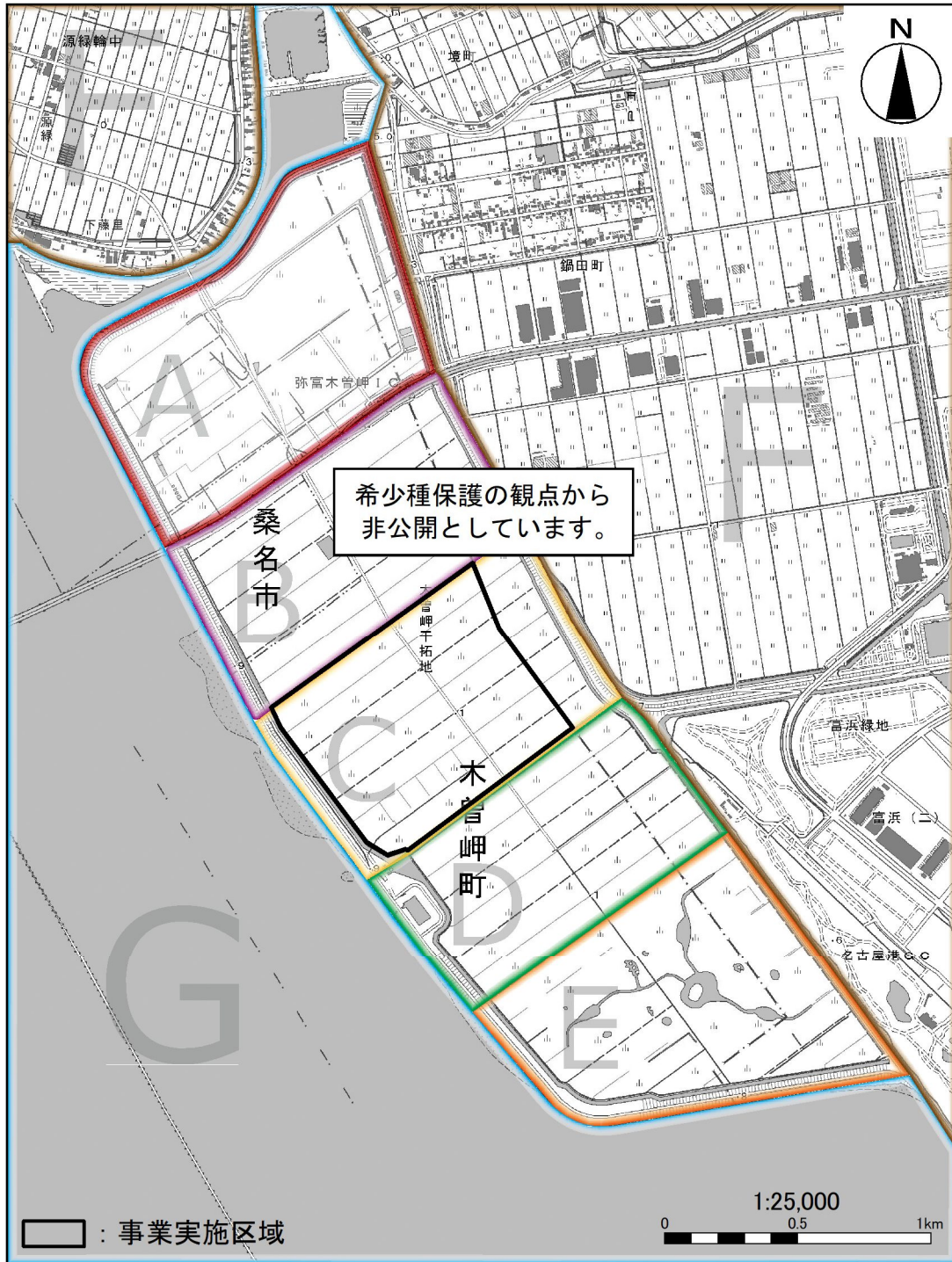
現地調査で確認された種のうち、重要な陸上昆虫類はノシメトンボ、コオイムシ、ハイイロボクトウ等の 7 種であった。

現地調査で確認された重要な陸上昆虫類を表 7-6-15 に、確認位置を図 7-6-13 に示す。

表 7-6-15 現地調査により確認された重要な陸上昆虫類

番号	目名	科名	種名	選定基準					
				①	②	③	④	⑤	⑥
1	トンボ(蜻蛉)	トンボ	ノシメトンボ						NT
2	カメムシ(半翅)	コオイムシ	コオイムシ				NT	NT	
3	チョウ(鱗翅)	ボクトウガ	ハイイロボクトウ				NT		
4	ハエ(双翅)	ミズアブ	ミズアブ					VU	
5	コウチュウ(鞘翅)	ガムシ	コガムシ				DD	NT	
6			コガタガムシ				VU	NT	
7	ハチ(膜翅)	クモバチ	アオスジクモバチ				DD		
計	6 目	6 科	7 種	0 種	0 種	0 種	5 種	4 種	1 種

注) 選定基準及びランクは表 7-6-3 に示す。



凡 例

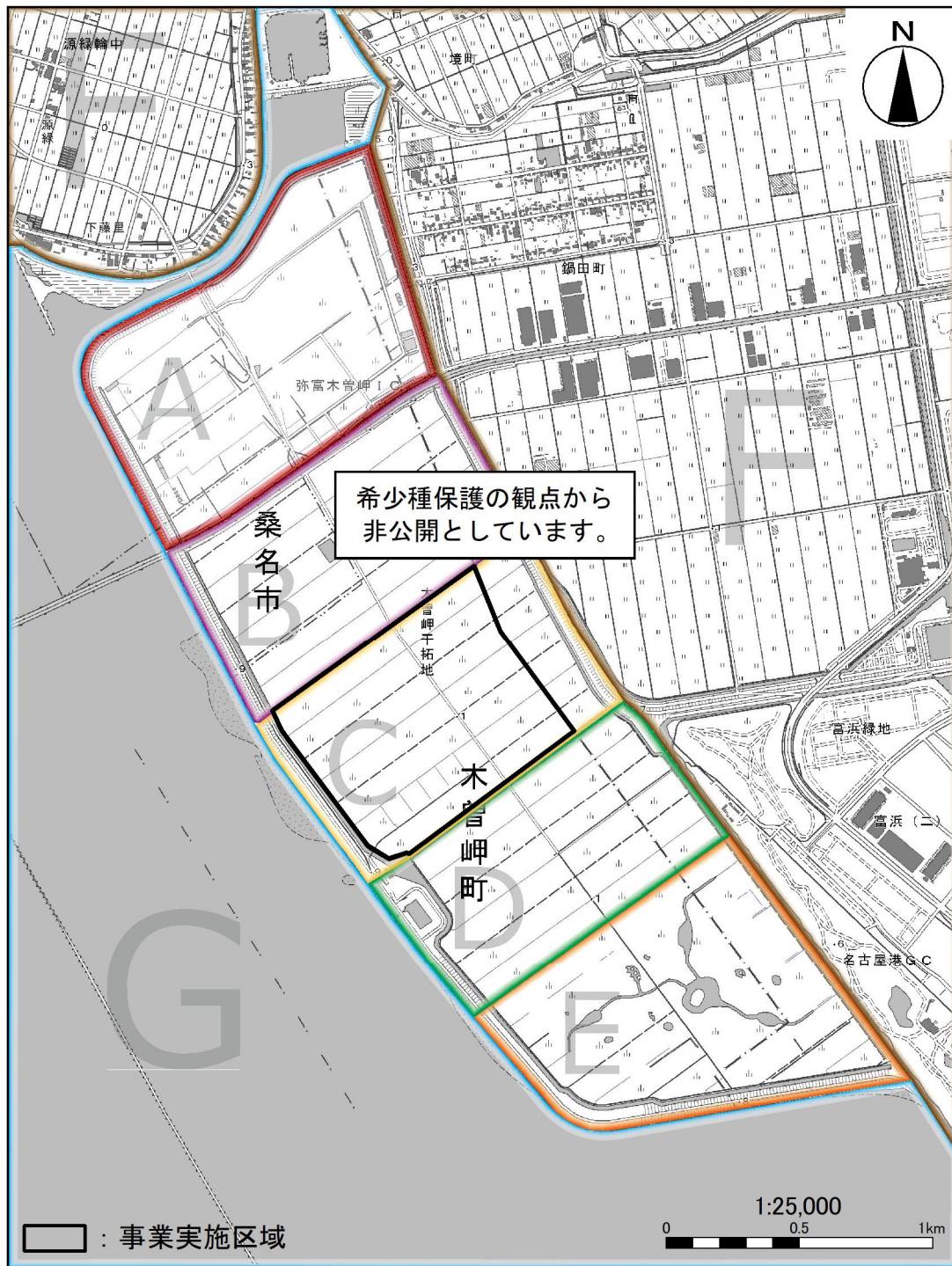
種名

- ノシメトンボ
- コオイムシ
- ハイイロボクトウ
- ミズアブ

ブロック区分

- Aブロック
- Bブロック
- Cブロック
- Dブロック
- Eブロック
- Fブロック
- Gブロック

図 7-6-13(1) 重要な陸上昆虫類の確認位置図



凡例

種名

- コガムシ
- コガタムシ
- アオスジクモバチ

ブロック区分

- Aブロック
- Bブロック
- Cブロック
- Dブロック
- Eブロック
- Fブロック
- Gブロック

図 7-6-13(2) 重要な陸上昆虫類の確認位置図

⑥ クモ類

a) クモ類の生息状況

現地調査の結果、表 7-6-16 に示すとおり、1 目 22 科 122 種のクモ類が確認された。確認されたクモ類は、ジグモ、カタハリウズグモ、アシプトヒメグモ等であった。

表 7-6-16 クモ類認種数一覧

番号	目名	科名	種数	調査時期		
				春季	夏季	秋季
1	クモ	ジグモ	1	1	1	1
2		ウズグモ	1	1	1	1
3		ヒメグモ	14	8	7	8
4		サラグモ	9	6	4	1
5		アシナガグモ	9	6	7	6
6		コガネグモ	22	14	13	15
7		コモリグモ	13	8	8	9
8		キシダグモ	3	2	3	1
9		ササグモ	1	1	1	1
10		シボグモ	1	1	1	1
11		タナグモ	2	1	1	2
12		ナミハグモ	1	0	1	0
13		ウシオグモ	2	1	1	2
14		ハグモ	1	0	0	1
15		ヤマトガケジグモ	1	0	1	0
16		ウエムラグモ	3	1	3	2
17		フクログモ	5	4	3	1
18		ネコグモ	2	1	1	1
19		ワシグモ	4	2	2	2
20		エビグモ	2	1	1	2
21		カニグモ	7	6	4	4
22		ハエトリグモ	18	9	12	8
計	1 目	22 科	122 種	19 科 74 種	21 科 76 種	20 科 69 種

注 1) 分類、配列などは基本的に「令和 4 年度版 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（令和 4 年、国土交通省）に準拠した。

注 2) 調査時期の数値は、種数を示す。

b) 重要なクモ類

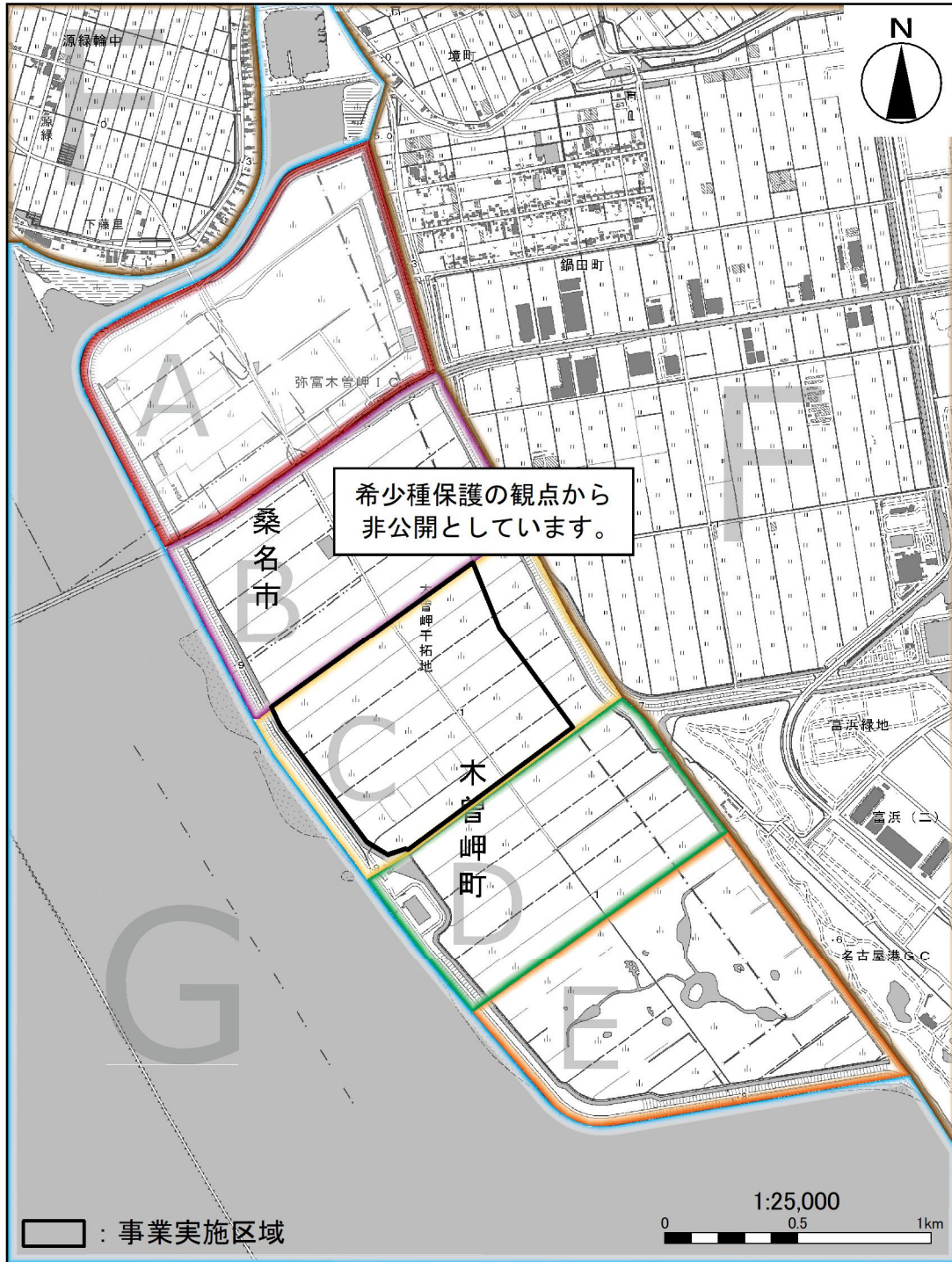
現地調査で確認された種のうち、重要なクモ類はオニグモ、コガネグモ、シロオビトリノフンダマシ等の6種であった。

現地調査で確認された重要なクモ類を表 7-6-17 に、確認位置を図 7-6-14 に示す。

表 7-6-17 現地調査により確認された重要なクモ類

番号	目名	科名	種名	選定基準					
				①	②	③	④	⑤	⑥
1	クモ	コガネグモ	オニグモ					NT	
2			コガネグモ					NT	NT
3			シロオビトリノフンダマシ						NT
4			アカイトトリノフンダマシ						NT
5		コモリグモ	エビチャコモリグモ						EN
6		ネコグモ	オビジガバチグモ					DD	NT
計	1 目	3 科	6 種	0 種	0 種	0 種	0 種	3 種	5 種

注) 選定基準及びランクは表 7-6-3 に示す。



凡例

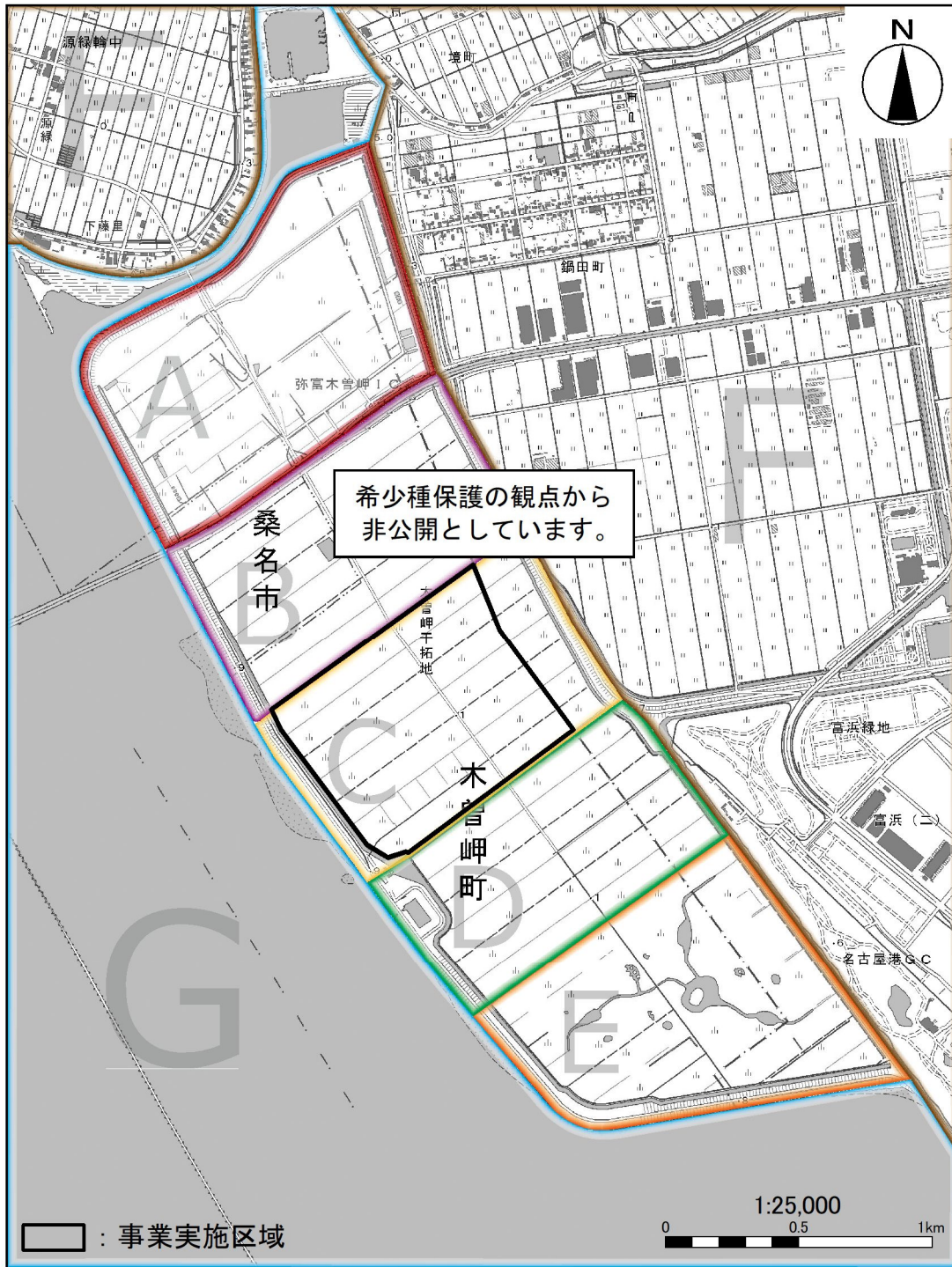
種名

- オニグモ
- コガネグモ

ブロック区分

- Aブロック
- Bブロック
- Cブロック
- Dブロック
- Eブロック
- Fブロック
- Gブロック

図 7-6-14(1) 重要なクモ類の確認位置図



凡例
種名

- シロオビトリノフンダマシ
- アカイロトリノフンダマシ
- エビチャコモリグモ
- オビジカバチグモ

ブロック区分

- Aブロック
- Bブロック
- Cブロック
- Dブロック
- Eブロック
- Fブロック
- Gブロック

図 7-6-14(2) 重要なクモ類の確認位置図

⑦ 陸生貝類

a) 陸生貝類の生息状況

現地調査の結果、表 7-6-18 に示すとおり、1 目 13 科 19 種の陸生貝類が確認された。
確認された陸生貝類は、ナミコギセル、ミジンマイマイ、トクサオカチョウジ等であった。

表 7-6-18 陸生貝類確認種一覧

番号	目名	科名	種名	調査時期			重要な種
				春季	夏季	秋季	
1	柄眼	キセルガイ	ナミコギセル			○	
2		ミジンマイマイ	ミジンマイマイ			○	
3		アフリカマイマイ	トクサオカチョウジ	○	○	○	
4			ホソオカチョウジ	○	○	○	
5			オカチョウジ	○	○	○	
6		ナタネガイ	ナタネガイ属の一種			○	
7		イシノシタ	ノハライシノシタ			○	
8		ナメクジ	ナメクジ属の一種			○	
9		オカモノアラガイ	ヒメオカモノアラガイ		○		
10		シタラ	オオウエキビ			○	○
11			ハリマキビ	○		○	
12			ヒメベッコウ			○	
13		コハクガイ	コハクガイ	○	○	○	
14		エゾエンザ	ヒメコハク		○	○	
15		コウラナメクジ	チャコウラナメクジ	○	○	○	
16		ノコウラナメクジ	ノハラナメクジ	○	○	○	
17		ナンバンマイマイ	イセノナミマイマイ	○	○	○	
18			オナジマイマイ	○	○	○	
19			ウスカワマイマイ	○	○	○	
計	1 目	13 科	19 種	10 種	11 種	18 種	1 種

注) 分類、配列などは基本的に「日本陸産貝類総目録」(昭和 63 年、日本陸産貝類総目録刊行会)に準拠した。

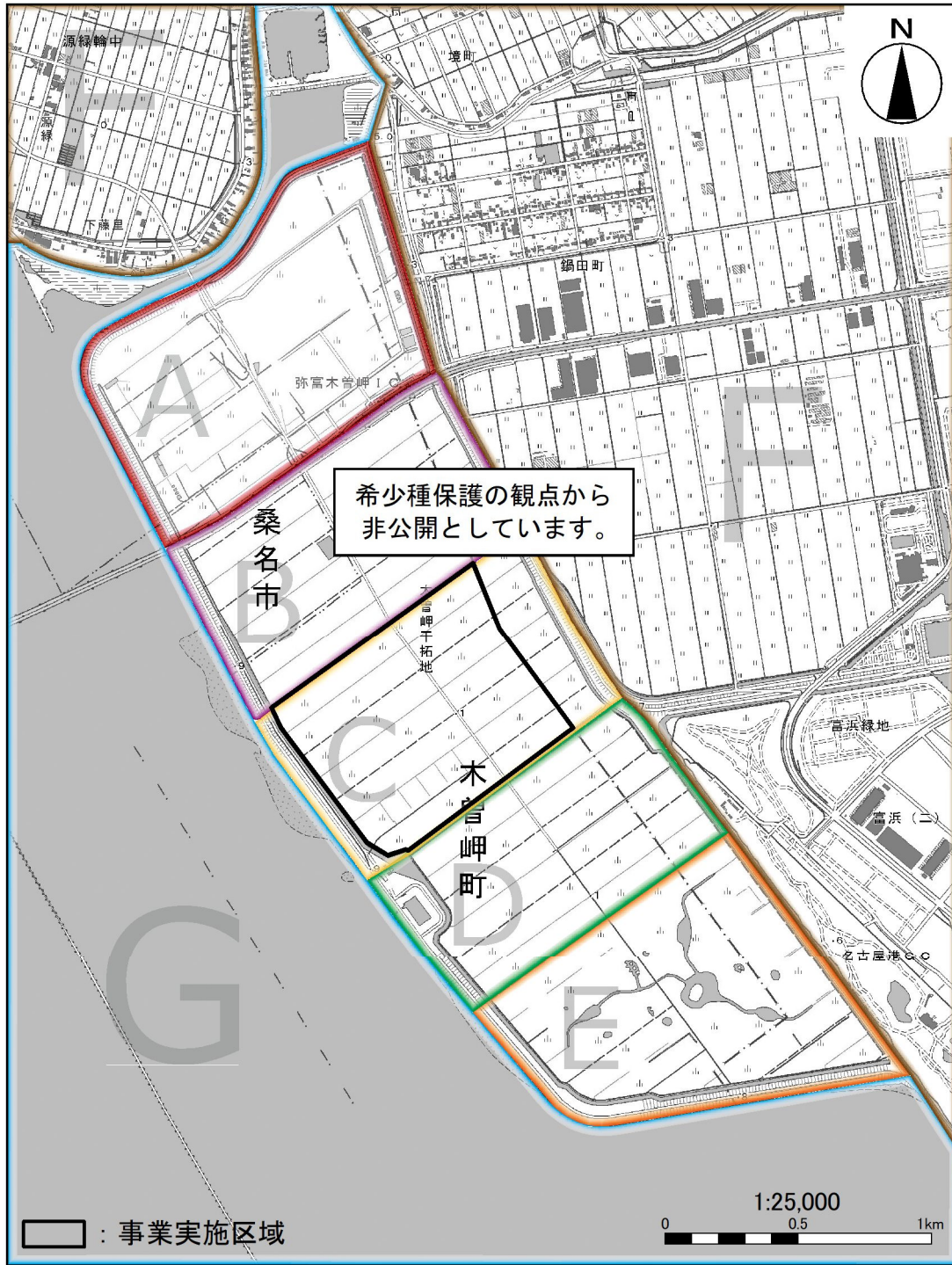
b) 重要な陸生貝類

現地調査で確認された種のうち、重要な陸生貝類はオオウエキビの 1 種であった。
現地調査で確認された重要な陸生貝類を表 7-6-19 に、確認位置を図 7-6-15 に示す。

表 7-6-19 現地調査により確認された重要な陸生貝類

番号	目名	科名	種名	選定基準					
				①	②	③	④	⑤	⑥
1	柄眼	シタラ	オオウエキビ				DD		
計	1 目	1 科	1 種	0 種	0 種	0 種	1 種	0 種	0 種

注) 選定基準及びランクは表 7-6-3 に示す。



凡 例

種名

● オオウエキビ

ブロック区分

- Aブロック
- Bブロック
- Cブロック
- Dブロック
- Eブロック
- Fブロック
- Gブロック

図 7-6-15 重要な陸生貝類の確認位置図

⑧ 土壌動物

a) 土壌動物の生息状況

現地調査の結果、表 7-6-20 に示すとおり、4 門 10 綱 24 目 95 科 138 種の土壌動物が確認された。

確認された土壌動物は、セマルヤリダニ、ゲジ、オカダンゴムシ等であった。

表 7-6-20 土壌動物種数一覧

番号	門名	綱名	目名	科数	種数	
1	線形動物	線虫	—	1	1	
2	軟体動物	マキガイ	柄眼	1	2	
3	環形動物	ミミズ	イトミミズ	1	1	
4			ツリミミズ	1	1	
5	節足動物	クモガタ	カニムシ	2	2	
6			ダニ	39	52	
7			クモ	6	6	
8		ムカデ	ゲジ	1	1	
9			イシムカデ	1	1	
10			ジムカデ	1	1	
11		コムカデ	コムカデ	1	1	
12		ヤスデ	ヒメヤスデ	1	1	
13			オビヤスデ	1	1	
14		軟甲	ワラジムシ	2	2	
15		内顎	トビムシ	4	8	
16		昆虫		ゴキブリ(網翅)	1	1
17				ハサミムシ(革翅)	1	1
18				バッタ(直翅)	1	1
19				アザミウマ(総翅)	1	1
20				カメムシ(半翅)	4	4
21				チョウ(鱗翅)	1	1
22	ハエ(双翅)			7	7	
23	コウチュウ(鞘翅)			15	24	
24	ハチ(膜翅)			1	17	
計	4 門	10 綱	24 目	95 科	138 種	

注) 分類、配列などは基本的に「令和 4 年度版 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(令和 4 年、国土交通省)及び「日本産土壌動物 分類のための図解検索 第 2 版」(平成 27 年、東海大学出版部)に準拠した。

b) 重要な土壌動物

現地調査において、重要な土壌動物は確認されなかった。

2) 予測

(1) 予測の手法

① 予測項目

重要な種等の生息に及ぼす影響の程度

② 予測対象種

予測対象種として、現地調査により事業実施区域及びその周辺で生息が確認された重要な種（哺乳類 1 種、鳥類 21 種、両生類 1 種、陸上昆虫類 7 種、クモ類 6 種、陸生貝類 1 種）計 34 種を選定した。

予測対象とした重要な種を表 7-6-21 に示す。

③ 予測手法

動物の重要な種について、分布又は生息環境の改変の程度を踏まえた解析により行った。

樹木の伐採・処理及び土地の造成位置並びに工事施工ヤード及び工事用道路等の設置位置と重要な種の生息地の分布範囲から、生息環境が消失・縮小する区域及びその程度を把握した。

また、事業実施区域及びその周辺において繁殖が確認された猛禽類を対象に、重機の稼働、資材の運搬、土地の利用及び発生車両の走行による対象種の生態を踏まえた生息環境の質的変化の程度を把握した。

次に、それらが重要な種等の生息に及ぼす影響の程度を、科学的知見や類似事例を参考に予測した。

予測手順を図 7-6-16 に、予測対象種及び影響要因を表 7-6-21 に示す。

【予測手法】

直接変更の影響の検討

樹木の伐採・処理及び土地の造成位置並びに工事施工ヤード及び工事用道路等の設置位置と重要な種の生息地の分布範囲から、生息環境が消失・縮小する区域及びその程度の把握

質的变化の影響の検討

重機の稼働、資材の運搬、土地の利用及び発生車両の走行の騒音等（対象：事業実施区域及びその周辺において繁殖が確認された猛禽類）による生息環境の質的变化の程度の把握

【予測結果】

A. 生息環境への影響が大きい	B. 生息環境への影響がある	C. 生息環境への影響が極めて小さい	D. 生息環境への影響がない
<p>【直接変更の影響】 (チュウヒ・オオタカ※) ・重要な生息環境（営巣環境・採餌環境など）の大部分が消失し、周辺に同様の環境が分布していない。</p> <p>(上記以外の陸生動物) ・生息環境の大部分が消失し、周辺に同様の環境が分布していない。</p>	<p>【直接変更の影響】 (チュウヒ・オオタカ※) ・重要な生息環境（営巣環境・採餌環境など）の縮小が生じるが、周辺に同様の環境が分布している。</p> <p>(上記以外の陸生動物) ・生息環境の縮小が生じるが、周辺に同様の環境が分布している。</p>	<p>【直接変更の影響】 (チュウヒ・オオタカ※) ・重要な生息環境（営巣環境・採餌環境など）の縮小が生じない。</p> <p>・生息環境の一部縮小が生じるが、周辺に同様の環境が分布している。</p> <p>(上記以外の陸生動物) ・生息環境の一部縮小が生じるが、周辺に同様の環境が広く分布している。</p>	<p>【直接変更の影響】 (チュウヒ・オオタカ※) ・－</p> <p>(上記以外の陸生動物) ・生息環境の縮小が生じない。</p>
<p>【質的变化の影響】 (チュウヒ・オオタカ※) ・重機の稼働に伴う騒音等による生息環境の質的变化が大きい。</p>	<p>【質的变化の影響】 (チュウヒ・オオタカ※) ・重機の稼働に伴う騒音等による生息環境の質的变化が生じる。</p>	<p>【質的变化の影響】 (チュウヒ・オオタカ※) ・重機の稼働に伴う騒音等による生息環境の質的变化がほとんど生じない。</p>	<p>【質的变化の影響】 (チュウヒ・オオタカ※) ・－</p>

※事業実施区域及びその周辺で繁殖が確認された猛禽類

注) 「直接変更の影響の検討」及び「質的变化の影響の検討」を行い、より大きい影響の程度（A～D）を予測結果とする。

図 7-6-16 陸生動物の予測手順

表 7-6-21 予測対象種及び影響要因

番号	分類	目名	科名	種名	工事の実施		土地の存在及び供用		
					<ul style="list-style-type: none"> ・重機の稼働 ・資材の運搬 ・樹木の伐採・処理 ・土地の造成 ・工事用道路等の建設 		<ul style="list-style-type: none"> ・造成地の存在 ・土地の利用 ・発生車両の走行 		
					直接改変 生息環境 の消失 又は縮小	質的変化 騒音等に よる生息環境 の変化	直接改変 生息環境 の消失 又は縮小	質的変化 騒音等に よる生息環境 の変化	
1	哺乳類	ネズミ(齧歯)	ネズミ	カヤネズミ	○		○		
1	鳥類	カモ	カモ	カワアイサ	○		○		
2		ペリカン	サギ	チュウサギ	○		○		
3		ツル	クイナ	ヒクイナ	○		○		
4		チドリ	チドリ	タゲリ	○		○		
5				ケリ	○		○		
6				コチドリ	○		○		
7			カモメ	コアジサシ	○		○		
8		タカ	ミサコ	ミサコ	○		○		
9			タカ	ハチクマ	○		○		
10				チュウビ	○	○	○	○	
11				ハイロチュウビ	○	○	○	○	
12				ツミ	○		○		
13				ハイタカ	○		○		
14				オオタカ	○	○	○	○	
15				サシバ	○		○		
16		ハヤブサ		ハヤブサ	コチョウゲンボウ	○		○	
17				ハヤブサ	○		○		
18		スズメ	ムシクイ	オオムシクイ	○		○		
19				ヒタキ	アカハラ	○		○	
20					コサメヒタキ	○		○	
21					キビタキ	○		○	
1	両生類	無尾	アカガエル	トノサマガエル	○		○		
1	陸上	トンボ(蜻蛉)	トンボ	ノシメトンボ	○		○		
2	昆虫類	カメムシ(半翅)	コオイムシ	コオイムシ	○		○		
3		チョウ(鱗翅)	ホクトウガ	ハイロホクトウ	○		○		
4		ハエ(双翅)	ミスアブ	ミスアブ	○		○		
5		コウチュウ	ガムシ	コガムシ	○		○		
6		(鞘翅)		コガタガムシ	○		○		
7		ハチ(膜翅)	クモハチ	アオスシクモハチ	○		○		
1		クモ類	クモ	コガネグモ	オニグモ	○		○	
2	コガネグモ				○		○		
3	シロオビトリノフンダマシ				○		○		
4	アカイロトリノフンダマシ				○		○		
5	コモリグモ			エビチャコモリグモ	○		○		
6	ネコグモ			オビシガハチグモ	○		○		
1	陸生 貝類	柄眼	シタラ	オオウエキビ	○		○		

④ 予測地域

予測地域は、調査地域のうち、陸生動物の生息の特性を踏まえ、重要な種等に係る環境影響を受けるおそれがあると認められる地域とした。

⑤ 予測地点

予測地点は、事業実施区域及びその周辺とした。

⑥ 予測対象時期等

予測対象時期等は、陸生動物の生息の特性を踏まえ、重要な種等に係る環境影響を的確に把握できる時期とした。

具体的には、工事实施時期及び建設発生土ストックヤードが完成・供用する時期とした。

(2) 予測の結果

① 予測結果の概要

重要な種の予測結果の概要を表 7-6-22(1)～(6)に示す。

生息環境への影響については、以下のとおり整理した。

- A：生息環境への影響が大きい
- B：生息環境への影響がある
- C：生息環境への影響が極めて小さい
- D：生息環境への影響がない

表 7-6-22(1) 重要な種の予測結果概要（哺乳類）

番号	分類	種名	調査地域における 主な生息環境	確認位置(ブロック区分)					主な生息環境 の改変 有無	生息環境 への影響	
				干拓地内						工事	び存在 供用及
				A	B	C	D	E			
1	哺乳類	カヤネズミ	草地	○		○	○	○	有	C	C

表 7-6-22(2) 重要な種の予測結果概要（鳥類）

番号	分類	種名	調査地域における 主な生息環境	確認位置(ブロック区分)							主な生息環境 の改変 有無	生息環境 への影響	
				干拓地内					干拓地外			工事	び存在 供用及
				A	B	C	D	E	F	G			
1	鳥類	カアア	水域			○				○	無	D	D
2		チュウサギ	農耕地						○		無	D	D
3		ヒクイ	湿性草地				○				有	C	C
4		タケリ	湿性草地			○					有	C	C
5		ケリ	農耕地						○		無	D	D
6		コトドリ	造成地	○	○	○					無	D	D
7		コアシサシ	造成地	○						○	無	D	D
8		ミサコ	水域			○				○	無	D	D
9		ハチクマ	(樹林地) 注							○	有	C	C
10		チュウビ	草地			○				○	有	B	B
11		ハイロチュウビ	草地			○				○	有	C	C
12		ツミ	(草地・樹林地) 注							○	有	C	C
13		ハイタカ	(草地・樹林地) 注			○				○	有	C	C
14		オオタカ	樹林地			○				○	有	A	A
15		サシバ	(草地・樹林地) 注			○				○	有	C	C
16		コチョウゲンボウ	農耕地							○	無	D	D
17		ハヤブサ	(草地・樹林地) 注			○				○	有	C	C
18		オムシクイ	(草地・樹林地) 注			○					有	C	C
19		アカハラ	(樹林地) 注			○					有	C	C
20		コサメビタキ	(草地・樹林地) 注			○	○				有	C	C
21		キビタキ	樹林地			○	○				有	C	C

注) 調査地域には本種の生息環境は存在しないが、カッコ内に記載の環境を採餌環境の一部として利用していると考えられる。

表 7-6-22 (3) 重要な種の予測結果概要（両生類）

番号	分類	種名	調査地域における 主な生息環境	確認位置(ブロック区分)					主な生息環境 の改変 有無	生息環境 への影響	
				干拓地内						工事	び存在 供用及
				A	B	C	D	E			
1	両生類	トノサマガエル	水域	○					無	D	D

表 7-6-22 (4) 重要な種の予測結果概要（陸上昆虫類）

番号	分類	種名	調査地域における 主な生息環境	確認位置(ブロック区分)					主な生息環境 の改変 有無	生息環境 への影響	
				干拓地内						工事	び存在 供用及
				A	B	C	D	E			
1	陸上昆虫類	ハシトシホ	湿性草地	○	○	○			有	C	C
2		コイムシ	水域		○				無	D	D
3		ハイロホクワ	湿性草地	○		○	○	○	有	C	C
4		ミスアブ	湿性草地				○		有	C	C
5		コガムシ	湿性草地	○	○				有	C	C
6		コガカムシ	湿性草地				○		有	C	C
7		アオシクモバチ	湿性草地					○	有	C	C

表 7-6-22 (5) 重要な種の予測結果概要（クモ類）

番号	分類	種名	調査地域における 主な生息環境	確認位置(ブロック区分)					主な生息環境 の改変 有無	生息環境 への影響	
				干拓地内						工事	び存在 供用及
				A	B	C	D	E			
1	クモ類	オニグモ	草地・樹林地	○		○	○	○	有	C	C
2		コガネグモ	草地	○	○	○	○	○	有	C	C
3		シロオビトリノフダマシ	草地	○		○			有	C	C
4		アカイロトリノフダマシ	草地		○				有	C	C
5		エビチャコモリグモ	草地				○	○	有	C	C
6		オビシガバチグモ	草地				○		有	C	C

表 7-6-22 (6) 重要な種の予測結果概要（陸生貝類類）

番号	分類	種名	調査地域における 主な生息環境	確認位置(ブロック区分)					主な生息環境 の改変 有無	生息環境 への影響	
				干拓地内						工事	び存在 供用及
				A	B	C	D	E			
1	陸生貝類	オオウエキバ	樹林地	○					有	C	C

② 予測結果

a) 哺乳類

重要な哺乳類の予測結果を表 7-6-23 に示す。

表 7-6-23 重要な哺乳類の予測結果（カヤネズミ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・石川・福島県以南の本州、四国、九州とその属島に広く分布する。 ・低地から標高 1,200m 付近までの山地に分布する。低地の草地に多い。 ・草本の茎葉、種子、果実、昆虫などを食べる。 ・春から秋にかけてイネ科草本やススキのような草本の茎の途中に植物の葉を細切したものを編み上げた球巣をつくり、産仔や育仔を球巣中でおこなう。1 回に 2～8 仔を産む。 	
現地調査における 確認状況	確認状況	草地において球巣が確認された。
	確認時期	R4 冬季、夏季、秋季
	確認位置	A、C～E ブロックにおいて 15 地点で球巣 15 個が確認された。 A ブロック：5 地点（球巣 5 個） C ブロック：4 地点（球巣 4 個） D ブロック：3 地点（球巣 3 個） E ブロック：3 地点（球巣 3 個）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、草地と考えられる。	
工事の実施による 影響の予測	工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。 工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である草地の一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。	
土地の存在及び供用 による影響の予測	建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。 土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。	

b) 鳥類

重要な鳥類の予測結果を表 7-6-24～表 7-6-44 に示す。

また、木曾岬干拓地において繁殖が確認されたチュウヒ及びオオタカの行動圏解析結果を図 7-6-17 及び図 7-6-18 に示す。

表 7-6-24 重要な鳥類の予測結果（カワアイサ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・本州、四国、九州では冬期に河川や湖沼に生息する。 ・比較的広い瀬や淵のある河川やダム、広い池沼を好んで越冬する。河口や海岸などで1～数羽の記録もある。 ・巧みに潜水して魚類を捕食するが、比較的浅い水辺で顔を水につけ、速く泳ぎながら魚を追うこともある。 ・ユーラシア大陸北部及び北アメリカ大陸の亜寒帯と温帯の一部で繁殖し、日本では、北海道に周年生息し繁殖する。 	
現地調査における確認状況	確認状況	河川（木曾川）及び水路において個体が確認された。
	確認時期	R4 冬季
	確認位置	C、Gブロックにおいて3地点で3個体が確認された。 Cブロック：1地点（1個体） Gブロック：2地点（2個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、水域と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である水域の縮小は生じない。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である水域の縮小は生じない。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	

表 7-6-25 重要な鳥類の予測結果（チュウサギ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥。本州から九州で繁殖する。 ・低地の水辺やそれに続く草地に生息する。 ・餌は魚介類や昆虫類。 ・4～8月に樹上に巣をつくり、コロニーで繁殖する。 	
現地調査における確認状況	確認状況	農耕地において個体が確認された。
	確認時期	R4 夏季、秋季
	確認位置	Fブロックにおいて3地点で9個体が確認された。 Fブロック：3地点（9個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、農耕地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である農耕地の縮小は生じない。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である農耕地の縮小は生じない。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	

表 7-6-26 重要な鳥類の予測結果（ヒクイナ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥。日本全土で繁殖し、冬は南方に渡る。 ・アシ原、湿地、湿田などに生息する。 ・水生昆虫や軟体動物、水生植物の若葉などを採食する。 ・繁殖期は4月から10月頃で、イネ科の株の中などに営巣する。 	
現地調査における確認状況	確認状況	湿性草地において個体及び鳴き声が確認された。
	確認時期	R4 春季、秋季
	確認位置	Eブロックにおいて2地点で1個体及び鳴き声（1個体）が確認された。 Eブロック：2地点（1個体・鳴き声1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、湿性草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-27 重要な鳥類の予測結果（タゲリ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・冬鳥として本州、四国、九州などの各地に渡来する。 ・休耕田、水田、河川に飛来する。 ・地上の小動物を食べる。 ・ユーラシア大陸温帯、亜寒帯で繁殖し、冬は南へ渡る。 	
現地調査における確認状況	確認状況	樹林地において個体が確認された。
	確認時期	R4 冬季
	確認位置	Cブロックにおいて1地点で1個体が確認された。 Cブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、湿性草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-28 重要な鳥類の予測結果（ケリ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・全国的に確認され、九州以北から本州にかけて繁殖するが局地的。 ・水田、河原、荒れ地、芝地、牧草地、灌木が散在する草原など平坦で開けた場所に生息する。 ・昆虫の成虫・幼虫、イネ科やタデ科などの草の種子などをついばむ。 ・繁殖期は3月から6月。耕作地、休耕地、放棄水田、河川敷、草地を利用して繁殖する。 	
現地調査における確認状況	確認状況	農耕地において個体が確認された。
	確認時期	R4 春季、夏季
	確認位置	Fブロックにおいて4地点で5個体が確認された。 Fブロック：4地点（5個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、農耕地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である農耕地の縮小は生じない。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である農耕地の縮小は生じない。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	

表 7-6-29 重要な鳥類の予測結果（コチドリ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・日本では主に夏鳥で、九州以北で繁殖する。 ・河川敷内の中州、水辺、河口の三角州や干潟、海岸の砂浜、植生が疎らで裸出土の多い荒地などでみられる。 ・砂泥地の表面から。昆虫の成虫・幼虫をくわえとる。 ・繁殖期は4月から7月。巣は砂地に雌雄で浅い窪みを掘り、内装に小石や貝殻の破片、あるいは植物片などを敷く。 	
現地調査における確認状況	確認状況	人工裸地や人工構造物付近において個体が確認された。
	確認時期	R4 春季、夏季
	確認位置	A、B、Cブロックにおいて13地点で9個体及び鳴き声(6個体)が確認された。 Aブロック：4地点（3個体・鳴き声1個体） Bブロック：8地点（4個体・鳴き声5個体） Cブロック：1地点（2個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、造成地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。 工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である造成地の縮小は生じない。 このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。	
土地の存在及び供用による影響の予測	建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。 土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である造成地の縮小は生じない。 このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。	

表 7-6-30 重要な鳥類の予測結果（コアシサシ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥。国内では、本州の東北地方南部以南に渡来し、繁殖する。 ・餌は小型の魚類で、空中から狙いを付けて水中に飛び込み捕獲する。 ・沿岸部の埋立地や干拓地、河川の河原や造成地などで繁殖する。繁殖地に集合するのは4月下旬からで、5月には抱卵を始め、順調であれば6月中旬にはヒナが少し飛べるようになる。 	
現地調査における確認状況	確認状況	河川（鍋田川）や人工裸地において個体が確認された。
	確認時期	R4 夏季
	確認位置	A、Fブロックにおいて7地点で39個体が確認された。 Aブロック：2地点（13個体） Gブロック：5地点（26個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、造成地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である造成地の縮小は生じない。このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。	
土地の存在及び供用による影響の予測	建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である造成地の縮小は生じない。このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。	

表 7-6-31 重要な鳥類の予測結果（ミサゴ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・主に留鳥。冬期には越冬個体加わる。 ・干潟や河川の下流から河口、沿岸部にある池沼や水路でよくみられる。 ・餌は主に大型の魚類。 ・海岸の孤立した岩の上や樹上などで営巣する。 	
現地調査における 確認状況	確認状況	河川（木曾川・鍋田川）及び水路等において個体が確認された。また、調査地域での営巣は確認されなかった。
	確認時期	R3 春季、夏季、冬季 R4 冬季、春季、夏季、秋季
	確認位置	（鳥類調査） A～Fブロックにおいて39地点で40個体が確認された。 Aブロック：2地点（2個体） Bブロック：9地点（9個体） Cブロック：7地点（7個体） Dブロック：7地点（7個体） Eブロック：5地点（5個体） Gブロック：9地点（10個体） （猛禽類調査） 木曾岬干拓地内外で計178回確認された。 R3-[4月：23回、5月：4回、6月：7回、7月：10回、 8月：11回、12月：12回] R4-[1月：19回、2月：18回、3月：16回、4月：15回、 5月：2回、6月：19回、7月：12回、8月：10回]
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、水域と考えられる。	
工事の実施による 影響の予測	工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。 工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である水域の縮小は生じない。 また、木曾岬干拓地内において本種の繁殖は確認されなかった。 このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。	
土地の存在及び供用 による影響の予測	建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。 土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である水域の縮小は生じない。 また、木曾岬干拓地内において本種の繁殖は確認されなかった。 このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。	

表 7-6-32 重要な鳥類の予測結果（ハチクマ）

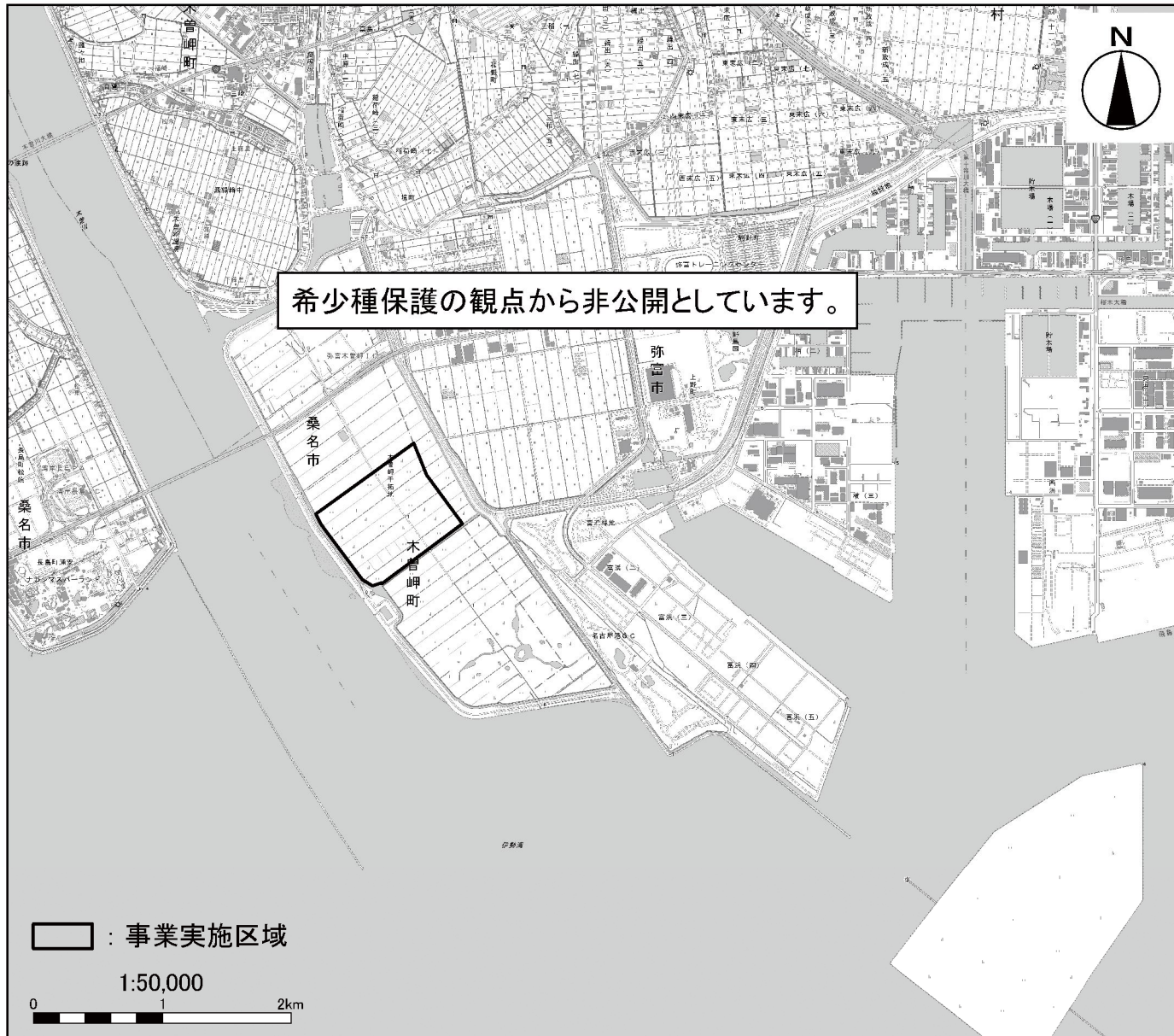
項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥。国内では本州以北の低山帯に渡来、繁殖し、中国南部から東南アジアで越冬する。 ・餌は主に中小型のハチ類の幼虫や両生爬虫類。 ・繁殖期に平地近くから標高 1,000m の山地までの環境に生息し、丘陵地や山地で繁殖する。アカマツやナラ類などの樹上に営巣する。 	
現地調査における確認状況	確認状況	木曾岬干拓地外において個体が確認された。渡りの移動途中の個体と考えられる。 また、調査地域での営巣は確認されなかった。
	確認時期	R4 春季
	確認位置	(猛禽類調査) 木曾岬干拓地外で計 2 回確認された。 R4-[5 月 : 2 回]
生息環境の分布状況	<p>本種の生態及び現地調査による確認状況から、本種の生息環境は丘陵地や山地の樹林地と考えられるが、調査地域に同様の環境は存在しない。本種は調査地域の樹林地を採餌環境の一部として利用していると考えられる。</p>	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である丘陵地や山地の樹林地は存在しない。工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の採餌環境の一部である樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である丘陵地や山地の樹林地は存在しない。土地の存在（造成地の存在）により本種の採餌環境の一部である樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-33(1) 重要な鳥類の予測結果 (チュウヒ)

項目	内容											
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・国内では、三重県以外に北海道、青森県、秋田県、石川県などで繁殖する。 ・冬鳥として渡来する個体がほとんどである。越冬地は河口付近のアシ原。 ・ネズミ類、小鳥類を捕食する。餌場として広大なアシ原を必要とする。 ・開けたアシ原などの地上で営巣する。 											
現地調査における確認状況	確認状況	<p>草地等において個体が確認された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・採餌行動は木曾岬干拓地全域で確認され、Eブロックにおいて高頻度で確認された。 ・令和3年に木曾岬干拓地内で、令和4年に木曾岬干拓地外で繁殖が確認された。 ・D及びEブロックにおいて、ねぐら入り及びねぐら立ちが確認された。 										
	確認時期	R3 春季、夏季、冬季、R4 冬季、春季、夏季										
	確認位置	<p>(鳥類調査) A、Dブロックにおいて4地点で4個体が確認された。 Aブロック：3地点(3個体) Dブロック：1地点(1個体)</p> <p>(猛禽類調査) 木曾岬干拓地内外で計336回確認された。 R3-[4月：76回、5月：28回、6月：19回、7月：3回、8月：13回、12月：8回] R4-[1月：36回、2月：43回、3月：29回、4月：40回、5月：17回、6月：19回、7月：1回、8月：4回]</p>										
生息環境の分布状況	<p>本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、草地と考えられる。</p> <p>令和3年及び令和4年繁殖シーズンにおける行動圏解析結果は、図7-6-17に示すとおりであり、事業実施区域と行動圏(最大行動圏、95%行動圏、高利用域、営巣中心域)との位置関係は、下表に示すとおりである。</p>											
	行動圏の区分	<table border="1" style="width:100%; text-align:center;"> <tr> <td style="width:50%;">メッシュ数 [事業実施区域内/全体]</td> <td style="width:50%;">面積 (ha) [事業実施区域内/全体]</td> </tr> <tr> <td>最大行動圏</td> <td>66.4/1529.1</td> </tr> <tr> <td>95%行動圏</td> <td>66.4/1305.0</td> </tr> <tr> <td>高利用域</td> <td>57.1/408.6</td> </tr> <tr> <td>営巣中心域*</td> <td>0.0/ 39.5</td> </tr> </table>	メッシュ数 [事業実施区域内/全体]	面積 (ha) [事業実施区域内/全体]	最大行動圏	66.4/1529.1	95%行動圏	66.4/1305.0	高利用域	57.1/408.6	営巣中心域*	0.0/ 39.5
	メッシュ数 [事業実施区域内/全体]	面積 (ha) [事業実施区域内/全体]										
	最大行動圏	66.4/1529.1										
	95%行動圏	66.4/1305.0										
高利用域	57.1/408.6											
営巣中心域*	0.0/ 39.5											
最大行動圏	21/232											
95%行動圏	21/198											
高利用域	16/ 62											
営巣中心域*	-											
<p>※営巣中心域：巣から半径300m範囲における植生のつながりを考慮して設定した。</p>												

表 7-6-33(2) 重要な鳥類の予測結果 (チュウヒ)

項目	内容						
<p>工事の実施による影響の予測</p>	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p><採餌環境> 本種の主な採餌環境である草地は、事業実施区域周辺に分布するものの、工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により縮小する。なお、繁殖期高利用域（408.6ha）のうち、57.1ha（約14%）が事業実施区域内に分布している。</p> <p><営巣環境> 本種の主な営巣環境である草地は、事業実施区域周辺に分布するものの、工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により縮小する。なお、繁殖期高利用域（408.6ha）のうち、57.1ha（約14%）が事業実施区域内に分布しているが、営巣中心域については事業実施区域内に分布していない。</p> <p>営巣地のうち、木曾岬干拓地外の営巣地については事業実施区域から遠く離れていることから、工事の実施（重機の稼働及び資材の運搬）に伴い発生する騒音等による営巣環境の質的変化は生じないと考えられる。また、木曾岬干拓地内の営巣地については事業実施区域から相当程度離れていることから、工事の実施（重機の稼働及び資材の運搬）に伴い発生する騒音等による営巣環境の質的変化はほとんど生じないと考えられる。</p> <p><ねぐら環境> 工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主なねぐら環境の縮小は生じない。 また、ねぐら環境は事業実施区域から相当程度離れていることから、工事の実施（重機の稼働及び資材の運搬）に伴い発生する騒音等によるねぐら環境の質的変化はほとんど生じないと考えられる。</p> <p>以上のことから、本種の生息環境への影響はあると予測される。</p>						
<p>土地の存在及び供用による影響の予測</p>	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p><採餌環境> 本種の主な採餌環境である草地は、事業実施区域周辺に分布するものの、土地の存在（造成地の存在）により縮小する。なお、繁殖期高利用域（408.6ha）のうち、57.1ha（約14%）が事業実施区域内に分布している。</p> <p><営巣環境> 本種の主な営巣環境である草地は、事業実施区域周辺に分布するものの、土地の存在（造成地の存在）により縮小する。なお、繁殖期高利用域（408.6ha）のうち、57.1ha（約14%）が事業実施区域内に分布しているが、営巣中心域は事業実施区域内に分布していない。</p> <p>営巣地のうち、木曾岬干拓地外の営巣地については事業実施区域から遠く離れていることから、土地の供用（土地の利用及び発生車両の走行）に伴い発生する騒音等による営巣環境の質的変化は生じないと考えられる。また、木曾岬干拓地内の営巣地については事業実施区域から相当程度離れていることから、土地の供用（土地の利用及び発生車両の走行）に伴い発生する騒音等による営巣環境の質的変化はほとんど生じないと考えられる。</p> <p>（参考）供用時における建設作業騒音の予測結果</p> <table border="1" data-bbox="512 1765 1228 1832"> <thead> <tr> <th data-bbox="512 1765 802 1798">位置</th> <th colspan="2" data-bbox="802 1765 1228 1798">予測結果（騒音レベル）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="512 1798 802 1832">自然体験広場敷地境界</td> <td data-bbox="802 1798 1002 1832">L_{Aeq} : 56dB</td> <td data-bbox="1002 1798 1228 1832">L_{A5} : 51dB</td> </tr> </tbody> </table> <p><ねぐら環境> 土地の存在（造成地の存在）により本種の主なねぐら環境の縮小は生じない。 また、ねぐら環境は事業実施区域から相当程度離れていることから、土地の供用（土地の利用及び発生車両の走行）に伴い発生する騒音等によるねぐら環境の質的変化はほとんど生じないと考えられる。</p> <p>以上のことから、本種の生息環境への影響はあると予測される。</p>	位置	予測結果（騒音レベル）		自然体験広場敷地境界	L_{Aeq} : 56dB	L_{A5} : 51dB
位置	予測結果（騒音レベル）						
自然体験広場敷地境界	L_{Aeq} : 56dB	L_{A5} : 51dB					



- 凡例
- 最大行動圏
 - 95%行動圏
 - 高利用域
 - 営巣中心域
 - 推定営巣地

図 7-6-17 行動圏解析結果 (チュウヒ)

表 7-6-34 重要な鳥類の予測結果（ハイイロチュウヒ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・冬鳥。全国の平地から山地草原、農耕地、河川、干拓地に飛来するが局地的。 ・ネズミ、小鳥類などの獲物を見つけるとすばやく地上に降りて捕まえる。 ・ユーラシア大陸の亜寒帯や北アメリカ大陸で繁殖し、冬は南下する。 	
現地調査における 確認状況	確認状況	草地等において個体が確認された。 ・Dブロックでのねぐら入り及びねぐら立ちが確認された。 ・調査地域での営巣は確認されなかった。
	確認時期	R4 冬季
	確認位置	(鳥類調査) Cブロックにおいて1地点で1個体が確認された。 Cブロック：1地点（1個体） (猛禽類調査) 木曾岬干拓地内外で計69回確認された。 R4-[1月：21回、2月：27回、3月：21回]
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、草地と考えられる。	
工事の実施による 影響の予測	工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。 工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な採餌環境・ねぐら環境である草地が一部縮小するものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 以上のことから、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。	
土地の存在及び供用 による影響の予測	建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。 土地の存在（造成地の存在）により本種の主な採餌環境・ねぐら環境である草地が一部縮小するものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 以上のことから、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。	

表 7-6-35 重要な鳥類の予測結果（ツミ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥や旅鳥として飛来する。冬期は大半が南へ渡るが、越冬期の確認記録も少ない。北海道、本州、四国、九州で繁殖する。 ・丘陵地や山間部の混交林や、平野部の都市公園等に生息して繁殖する。 ・主に小型の鳥類を捕食する。 ・アカマツやヒノキなどで営巣することが多い。 	
現地調査における確認状況	確認状況	木曾岬干拓地外において個体が確認された。渡りの移動途中の個体と考えられる。 また、調査地域での営巣は確認されなかった。
	確認時期	R4 秋季
	確認位置	(鳥類調査) Gブロックにおいて1地点で1個体が確認された。 Gブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	<p>本種の生態及び現地調査による確認状況から、本種の生息環境は丘陵地や山地の樹林地と考えられるが、調査地域に同様の環境は存在しない。本種は調査地域の草地及び樹林地を採餌環境の一部として利用していると考えられる。</p>	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である丘陵地や山地の樹林地は存在しない。工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である丘陵地や山地の樹林地は存在しない。土地の存在（造成地の存在）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-36 重要な鳥類の予測結果（ハイタカ）

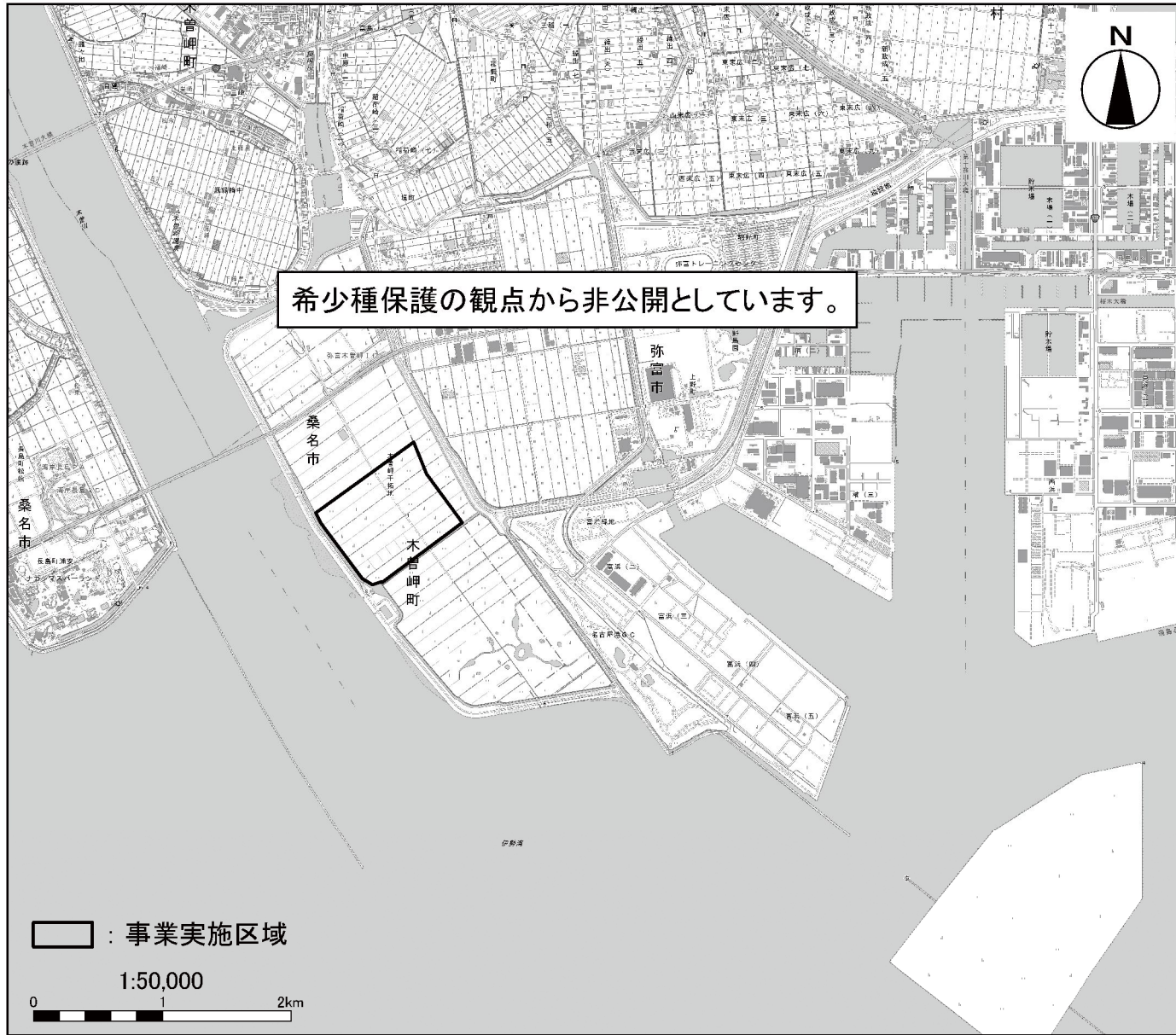
項目	内容	
生態	<p>・冬鳥。国内では本州中部以北で繁殖し、渡りの時期の春秋と冬期には全国で見られる。</p> <p>・低山から山地の森林に広く分布する。</p> <p>・小鳥類が主な餌である。</p> <p>・アカマツやカラマツなどの針葉樹に巣をかけ、4～5 卵の卵を産む。営巣環境としては、林内空間の閉じた若齢林を好む。</p>	
現地調査における確認状況	確認状況	<p>木曾岬干拓地外において個体が確認された。</p> <p>また、調査地域での営巣は確認されなかった。</p>
	確認時期	<p>R3 春季、冬季</p> <p>R4 冬季</p>
	確認位置	<p>(鳥類調査)</p> <p>A、Cブロックにおいて2地点で2個体が確認された。</p> <p>Aブロック：1地点（1個体）</p> <p>Cブロック：1地点（1個体）</p> <p>(猛禽類調査)</p> <p>木曾岬干拓地内外で計11回確認された。</p> <p>R3-[4月：1回、12月：2回]</p> <p>R4-[1月：4回、2月：4回]</p>
生息環境の分布状況	<p>本種の生態及び現地調査による確認状況から、本種の生息環境は山地の樹林地と考えられるが、調査地域に同様の環境は存在しない。</p> <p>本種は調査地域の草地及び樹林地を採餌環境の一部として利用していると考えられる。</p>	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である山地の樹林地は存在しない。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である山地の樹林地は存在しない。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-37(1) 重要な鳥類の予測結果（オオタカ）

項目	内容																
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・留鳥。国内では北海道、本州、四国で繁殖し、秋冬には全国でみられる。 ・餌は主に小鳥類。 ・本来は山地のアカマツでの営巣が普通であったが、松枯れにより現在ではスギや広葉樹に営巣することも普通になっている。耕地や林のある里山環境が理想と思われるが、近年は平地の公園や林で繁殖する例も多くなった。 																
現地調査における確認状況	確認状況	樹林地及び草地において個体が確認された。 また、令和3～4年に木曾岬干拓地内で繁殖が確認された。															
	確認時期	R4 冬季、春季、秋季 (鳥類調査) B、C、Dブロックにおいて5地点で4個体及び鳴き声(1個体)が確認された。 Bブロック：1地点(1個体) Cブロック：3地点(2個体・鳴き声1個体) Dブロック：1地点(1個体) (猛禽類調査) 木曾岬干拓地内外で計150回確認された。 R3-[4月：18回、5月：4回、6月：14回、7月：12回、8月：10回、12月：11回] R4-[1月：5回、2月：18回、3月：14回、4月：14回、5月：16回、6月：9回、7月：4回、8月：1回]															
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、樹林地及び草地と考えられる。 令和3年及び令和4年繁殖シーズンにおける行動圏解析結果は、図7-6-18に示すとおりであり、事業実施区域と行動圏(最大行動圏、95%行動圏、高利用域、営巣中心域)との位置関係は、下表に示すとおりである。																
<table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="491 1205 687 1272">行動圏の区分</th> <th data-bbox="687 1205 1029 1272">メッシュ数 [事業実施区域内/全体]</th> <th data-bbox="1029 1205 1369 1272">面積 (ha) [事業実施区域内/全体]</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="491 1272 687 1305">最大行動圏</td> <td data-bbox="687 1272 1029 1305">21/181</td> <td data-bbox="1029 1272 1369 1305">66.4/1192.8</td> </tr> <tr> <td data-bbox="491 1305 687 1339">95%行動圏</td> <td data-bbox="687 1305 1029 1339">21/ 88</td> <td data-bbox="1029 1305 1369 1339">66.4/ 579.9</td> </tr> <tr> <td data-bbox="491 1339 687 1373">高利用域</td> <td data-bbox="687 1339 1029 1373">15/ 30</td> <td data-bbox="1029 1339 1369 1373">58.3/ 197.7</td> </tr> <tr> <td data-bbox="491 1373 687 1417">営巣中心域*</td> <td data-bbox="687 1373 1029 1417">-</td> <td data-bbox="1029 1373 1369 1417">15.5/ 17.5</td> </tr> </tbody> </table>			行動圏の区分	メッシュ数 [事業実施区域内/全体]	面積 (ha) [事業実施区域内/全体]	最大行動圏	21/181	66.4/1192.8	95%行動圏	21/ 88	66.4/ 579.9	高利用域	15/ 30	58.3/ 197.7	営巣中心域*	-	15.5/ 17.5
行動圏の区分	メッシュ数 [事業実施区域内/全体]	面積 (ha) [事業実施区域内/全体]															
最大行動圏	21/181	66.4/1192.8															
95%行動圏	21/ 88	66.4/ 579.9															
高利用域	15/ 30	58.3/ 197.7															
営巣中心域*	-	15.5/ 17.5															
※営巣中心域：巣から半径300m範囲における植生のつながりを考慮して設定した。																	

表 7-6-37(2) 重要な鳥類の予測結果（オオタカ）

項目	内容
<p>工事の実施による影響の予測</p>	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p><採餌環境> 本種の主な採餌環境である草地は、事業実施区域周辺に広く分布するものの、工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により縮小する。なお、繁殖期高利用域（197.7ha）のうち、58.3ha（約29%）が事業実施区域内に分布している。</p> <p><営巣環境> 本種の主な営巣環境である樹林環境は事業実施区域周辺に分布するものの、工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により営巣木・営巣林が消失する。なお、繁殖期高利用域（197.7ha）のうち、58.3ha（約29%）が事業実施区域内に分布しており、営巣中心域（17.5ha）のうち、15.5ha（約89%）が事業実施区域内に分布している。</p> <p>また、営巣地は事業実施区域内に位置することから、工事の実施（重機の稼働及び資材の運搬）に伴い発生する騒音等による営巣環境の質的変化が生じると考えられる。</p> <p>以上のことから、本種の生息環境への影響は大きいと予測される。</p>
<p>土地の存在及び供用による影響の予測</p>	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p><採餌環境> 本種の主な採餌環境である草地は、事業実施区域周辺に広く分布するものの、土地の存在（造成地の存在）により縮小する。なお、繁殖期高利用域（197.7ha）のうち、58.3ha（約29%）が事業実施区域内に分布している。</p> <p><営巣環境> 本種の主な営巣環境である樹林地は、事業実施区域周辺に分布するものの、土地の存在（造成地の存在）により営巣木・営巣林が消失する。なお、繁殖期高利用域（197.7ha）のうち、58.3ha（約29%）が事業実施区域内に分布しており、営巣中心域（17.5ha）のうち、15.5ha（約89%）が事業実施区域内に分布している。</p> <p>以上のことから、本種の生息環境への影響は大きいと予測される。</p>



凡例

- 最大行動圏
- 95%行動圏
- 高利用域
- 営巣中心域
- 巣

希少種保護の観点から非公開としています。

□ : 事業実施区域

1:50,000

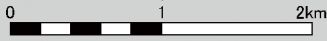


図 7-6-18 行動圏解析結果 (オオタカ)

表 7-6-38 重要な鳥類の予測結果（サシバ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥。本州には3月下旬から飛来して繁殖し、主に9月下旬から10月上旬に越冬地へ渡去する。 ・水田、畑、湿地、伐採跡地などの開けた土地で狩りを行うことが多く、谷に耕地が入り込んだ里山環境を主な生息地としている。 ・カエルなどの両生類や爬虫類、昆虫類を主な餌としている。 ・国内では青森県以南で繁殖する。三重県内の丘陵地帯で広く繁殖している。アカマツを好んで営巣する種であったが、近年はスギなどで繁殖する例が増えている。 	
現地調査における確認状況	確認状況	木曾岬干拓地内外において個体が確認された。渡りの移動途中の個体と考えられる。 また、調査地域での営巣は確認されなかった。
	確認時期	R3 春季
	確認位置	(猛禽類調査) 木曾岬干拓地内外で計2回確認された。 R3-[4月: 2回]
生息環境の分布状況	<p>本種の生態及び現地調査による確認状況から、本種の生息環境は丘陵地や山地の樹林地と考えられるが、調査地域に同様の環境は存在しない。本種は調査地域の草地及び樹林地を採餌環境の一部として利用していると考えられる。</p>	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である丘陵地や山地の樹林地は存在しない。工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である丘陵地や山地の樹林地は存在しない。土地の存在（造成地の存在）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-39 重要な鳥類の予測結果（コチヨウゲンボウ）

項 目	内 容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・冬鳥。開けた農耕地で越冬することが多い。地上でねぐらを取ることが知られている。 ・小鳥類を捕食するが、ネズミや昆虫なども狙う。 ・高緯度地域で繁殖し、冬は南へ渡り越冬する。 	
現地調査における確認状況	確認状況	木曾岬干拓地外において個体が確認された。 また、調査地域での営巣は確認されなかった。
	確認時期	R4 冬季、春季
	確認位置	(猛禽類調査) 木曾岬干拓地外で計 6 回確認された。 R4-[2 月： 2 回、 3 月： 4 回]
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、農耕地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である農耕地の縮小は生じない。</p> <p>また、木曾岬干拓地内において本種の繁殖は確認されなかった。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である農耕地の縮小は生じない。</p> <p>また、木曾岬干拓地内において本種の繁殖は確認されなかった。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	

表 7-6-40 重要な鳥類の予測結果（ハヤブサ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・留鳥。国内では北海道から九州、南西諸島、伊豆諸島等に分布する。 ・主に海岸や河川流域などの開けた環境にある断崖や岩場に生息するが、冬期には越冬個体などが中・小型の鳥類が集まる河口や河川流域、湖沼付近を狩場として高頻度で利用する。 ・餌は主に飛行している鳥類を足で蹴って仕留める。カラスを捕食することもある。 ・島嶼の断崖に営巣することが多い。近年は市街地のビルの窓辺や鉄塔の鉄骨の隙間に営巣したりする。 	
現地調査における確認状況	確認状況	木曾岬干拓地内外において個体が確認された。 また、調査地域での営巣は確認されなかった。
	確認時期	R3 春季、夏季 R4 春季
	確認位置	(鳥類調査) Gブロックにおいて2地点で3個体が確認された。 Gブロック：2地点（3個体） (猛禽類調査) 木曾岬干拓地内外で計3回確認された。 R3-[5月：1回、8月：1回] R4-[2月：1回]
生息環境の分布状況	<p>本種の生態及び現地調査による確認状況から、本種の生息環境は断崖や岩場と考えられるが、調査地域に同様の環境は存在しない。 本種は調査地域の草地及び樹林地を採餌環境の一部として利用していると考えられる。</p>	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である断崖や岩場は存在しない。 工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である断崖や岩場は存在しない。 土地の存在（造成地の存在）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-41 重要な鳥類の予測結果（オオムシクイ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国外では、ロシアの千島列島北部とサハリン、カムチャツカ半島で繁殖する。渡り途中の個体の記録地点は、北海道から本州、四国、九州、琉球諸島、大東諸島等、全国で記録がある。 ・ 国内の主な生息環境は亜高山帯の針広混交林や森林限界より上のハイマツ帯である。 ・ 国内では北海道知床半島の山岳、標高 1,000～1,500m 付近と千島列島南部のみで繁殖する。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地において鳴き声が確認された。渡りの移動途中の個体と考えられる。
	確認時期	R4 春季
	確認位置	Cブロックにおいて1地点で鳴き声（1個体）が確認された。 Cブロック：1地点（鳴き声1個体）
生息環境の分布状況	<p>本種の生態及び現地調査による確認状況から、本種の生息環境は、山地の樹林地と考えられるが、調査地域に同様の環境は存在しない。 本種は調査地域の草地及び樹林地を採餌環境の一部として利用していると考えられる。</p>	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である山地の樹林地は存在しない。工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である山地の樹林地は存在しない。土地の存在（造成地の存在）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-42 重要な鳥類の予測結果（アカハラ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・ 亜種アカハラ <i>T. c. chrysolaus</i> が、夏鳥として本州中部から北海道までの範囲で繁殖し、亜種オオアカハラ <i>T. c. orii</i> が、本州や西南諸島に飛来して越冬する。 ・ 愛知県では、亜種アカハラが夏鳥として標高の高い山地へ飛来して繁殖し、亜種オオアカハラが冬鳥として県内全域に飛来して越冬する。 ・ 地上で昆虫やミミズなどを捕食するほか、樹上で木の実を食べることもある。 ・ 亜種アカハラは、標高 1,000m 程度以上の高原にある疎林で繁殖する。繁殖期は 5 月下旬から 7 月。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地において個体が確認された。
	確認時期	R4 冬季
	確認位置	Cブロックにおいて 2 地点で 4 個体が確認された。 Cブロック：2 地点（4 個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、樹林地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-43 重要な鳥類の予測結果（コサメビタキ）

項 目	内 容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥として飛来し、九州以北の低山で繁殖する。 ・渡りの季節には渡りコースの山塊や半島だけでなく、河川敷や都市部の公園などでも見られる。 ・餌は主に昆虫やクモなどで、飛翔する昆虫を捕食することも多い。 ・夏期に丘陵地や山地の落葉広葉樹林に飛来して繁殖する。巣は樹木の横枝に蘚苔類や樹皮、クモの糸などを使って皿形に作り、表面にウメノキゴケを貼り付けて木のコブのようにみせる。 	
現地調査における確認状況	確認状況	樹林地において個体が確認された。渡りの移動途中の個体と考えられる。
	確認時期	R4 秋季
	確認位置	Cブロックにおいて4地点で6個体が確認された。 Cブロック：2地点（4個体） Dブロック：2地点（2個体）
生息環境の分布状況	<p>本種の生態及び現地調査による確認状況から、本種の生息環境は、丘陵地や山地の樹林地と考えられるが、調査地域に同様の環境は存在しない。本種は調査地域の草地及び樹林地を採餌環境の一部として利用していると考えられる。</p>	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である丘陵地や山地の樹林地は存在しない。工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>調査地域には、本種の主な生息環境である丘陵地や山地の樹林地は存在しない。土地の存在（造成地の存在）により本種の採餌環境の一部である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-44 重要な鳥類の予測結果（キビタキ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・夏鳥。南千島から日本全国で繁殖し、冬はインドシナ半島、フィリピン、ボルネオなどへ渡る。 ・落葉広葉樹林に生息し、樹冠内で空中の昆虫、蜘蛛などを捕食する。そのため、生息には密生した林ででなく、樹冠内に広い空間をもつ林が必要。 	
現地調査における 確認状況	確認状況	樹林地において鳴き声が確認された。
	確認時期	R4 春季
	確認位置	B、Cブロックにおいて2地点で鳴き声（2個体）が確認された。 Bブロック：1地点（鳴き声1個体） Cブロック：1地点（鳴き声1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、樹林地と考えられる。	
工事の実施による 影響の予測	工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。 工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。	
土地の存在及び供用 による影響の予測	建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。 土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。	

c) 両生類

重要な両生類の予測結果を表 7-6-45 に示す。

表 7-6-45 重要な両生類の予測結果（トノサマガエル）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・本州から四国、九州地方にかけての広い範囲に分布する。 ・水田をおもな生息地とするが、池沼や河川などにも見られる。 ・クモ、昆虫、ムカデなどの他に、カエルをも捕食する。 ・主に水田が大きな繁殖場所であるが、河川敷の水たまりや小さな池などでも産卵する。繁殖期は4～6月だが、一繁殖集団による繁殖ピークは非常に短く、一週間ほどでほぼ終了する。 	
現地調査における 確認状況	確認状況	水路において個体が確認された。
	確認時期	R4 夏季
	確認位置	Aブロックにおいて2地点で2個体が確認された。 Aブロック：2地点（2個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、水域と考えられる。	
工事の実施による 影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である水域の縮小は生じない。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	
土地の存在及び供用 による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である水域の縮小は生じない。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	

d) 陸上昆虫類

重要な陸上昆虫類の予測結果を表 7-6-46～表 7-6-52 に示す。

表 7-6-46 重要な陸上昆虫類の予測結果（ノシメトンボ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道から九州地方にかけて分布する。 ・成熟成虫は、水田や湿地、池沼周辺で見られる。未熟成虫は、発生地を離れる個体もあり、市街地付近では神社林などで摂食しながら過ごすこともある。 ・成虫は 6 月頃より羽化し、秋になると生殖行動が見られる。卵のまま越冬し、翌春孵化して初夏に羽化する年一化である。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地において個体が確認された。
	確認時期	R4 秋季
	確認位置	A、B、C ブロックにおいて 3 地点で 3 個体が確認された（直接観察及び採取にて確認）。 A ブロック：1 地点（1 個体） B ブロック：1 地点（1 個体） C ブロック：1 地点（1 個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、湿性草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。 工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。	
土地の存在及び供用による影響の予測	建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。 土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。	

表 7-6-47 重要な陸上昆虫類の予測結果（コオイムシ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道、本州、四国、九州に分布する。 ・浅い池沼や水田、休耕田、河川など、比較的開けた水域に生息する。 ・オタマジャクシ、小魚、ヤゴ、巻貝などを捕食する。 ・5～6月頃に雌は雄の背面に卵を並べて産み付ける。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地付近において個体が確認された。
	確認時期	R4 夏季
	確認位置	Bブロックにおいて2地点で2個体が確認された（直接観察及び採取にて確認）。 Bブロック：2地点（2個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、水域と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である水域の縮小は生じない。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である水域の縮小は生じない。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響はないと予測される。</p>	

表 7-6-48 重要な陸上昆虫類の予測結果（ハイイロボクトウ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道、本州、四国、九州の湿地に局所的に産する。 ・食草はヨシ（イネ科）が知られる。 ・年1化、6～7月に出現する。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地付近において個体が確認された。
	確認時期	R4 春季
	確認位置	A、C、D、Eブロックにおいて5地点で22個体が確認された（ライトトラップにて確認）。 Aブロック：1地点（9個体） Cブロック：1地点（5個体） Dブロック：2地点（2個体） Eブロック：1地点（6個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、湿性草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-49 重要な陸上昆虫類の予測結果（ミズアブ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道、本州、四国、九州に分布する。 ・かつては水田にも生息し、かなり広くみられた種。 ・幼虫は肉食性で水性。 ・年1化、初夏の頃出現する。10～50度の水温に適応していて、温泉でも発生することができる。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地において個体が確認された。
	確認時期	R4 秋季
	確認位置	Dブロックにおいて1地点で1個体が確認された。（直接観察及び採取にて確認） Dブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、湿性草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-50 重要な陸上昆虫類の予測結果（コガムシ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道、本州、西国、九州、対馬に分布する。 ・低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。 ・水田や河川敷の水たまりなど不安定な止水域で繁殖をするが、ため池など安定した水域では繁殖しない。成虫は灯火に飛来する。 ・成虫は水草を食べ、幼虫は肉食性。 	
現地調査における確認状況	確認状況	湿性草地において個体が確認された。
	確認時期	R4 夏季、秋季
	確認位置	A、Bブロックにおいて6地点で6個体が確認された（直接観察及び採取・ライトトラップにて確認）。 Aブロック：3地点（3個体） Bブロック：3地点（3個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、湿性草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-51 重要な陸上昆虫類の予測結果（コガタガムシ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・本州、四国、九州、琉球に生息する。 ・緩やかな流れの用水路や池沼の水位が浅く水生植物が繁茂する止水域に生息し、灯火にも飛来する。 ・成虫は泡を固めた卵囊を生み、孵化した幼虫は巻貝などの水生動物を食べ、成長した幼虫は上陸して蛹化、羽化した成虫は再び水中に戻る。 	
現地調査における確認状況	確認状況	水路付近の草地において個体が確認された。
	確認時期	R4 春季
	確認位置	Dブロックにおいて1地点で1個体が確認された（直接観察及び採取にて確認）。 Dブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、湿性草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である湿性草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-52 重要な陸上昆虫類の予測結果（アオスジクモバチ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・本州、四国、九州に分布する日本固有種。 ・海浜や沿岸部の草地及び河川敷に生息する。 ・イソコモリグモなど徘徊性クモ類を狩る。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地において個体が確認された。
	確認時期	R4 春季
	確認位置	Eブロックにおいて1地点で1個体が確認された（直接観察及び採取にて確認）。 Eブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、湿性草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

e) クモ類

重要なクモ類の予測結果を表 7-6-53～表 7-6-58 に示す。

表 7-6-53 重要なクモ類の予測結果（オニグモ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。 ・市街地から郊外にかけて生息する。 ・昆虫類を餌とする。 	
現地調査における 確認状況	確認状況	草地及び樹林地等において個体が確認された。
	確認時期	R4 春季、夏季、秋季
	確認位置	A、C、D、Eブロックにおいて8地点で17個体が確認された。 Aブロック：2地点（2個体） Cブロック：4地点（13個体） Dブロック：1地点（1個体） Eブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、草地及び樹林地と考えられる。	
工事の実施による 影響の予測	工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。 工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。	
土地の存在及び供用 による影響の予測	建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。 土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である草地及び樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。 このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。	

表 7-6-54 重要なクモ類の予測結果（コガネグモ）

項 目	内 容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本州、四国、九州、南西諸島に分布する。 ・ 草本類の間に垂直円網を張り、X字状の糸（かくれ帯）を付け、その中央に止まる。一般に、日当たりのよいところに多い。 ・ 昆虫等を餌とする。 	
現地調査における 確認状況	確認状況	草地等において個体が確認された。
	確認時期	R4 春季、夏季
	確認位置	<p>A、B、C、D、Eブロックにおいて 122 地点で 207 個体が確認された。</p> <p>Aブロック：1 地点（1 個体） Bブロック：14 地点（24 個体） Cブロック：74 地点（125 個体） Dブロック：23 地点（46 個体） Eブロック：10 地点（11 個体）</p>
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、草地と考えられる。	
工事の実施による 影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用 による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-55 重要なクモ類の予測結果（シロオビトリノフンダマシ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・本州、四国、九州、南西諸島に分布する。 ・主に山間部の草地に生息する。日中はイネ科植物の葉裏に脚を縮めて止まっている。夜行性で草間に同心円状の水平円網を張り活動する。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地において個体が確認された。
	確認時期	R4 夏季、秋季
	確認位置	A、Cブロックにおいて2地点で2個体が確認された。 Aブロック：1地点（1個体） Cブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-56 重要なクモ類の予測結果（アカイロトリノフンダマシ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・本州、四国、九州に分布する。 ・林縁部の笹原やススキの草原を好み、日中はそれらの葉裏に静止している。 ・夕方から活動を始め、同心円状の水平円網を張り、主として蛾の仲間を捕らえる。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地において個体が確認された。
	確認時期	R4 夏季
	確認位置	Bブロックにおいて1地点で1個体が確認された。 Bブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-57 重要なクモ類の予測結果（エビチャコモリグモ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・本州、四国、九州に分布する。 ・主に河川敷や草地等を徘徊するが、草の根元や土の窪みなどに潜んでいることもある。 ・成体は一年中確認される。多くのコモリグモ類の雌は、卵のうを糸器につけて徘徊するが、本種は卵のうを糸器につけはするものの、あまり徘徊はせずに地中に浅い穴を掘って潜んでいることが多い。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地において個体が確認された。
	確認時期	R4 春季
	確認位置	D、Eブロックにおいて2地点で2個体が確認された。 Dブロック：1地点（1個体） Eブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

表 7-6-58 重要なクモ類の予測結果（オビジガバチグモ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・本州、四国、九州に分布する。 ・河川敷や草原に棲み、地表を素早く徘徊する。 	
現地調査における確認状況	確認状況	草地において個体が確認された。
	確認時期	R4 夏季
	確認位置	Dブロックにおいて1地点で1個体が確認された。 Dブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、草地と考えられる。	
工事の実施による影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である草地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

f) 陸生貝類

重要な陸産貝類の予測結果を表 7-6-59 に示す。

表 7-6-59 重要な陸産貝類の予測結果（オオウエキビ）

項目	内容	
生態	<ul style="list-style-type: none"> ・本州から九州に分布する。 ・山麓地の湿った環境下に生息し、適度な湿度を保った腐葉土やリター層が豊富な雑木林は、本種が生息するための好環境である。 	
現地調査における 確認状況	確認状況	樹林地において個体が確認された。
	確認時期	R4 秋季
	確認位置	Aブロックにおいて1地点で1個体が確認された。 Aブロック：1地点（1個体）
生息環境の分布状況	本種の生態及び現地調査による確認状況から、調査地域における本種の主な生息環境は、樹林地と考えられる。	
工事の実施による 影響の予測	<p>工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。</p> <p>工事の実施（樹木の伐採・処理、土地の造成及び工事用道路等の建設）により本種の主な生息環境である樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	
土地の存在及び供用 による影響の予測	<p>建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。</p> <p>土地の存在（造成地の存在）により本種の主な生息環境である樹林地に一部縮小が生じるものの、同様の環境は事業実施区域周辺に広く分布する。</p> <p>このため、本種の生息環境への影響は極めて小さいと予測される。</p>	

3) 環境保全措置の検討

(1) 環境保全措置の検討の状況

工事の実施（重機の稼働、資材の運搬、樹木の伐採・処理、土地の造成、工事用道路等の建設）及び土地の存在及び供用（造成地の存在、土地の利用、発生車両の走行）に係る陸生動物に関する影響について、事業者の実行可能な範囲内で環境影響をできる限り回避又は低減することを目的として、環境保全措置の検討を行った。

① チュウヒ

チュウヒについては、工事の実施及び土地の存在・供用による生息環境への影響があると予測されたため、事業者の実行可能な範囲内で環境影響をできる限り回避又は低減することを目的として表 7-6-60 に示すとおり、環境保全措置の検討を行った。

表 7-6-60 環境保全措置の検討の状況（チュウヒ）

環境保全措置	実施の適否	適否の理由
低騒音型建設機械の採用	適	低騒音型の建設機械を採用することにより、事業実施区域及び周辺を生息範囲とする動物への影響を低減することが見込まれる。
工事従事者への講習・指導	適	工事区域外への立ち入りや営巣地への立ち入りを制限することにより、人為的な攪乱による影響の低減が見込まれる。
コンディショニング（馴化）	適	営巣環境・採餌環境に配慮した段階的施工により、建設作業による影響の低減が見込まれる。
営巣環境・採餌環境の整備（保全区の整備）	適	営巣環境・採餌環境としての機能を高める措置を講じることにより、影響の低減が見込まれる。

② オオタカ

オオタカについては、工事の実施による生息環境への影響が大きいと予測されたため、事業者の実行可能な範囲内で環境影響をできる限り回避又は低減することを目的として表 7-6-61 に示すとおり、環境保全措置の検討を行った。

表 7-6-61 環境保全措置の検討の状況（オオタカ）

環境保全措置	実施の 適否	適否の理由
低騒音型建設機械の採用	適	低騒音型の建設機械を採用することにより、事業実施区域及び周辺を生息範囲とする動物への影響を低減することが見込まれる。
工事従事者への講習・指導	適	工事区域外への立ち入りや営巣地への立ち入りを制限することにより、人為的な攪乱による影響の低減が見込まれる。
コンディショニング（馴化）	適	営巣環境・採餌環境に配慮した段階的施工により、建設作業による影響の低減が見込まれる。
営巣木の移動促進	適	オオタカを対象とした代替巣の設置等を行うことにより、影響の緩和が見込まれる。

(2) 環境保全措置の実施主体、方法その他の環境保全措置の実施の内容

① チュウヒ

チュウヒに関する環境保全措置としては、「低騒音型建設機械の採用」、「工事従事者への講習・指導」、「コンディショニング（馴化）」及び「営巣環境・採餌環境の整備（保全区の整備）」を実施する。保全区については、木曾岬干拓地北部における環境影響評価をうけ、特にチュウヒの生息に適した環境の形成を目的として実施されてきたヤナギなどの樹木伐採や外周水路沿いの草刈り等の環境改善を専門家の技術的助言を得ながら継続しながら、適切に維持管理を行うものとする。

環境保全措置の実施主体は事業者であり、環境保全措置の実施内容等の検討結果を表 7-6-62(1)～(4)に示す。なお、環境保全措置の具体的な位置、仕様等については、事業実施の施工計画段階で専門家の技術的助言を踏まえて検討する。

表 7-6-62(1) 環境保全措置の検討結果

実施内容	種類	低騒音型建設機械の採用
	位置	事業実施区域
保全措置の効果		事業実施区域及び周辺を生息範囲とする種への影響を低減することができる。
他の環境への影響		騒音への影響が緩和される。

表 7-6-62(2) 環境保全措置の検討結果

実施内容	種類	工事従事者への講習・指導
	位置	事業実施区域
保全措置の効果		人為的な攪乱による影響を低減できる。
他の環境への影響		なし

表 7-6-62(3) 環境保全措置の検討結果

実施内容	種類	コンディショニング（馴化）
	位置	事業実施区域
保全措置の効果		建設作業による影響の低減が見込まれる。
他の環境への影響		なし

表 7-6-62(4) 環境保全措置の検討結果

実施内容	種類	営巣環境・採餌環境の整備（保全区の整備）
	位置	保全区
保全措置の効果		営巣環境・採餌環境としての機能を高める措置を講じることにより、影響の低減が見込まれる。
他の環境への影響		なし

② オオタカ

オオタカに関する環境保全措置としては、「低騒音型建設機械の採用」、「工事従事者への講習・指導」、「コンディショニング（馴化）」及び「営巣木の移動促進」を実施する。

環境保全措置の実施主体は事業者であり、環境保全措置の実施内容等の検討結果を表 7-6-63(1)～(4)に示す。なお、環境保全措置の具体的な位置、仕様等については、事業実施の施工計画段階で専門家の技術的助言を踏まえて検討する。

表 7-6-63(1) 環境保全措置の検討結果

実施内容	種類	低騒音型建設機械の採用
	位置	事業実施区域
保全措置の効果		事業実施区域及び周辺を生息範囲とする種への影響を低減することができる。
他の環境への影響		騒音への影響が緩和される。

表 7-6-63(2) 環境保全措置の検討結果

実施内容	種類	工事従事者への講習・指導
	位置	事業実施区域
保全措置の効果		人為的な攪乱による影響を低減できる。
他の環境への影響		なし

表 7-6-63(3) 環境保全措置の検討結果

実施内容	種類	コンディショニング（馴化）
	位置	事業実施区域
保全措置の効果		建設作業による影響の低減が見込まれる。
他の環境への影響		なし

表 7-6-63(4) 環境保全措置の検討結果

実施内容	種類	営巣木の移動促進
	位置	木曾岬干拓地内の樹林地（保全区及びその周辺以外） [図 7-6-19 参照]
保全措置の効果		代替巣の設置等を行うことで事業の実施により消失する営巣木・営巣林を別の場所に創出することにより、影響の緩和が見込まれる。
他の環境への影響		なし（当該措置の実施によるチュウヒへの影響を低減するため、実施位置を「保全区及びその周辺以外」としている。）
影響の回避又は低減が困難である理由		土地の安定性等を考慮の上、建設発生土ストックヤード計画地の位置・規模等を計画しているため、工事の実施による影響（営巣木の消失）の回避又は低減が困難である。
損なわれる環境及び創出される環境の位置容等		【損なわれる環境】 営巣林（事業実施区域内の防風林（クロマツ）） 【創出される環境】 営巣林（木曾岬干拓地内のクロマツ群落等が分布する樹林地（保全区及びその周辺以外））



凡 例

ヤナギタデ群落	ヤマアワ群落	クロマツ群落
オオイヌタデ - オオクサキビ群落	シナダレスズメガヤ群落	クロチク群落
ヒメムカシヨモギ - オオアレチノギク群落	チガヤ群落	ナンキンハゼ群落
オヒシバ - アキメシバ群集	コゴメイ群集	芝地
セイタカアワダチソウ群落	ジャヤナギ - アカメヤナギ群集 (低木林)	人工裸地
ヨシ群落	メダケ群集	構造物
ヨシ - セイタカアワダチソウ群落	クズ群落	道路
オギ群落	ヌルデ - アカメガシワ群落	開放水域
オギ - セイタカアワダチソウ群落	ウバメガシ群落	

図 7-6-19 環境保全措置（営巣木の移動促進）の想定位置

4) 事後調査

(1) 事後調査の必要性

予測は、重要な種の生息に及ぼす影響の程度を生態学的な知見や類似事例を参考に行っていることから、不確実性は小さいと考えられるが、環境保全措置（低騒音型建設機械の採用、工事従事者への講習・指導、コンディショニング（馴化）、営巣木の移動促進及び営巣環境・採餌環境の整備（保全区の整備））については、その効果に係る知見が不十分であると考えられることから、表 7-6-64 に示すとおり、事後調査を実施するものとする。

なお、事後調査の実施時期及び実施方法等については、事業実施段階において、専門家の技術的助言を踏まえて検討し、適切に事後調査を実施する。

表 7-6-64 事後調査の内容

調査項目	調査内容
チュウヒ及びオオタカのモニタリング調査	○調査時期 工事期間中、供用期間中 ○調査範囲 事業実施区域及びその周辺 ○調査方法 定点観察調査による生息・繁殖状況の確認

(2) 事後調査の結果により環境影響の程度が著しいことが明らかとなった場合の対応の方針

当該事業に起因した、事前に予測し得ない環境影響の程度が著しいことが明らかとなった場合は、関係機関と協議し、専門家の技術的助言を得ながら、必要に応じて適切な措置を講じる。

5) 評価

(1) 評価の手法

① 回避又は低減に係る評価

対象事業の実施による陸生動物に関する影響が、事業者により実行可能な範囲内でできる限り回避され、又は低減されており、必要に応じその他の方法により環境の保全についての配慮が適正になされているかどうかについて見解を明らかにすることにより行った。

(2) 評価の結果

① 回避又は低減に係る評価

工事中においては、工事施工ヤードは建設発生土ストックヤード計画地内を極力利用し、工事用道路は既存道路を利用することにより、工事による改変を最小限に抑える計画としている。

供用時においては、建設発生土の搬出入用道路は、既存道路を利用する計画としている。

予測の結果、チュウヒ及びオオタカを除く陸生動物については、生息環境への影響はない又は極めて小さいと予測された。

チュウヒについては、環境保全措置として、「低騒音型建設機械の採用」、「工事従事者への講習・指導」、「コンディショニング（馴化）」及び「営巣環境・採餌環境の整備（保全区の整備）」を実施することとしている。また、オオタカについては、環境保全措置として、「低騒音型建設機械の採用」、「工事従事者への講習・指導」、「コンディショニング（馴化）」及び「営巣木の移動促進」を実施することとしている。なお、環境保全措置の効果に係る知見が不十分であることから、事後調査を実施する。

これらのことから、工事の実施及び土地の存在及び供用に係る陸生動物に関する影響は、事業者により実行可能な範囲内でできる限り回避又は低減されていると評価する。